

〔前編〕薩藩舊記雜錄 四十

薩摩久志浦九玉社

奉造立娑婆世界南瞻部州久志浦九玉大明神一字、聖衆天中天 伽陵頻伽聲 大檀那大梵天王 大檀那島 右意趣者、奉爲天長地久、御願 哀感衆生者 我等今敬禮 大願主帝釋天王 當檀那嶋

大檀那島津久志家親

津薩摩守忠興 信心施主中原久志家親 永正十五年戊寅 結緣衆等

親當那島津忠綱

圓滿、殊者信心大檀那等御息災安全、國土泰平、諸人快樂故、奉造立旨如件、大勸進大工 津駿河守忠綱 願主當祝種吉 九月廿七日 結緣衆等

小工

折田年兼

小工

〔土佐國古文叢〕十

土佐大領權現社上棟

奉上棟大領權現御社、于時永正十五年季戊寅十一月十五日、大工藤原稔次・藤原盛康、鍛冶有之、本願主盛貞・衛門太郎兵衛・右近兵衛・裏三郎衛門・權右衛門、筆者榮秀敬白、御社二度之造立也、

右一通、安藝郡魚梁瀬村大領權現ニ藏ル棟札也、武藤平道謂、盛貞以下ノ人ハ、門脇氏也、門脇氏ノ系圖、南路志卷六ニ見タリ、

土佐安田八幡宮棟札

〔土佐國蠹簡集〕二

八幡宮、永正十五年戊寅仲冬十四日、大檀那惟宗朝臣次郎左衛門尉親信、過去前參州大守 滿翁眞覺禪定門、

右安田八幡棟札凡五枚

土佐室津八幡宮棟札

奉造立當社八幡宮上棟葺、護持信心大願主惟宗右兵衛允長氏、永正拾五戊寅曆十二月二日、

右安喜郡室津八幡棟札、

〔福山志料〕二十二 沼隈郡 神明宮内外二社

備後神村神明宮修造

鏡山ニアリ、○中六郡志ニ、○中又永正十五年戊寅十一月十六日、修覆成就、遷宮書付、神主藤原佐々木石見守光秀ト云アリ、

〔古代取集記錄〕○播磨 一同十五年戊寅十二月日、大寺聖靈權現社頭大破之間、爲修理造

播磨斑鳩寺聖靈權現社ノ修造

營下造興行、則寺門ヨリ番匠之太郎四郎大夫・左衛門五郎大夫二人召下沙汰之、法隆寺寺家ヨリ廿貫文下行之、并地下段錢仁參拾貫文打加了、其外者圓山新兵衛方、檜木柱十本・釘以下寄進之也、

永正十五年雜載

于時在庄湯屋坊快親
東政所代曉秀

〔春日社司祐維記〕 戊子三月

一二日、夜大雨大風也、

一二日、大鳥居御榑、八ノ時分ニ顛倒之、上ノ環クワン拔テ、梢戌亥方、本□辰巳方へ顛倒之給へリ、

一廿一日、早朝ニ大鳥居御榑被立改了、今度者京都へ注進ハ無之、去四日、寺門(興福寺)へ京都へ可有注進之通被相伺之処、寺門ノ返条一向無之間、不及注進也、最初于寺門不及注進者、京都へ可申之也、既寺門へ披露之上者、寺門之衆議ニ可相任也ト云々、但於御神木者、可被立改旨、社中衆議一決也、

〔佐賀領神社佛閣鐘銘〕 佐嘉郡大堂社鐘銘一鐘七枚

龔奉寄進日域關右道筑後州三池北郷今福原村若宮八幡大菩薩、

大檀那常陸守源親貞(三池)并施主弥次郎親信

願主平永主殿助貞家

昔永正十五年戊寅孟夏十三日

勸進法珍

〔前編薩藩舊記雜錄〕 四十二

春日社大鳥居ノ榑顛倒ス

立直

筑後三池若宮八幡宮鐘銘

薩摩阿多郡上宮權現鏡銘

島津忠幸

紀伊木本西莊八幡宮幔幕注文

賀太莊

阿多上宮熊野權現ニアリ、
一御鏡 堅横貳尺七寸方・鏡・銘、一面

但、本尊弥陀左右花立、眞鍮作花有、

右裏板ニ、大願主嶋津藤原朝臣子孫繁昌忠幸、大日本國薩摩阿多郡上宮權現一字、永正十五年戊寅

五月廿一日、但、忠幸公御自筆と申傳候、

〔山本文書〕 ○紀伊

(編纂書)
〔八幡宮社内納之、〕

木本西庄幔幕注文

一西廳幕二帖、同御子廳幕一帖、合三帖、

一差繩ノ長サ、九尋一尺二寸、

一乳ノ数、各廿八充、

一幕ノ加持ノ壇、荒蓆一枚、表敷一枚、瓶子ヘイシ一双、太刀一振、昆布二卷、棗九合、串柿一把、

幣紙一帖、立花ハカシハノ木、

右於醫德寺縫之、賀太庄別當加持、五百文、加持ノ布施二帖ノ分、二百文、同一帖ノ分、合七百文、此外祝言飯・酒・素麵等、住持・供僧窪坊・別當・地下長二人相伴、
一八幡宮ノ三字、住持祐稟書之、

右地下ヨリ入目等悉出之、

永正十五年戊寅八月十日

前鷺峰現醫德住持授生叟祐稟(花押)

〔永正十五年道者日記〕

(表紙)

「つちのへ

坂東へ廿二とし下郷

虎之年

久保倉藤三

永正拾五年十二月廿五日

御道者日記

」

東上野

伊勢御師
久保倉藤三
坂東道者
日記

紀伊醫德
住持祐稟

あか岩、ひかしかうつけ
うちた弥二郎殿、二百文

帯 一すち

同さくの大郎殿、百文

おひ一すち

ふねこし三郎二郎、百文

おひ一すち

あなやま
堤たんちやう殿、一貫文

おひ四すち

あをやき
もろ殿、二百文

おひ二すち

在所、たてこやし
梅澤はやとう殿、二百文

おひ一すち

たてはやし
てしかはらあふみ殿、五百文

二すち

あか岩
やとう殿、百文

おひ一すち

あか岩けんこ
五郎四郎殿、百文

一すち

同
藤七殿、百文

一すち

まみ
同五郎三郎殿、百文

一すち

ふねこし
弥五郎殿、百文

一すち

同
同四郎二郎殿、百文

一すち

けんこ
同五郎三郎殿、百文

一すち

在所ま、い木
くか原六郎二郎殿

みやけなし

同彦四郎殿、百文

おひ一すち

同又五郎殿、百文

一すち

同ひこ三郎殿、百文

一すち

在所あかなり
中村彦四郎殿、二百文

一すち

とひせ木崎殿

こいつみ分

とみおか
豊前殿、一貫文

うすいた一たん

同
つしま殿、二分

同一たん

永正十五年雜載

小泉分

同 ぬいの助殿、二分

同 むくの助殿、一貫文

加藤かけい殿、二百文

とみいなしやうけ殿、一貫文

同 子 かすへ殿、二百文

いしわら源五郎殿、二百文

石川 さるノとし 五郎殿、三百文

き村やとう三郎殿、二百文

在所ハありた 弘田二郎左衛門殿、布三河

柳田かす衛殿、布一つしりかい

ためま新兵へ殿

しもつけの國

てんみやうのふん

飯塚 後下一貫文 かも助殿、こん卅

同 あかね一たん はやとう殿、あかね一たん せめ物一たん

同一たん

おひ一たけ

おひ二すち

おひ一たけ

同二筋

おひ一すち

同二すち

おひ二すち

おひ一すち こんさけを一すち

おひ二すち

おひ一すち

あついた二たん

おひ半たけ

同 いつみ殿、三百

同 つしま殿、かま二つ

在所とむろ 同 かすへ殿、在所とむろ せめ物三たん

在所ほりこめ 同 六郎二郎殿、在所ほりこめ せめ物一たん

同 藤大殿

かなや 大河左衛門尉太郎殿、五貫文

原 木村志源大殿

原青 不山藤二郎殿、百文

在所高山 ち坂かす衛殿

飯塚弥内大郎殿、百文

こんこ 彦七殿、百文

小六殿

あいもの二郎五郎殿

あい物 おんたかすへの助殿、百文

大郎四郎殿、百文

おひ半たけ

おひ一たけ

あついた一たん

おひ一たけ

あついた一たん

おひ一すち

一すち

一すち

一すち

一すち

くし

くし

おひ一すち

おひ一すち

辻道せん

ゆもと平三郎殿

木村新兵へ殿

兵藤二郎四郎殿、百文

飯塚新左衛門殿、百文

いゝた源三郎殿、百文

いゝた弥二郎殿、百文

いゝたゑもん二郎殿、百文

けんこおんた彈正殿、百文

大郎四郎殿、百文

あゝ大郎左衛殿、百文かみ十帖

河田藤大郎殿、百文

同藤三郎殿、百文

飯野藤二郎殿、百文

いゝつか藤九郎殿

くし

くし

おひ一すち

一すち

一すち

一すち

一すち

くし

おひ一すち

一すち

一すち

おひ一すち

一すち

一すち

一すち

おやま源七殿、百文

ゆまゝ雅樂助殿、そめ物一たん

岩本彦四郎殿、百文

にいゝ藤三殿

小林う大殿、百文

かなやのこうしおの口大郎五郎殿、二百文

ひちさへもん五郎殿、百文

弥六殿、百文

太田衛門二郎殿、百文

五郎三郎殿、百文

しいな藤七殿、百文

かなやいんてい二郎大郎殿

けなけな四郎殿

大しやく大河六郎四郎殿

同 たくみ殿

一すち

おひ一たけ

おひ一すち

一すち

一すち

一すち

一すち

一すち

一すち

一すち

一すち

一すち

一すち

おひ一すち

中さご左衛門五郎殿、百文
 おくさへちさへもん殿、百文
 大河孫三郎殿、百文
 河田藤五郎殿
 飯塚五郎兵へ殿、百文
 しやうつかおくの五郎殿
 六郎二郎殿、百文
 おく澤岩五郎殿、百文
 須藤いづみ殿、五百文
 飯つかいや大郎殿、二百文
 をの寺
 かめた殿、十本
 しもつけの國
 皆川分
 みなハハ殿
 植竹よもの助殿、馬一疋

おひ一すち
 一すち
 一すち
 くし
 おひ一すち
 おひ一すち
 一すち
 座一く
 一すち
 おひ一すち
 打おひ一すち・ゆ且ん一分
 あついた一たん

みな川七郎殿
 ほと嶋五郎左衛門殿、百文
 智悦、らんそく卅
 吹上
 うへ竹膝付殿
 植竹上様
 膝付殿上様
 吹上
 すゝきてハ入阿み殿
 みのわたぬいの助殿、百文
 をちあいさと殿
 在所とひ田しもつけ
 いけさハうきやうすけ殿、五百文
 うたの助
 くりハら殿 路様御返、
 在所くほ嶋
 在所あかはま
 むさし田中八郎二郎殿、二百文
 むさし田中七郎左衛門殿
 在所むれ
 むさし田中うちた殿

座一く
 おひ一すち
 一すち
 二すち
 一すち
 一すち
 おひ一すち
 おひ一すち
 一すち
 一すち

品川分

永正十五年雜載

鈴木民部殿、百文

おひ一すち

宇田川宗左衛門殿、こうしもん十・かん一つ、

おひ一たん

同 源五郎殿

一すち

吉田九郎三郎殿

一すち

左衛門尉大郎殿

一すち

高田平次大郎殿、五十文

一すち

大堀ひこ三郎殿、三百文

二すち

鳥海式部殿、尾貳左

一すち

賀藤正清、甲一はね

うすいた一たん

藏山大郎四郎殿

二すち

すけ左衛門殿

一すち

國崎八郎大郎殿

一すち

鳥海左衛門尉殿、百文

帶一すち

大堀おい之助殿

一たけ

大塚こん六殿

一たけ

おや五郎左衛門殿、花たて

一すち

岩瀬七郎左衛門殿、二百文

二すち

藏方彌三郎殿

二すち

石かき三郎大郎殿

一すち

岩瀬孫左衛門殿

一すち

宇田河五郎三郎殿

一すち

鈴木大郎左衛門殿

帶二すち

田所彦二郎殿

一すち

町田左衛門大郎殿

一すち

同三郎二郎殿、百文

一すち

石橋兵衛三郎殿

帶一すち

渡柳彦三郎殿

二すち

宮田六郎左衛門殿

一すち

白井彈正殿、かなむき二帖・かん一つ、

小八た一たん

村田大左衛門殿

一すち

おく
う三郎殿、百文

和井田孫衛門殿、こうし五十帖

一すぢ

同藤左衛門殿、こうし廿帖

一すぢ

海老原殿

一すぢ

彦二郎殿

一すぢ

こわりきや石井
二郎三郎殿、おへい・らんそく十てう、

一すぢ

くまのや
六郎左衛門殿

一すぢ

こんやう
波田野大郎二郎殿

池田源六殿

一すぢ

大城ひこ大殿

帯一すぢ

こにし江戸
彦四郎殿、百文

一すぢ

江戸
同八郎大郎殿、百文

一すぢ

江戸
渡柳五郎大郎殿、花一きん

二すぢ

江戸
鈴木五郎三郎殿

二すぢ

和井田いづみ殿、もち米一駄

あついた二たん

同う左衛門殿、こうし二百帖

三すぢ

いつみ殿うち衆

二すぢ

同まこ大殿、かん一つ

つゝみかハ一かう

江戸
藤田入道殿、かん一つ

一すぢ

みや
渡や三郎兵へ殿、百文

あふき

はんき
まこ四郎殿、こうし廿帖

あふき給候、

うつ、た
ゑもん二郎殿、百文

品川にて御被參候、
おひ二すぢ

在所かたみや
いくさしやうけ殿

一すぢ

しもうさの國

おひ・祓

人目大つか殿

おひ・祓

むさし國在所おし、まねや殿

おひ・祓

同こしつか殿

おひ・祓

むさしの國

おひ・祓

おかわ殿

おひ・祓

はやま

おひ・祓

とくしやう

やの殿

くまい殿・同さうしや

にし村殿

同源五郎殿

はやまたくみ殿

いわさわ殿

いなは与三左衛門殿

はやま二郎三郎殿

同いや二郎殿

いつ下田

まんしやう、はつを百文

もくね 大山殿、一圓

こい 大圓坊、先達

關宿やなせ殿

さけを・帶・あふぎ

おひ・くし

おひ・くし

おひ・くし

おひ・くし

同

おひ・くし

同

かしま殿

松崎殿

石井 いつみ殿

おくり神慮かねまる

さかみ國、在所藤澤、先達ハひしやもん在所かたせ、玉藏坊
おうぼ同
まんさう坊

左衛門尉大郎殿

五郎四郎殿

同 源二郎殿

せの ゑん阿み

とく阿みはこ

ゑん阿みはこ

ゑしゆん

たいかみ(あぢ)

ちん阿み

大郎さま殿(衛力)

永正十五年雜載

くし

おひ

同

同

同

同

同

同

四郎左衛門殿

はやごう殿

ちやうあみ

まご大郎殿

六郎左衛門殿

一在所へくゝいのまにて候、

四さ衛殿

たうしゆん

満五郎殿

馬の三郎殿

大郎左衛門殿

大郎衛門殿

まぢた平衛門殿

これより藤さへ、新左衛門殿

五郎さ衛殿

同 同

は山

六郎左衛門殿

六郎五郎殿

同

六郎二郎殿

みやさき殿

こすけ殿

左衛門五郎殿

中さと

新兵へ殿

四郎兵へ殿

一在所ちかさき

ひろき殿

一品川之分北南

わいた殿

しやうせい

うすい殿

うた川殿

永正十五年雜載

まへの名ハこんけんたうと申候、

玉藏坊

帶一筋

うすいた一たん

同 同 薄

二郎左衛門殿

ひこ三郎殿

小五郎殿

わいた孫兵へ殿

かふ山大郎二郎殿

たうけんの又五郎殿

渡柳五郎大郎殿

とりのちみけん阿み

くねき八郎大郎殿

くらやま殿

源大郎殿

ちやうきや

大ほり大郎左衛門殿

同五郎三郎殿

彦三郎殿

ちや

帶半長

同一すち

おひ・ちや

くし

くし

おひ一たけ

おひ一すち

同

同

くし

おひ一すち

同

おひ一すち

くし

さぬき五郎さ衛殿

吉田五郎さ衛殿

又二郎殿

こたま三郎大郎殿

こんや兵衛殿

林さ衛門三郎殿

おうほとけ孫左衛殿

こんや源さ衛殿

こんさ衛門二郎殿

まちや五郎三郎殿

御ちうけん三郎さ衛殿

わいた藤さ衛殿

おりも三郎大郎殿

もりた三郎五郎殿

とひた三郎衛門殿

くし

くし

くし

くし

帶一すち

同

くし

おひ一すち

同

くし

おひ一すち

おひ一すち

同

同

同

こかちや殿

ハし端殿

新兵へ殿

なるかへ殿

満五郎殿

六郎左衛殿

入道殿

左衛大郎殿

三郎さ衛殿

三郎大郎殿

与大郎殿

ふん衛門殿

けん衛殿

おうよ殿

助二郎殿

同

同

おひ一すち

同

同

同

同

同

同

同

くし

くし

同

くし

くし

やさわ殿

六郎三郎殿

志村三郎五郎殿

三郎五郎殿

おしま殿

馬の二郎殿

六郎五郎殿

石井殿

大まけしや殿

五郎二郎殿

入道殿

八郎大郎殿

小五郎殿

大郎三郎殿

孫二郎殿

永正十五年雜載

おひ一筋

くし

帯一筋

帯一筋

同

同

帯一筋

同

同

同

同

同

同

同

同

あい物
七郎衛殿
わたりや
八郎五郎殿
しほや
左衛門尉大郎殿
ありきや
三郎左衛門殿
四郎さ衛殿
さへ殿
八郎左衛殿
大つか
四郎衛門殿
うた川
いや三郎殿
りうた
平さ衛殿
おく
二郎三郎殿
いけた
六郎さ衛門殿
よした
九郎左衛門殿
すまき
ゑもん二郎殿
ほして
新三郎殿

くし
くし
くし
おひ一すち
くし
くし
おひ一すち
同
同
同
同
同
同
おひ一すち
同
同
同
同

せきや
助さ衛殿
村田
大郎さへもん殿
同
小大郎殿
せきや
助二郎殿
同
さ衛五郎殿
まぢた
三郎二郎殿
せきや
六郎さへもん殿
すかの
彌五郎殿
かちや殿
つちや
孫衛門殿
みつほし
よこ衛殿
ねきし
大郎三郎殿
はんちやう
すけ大郎殿
土や
五郎さ衛殿
ひこしやう殿

同、又ちや
同
同
くし
おひ一すち
おひ一すち
おひ
おひ
くし
くし
おひ一すち
くし
くし
おひ一すち
同

とりノウミ ときふ殿
 大堀 おゝい助殿
 とりノウミ 彦二郎殿
 大ほり 彦二郎殿
 くしかた殿
 みやうさう六殿
 はたの 大郎二郎殿
 大つか殿
 同 大郎二郎殿
 こんや 彦二郎殿
 いせ殿
 いしこ 七郎大殿
 らんそくや
 同 さ衛門三郎殿
 とりのらみ 兵衛大郎殿

おひ
 おひ半たけ
 同
 たけ中
 一たけ
 おひ一すち
 同
 同
 同
 同
 一すち
 一すち
 一すち
 同
 同
 同

浅草 中野

下總關宿 石垣 加島

江戸 藤田殿
 同 東光院
 あさ草 しもん殿
 在所中野 ほうさう坊
 田所 彦二郎殿
 宮のまへ 大夫殿
 わたりや 彦三郎殿
 同 かうしち
 わいた 孫大郎殿
 かの川は山殿
 しようさの國在所關宿
 石垣泉守殿、一貫文・らんそく二百てう、
 賀嶋しなの殿、二貫文
 同四郎衛殿、二貫文
 松崎三郎左衛門殿、一貫五百文

永正十五年雜載

一すち
 ちや・ゆるん
 おひ一すち
 うすいた一たん
 おひ半たけ
 おひ一すち
 一すち
 一すち
 ちや
 帶一長
 いた物一たん
 おもてかい二まい
 おもてかい二まい
 おひ一たけ

まさしま藤衛門殿、五百文

帶半たけ

いしく殿、五百文

二すち

すゝささくの二郎殿、五百文

二すち

たか橋藤兵へ殿、二百文

二すち

中村さくの三郎殿

一すち

あやへ殿

一すち

二郎さへもん殿、二百文

おひ半たけ

三郎さへもん殿、百文、いつみ殿中間、

一すち

いや大郎殿

一すち

在所こか

おもてかい一まい

皆川式部殿

同上さまへおひ

左藤彈正殿

おひ一すち

いしかきいつみ殿御留申シ、こかにうおう、

おひ一すち

在所中さとそめやひこ衛殿、三百文

おひ一すち

在所もろかい
すゝささるちこ殿こうしゆんぬまかりと申所御出候、

おひ一すち

下野國在所うつ宮

芳賀二郎殿

おもてかい三まい

同刑部大輔殿

三まい

いちはなり殿

いた物一たん

御ふくろさまさうしゆ御やゝ一すち

一たん

よこ山殿

おもてかい一まいおひ一すち

植竹殿

おもてかい一まい

野代源三殿

いた物一たん

三郎さ衛殿

おひ一たけ

しろかねや大せん坊

おひ一たけ

在所へひたち江戸

ねりと主計殿

小刀一まい

在所かつら
とた五郎左衛殿

おひ一すち

たまちた殿

おひ一すち

下野國在所府中

永正十五年雜載

小山

小山殿

おもてかい一まゐ

高友と申御なのりよし、小山殿あにて候、

おひ一たけ

小戸源さへもん殿御さしや

おひ一すち

足利

下野國在所あしかゝ

柳田かすへ殿

おひ一たけ

大はたけ又四郎殿

おひ一たけ

一瀬右京進殿

おひ一たけ

まちにて候、どうしん彦五郎殿

おひ二すち

下總目吹

しもうさの國在所目吹

あらい伊勢入道殿、壹貫文、白鳥、

いた物一たん

同 おゝいの助殿、百文

さす大せん殿此在所ハこと申候、五百文

おひ一たけ

あらい藤三殿此在所ハなやのと申候、五百文

おひ一たけ

(奥書)ちく五郎左衛門殿在所ハ關宿、

おひ一すち

〔右永正十五年坂東道者日記者、岩淵橘弘成朝臣家世所相承也、借取以摸寫了、

嘉永五年壬子十二月十一日

御巫尙書石部(花押)

佛寺、

〔月舟和尚語録〕三 十二住東山語録(成實)

六月旦上堂

祝香

黄河五六月寒氷 頓蘇侍臣之渴

紫蓬三万里弱水 必保神仙之齡

垂語

冬居衡岳、夏止清凉、此是古人、遊戯三昧、山僧今日、如何履踐、一踢々翻、炉炭鏝湯、阿呵々、人皆苦炎熱、我愛夏日長、

自敘

百憂集鬢 万叟傷心

(壽筵) 師兄仙甫示寂、

吾門嘆曙星疎 猶如陶侃有功而曾孫陶潛不興晋室

客床感夜雨冷 譬諸蘇軾先亡而舍弟蘇轍独老穎濱

誰不憐之 衆所知也

永正十五年雜載

壽桂建仁
寺二十
住ス
六月旦上
堂

結座

大通智勝佛、三轉十二行法輪、十二行者何哉、造作迂流、終日因循、藏教通教別教圓教之所觀、一枝花有香有影、苦諦集諦滅諦道諦之所縛、千江月孰假孰真、煩惱菩提沸湯沃雪、般若解脫明鏡拂塵、(月非露柱)山竺、十二回作此山主人、流轉乎还滅乎、似辟支觀十二因、玄々々有甚麼苦集滅道之可修、噴人砒霜根毒、莫々々有甚麼藏通別圓之可學、瞞他阿魏水銀、到這裡、鉄壁銀山、无凡无聖、清風明月、作主作賓、言未訖、拈丈、繩床側畔木氏居士、即從座起、且曰、和尚日用三昧、快活則快活、未能使得趙劬十二時辰、咄、鷄鳴矣平旦寅、鴉翻矣晡時申、(從德)六月望上堂

祝香

一封朝奏九重天 祝皇圖於万歲
兩処俱瞻千里月 布恩光於遠方

垂語

昨夜一柄扇子、跳上三十三天、侍者々々、犀牛兒在何処、豎弗、依旧頭角嶄然、見麼、

自敘

衆口難調 愧非函牛之鼻

六月望上堂

餘習未斷 譬諸繫魚之繩

知藏禪師 越弘祥之僧、

百鍊之金躍冶 誰能豁開洪炉

千鈞之弩發機 子宜運轉大藏

○結座ノ二
字脱カ、

單丁住院鬢幡然、踈懶何知日過顛、炎暑侵肌无間獄、涼風洒面四禪天、叢林縱小集三百、茅屋雖低庇大千、若有高人来問道、北窓一榻付渠眠、作麼生是禪、銀山鉄壁、作麼生是道、黑蜜黃連、畢竟道不是道、禪不是禪、正与麼時、白蓮池上之鷺薄暮衝煙、提撕洞上五位、綠槐陰中之蟬終日說露、漏泄濟北三玄、何曾床下着矮師叔、元无棒頭驗掣風顛、雖然、子細商確、唯是時節因緣、不涉時節底一句、如何指宣、咄、三面狸奴手捉月、兩頭白牯脚拏煙、

是歲六月廿六日、発洛赴越守衙内、七月三日、爲子春居士陞座、常庵和尚代之、
(朝食氏景) (龍泉)

〔栗蒲集〕 永正十四年六月三日建仁寺語錄

解夏小參、垂語、(永正十五年)本色住山翁、一拳分背觸、擊拳、畢竟是什麼、不肯望他彫文表德、參、
提綱、文殊來至靈山、一身三處夢、(義文)臨濟却回蘂嶠、半夜九回腸、(龍泉)建仁不然、孟夏啓建、張个龜毛網一結々定山河大地有情非情、九十日內未曾終日不圓覺、今朝滿期磨个兔角又一解々

龍崇ノ建仁寺住院
小參上堂
解夏小參

却森羅万象若凡若聖，一丈室外直得遍界是清涼，雖然恁地，者裡別有不受解結底一物，諸仁還諦當麼，良久，翠岩到此不東語，惜取眉毛三尺長，

自敝，空名播時，木雞元無司晨之德，虛位誤世，菟狗豈有守夜之功，

都寺，夜明簾外排班，功位全露，日黃簿上結算，公私避疑，

監寺，對青山談世事，勿辱先宗，隸清涼領監司，須明自己，

悅衆，梅兄居前警弟居後，莫如同生，昔君應天黃臣應人，宜分五位，

直歲，盲呵睦棒，毋縱威暴激變起訟，熱喝噴拳，宜省使令均勞示警，

後板，集雲峯五色虎，眼動百步之威，若木端三疋鳥，光吐千丈之瑞，

知藏，三吳百越，眼底挂故國山川，十京一都，曾次豁前朝風月，

知浴，鳴一声添湯二声添水之板，赴節成功，持前念是凡後念是聖之文，因觸得法，

念謝，按地理志云，魯多儒士，衛多鄉士，螺川壽水，朱紫滿朝，武夷桃源，神仙繼踵，顧我東

山一衆，人々魯儒衛卿，个々螺壽武桃，固知古今人物之出，必山川靈異使然也，可貴哉，

拈提，記得，僧問古德，夏終今日，畢竟如何，德云，天晴道路乾，山僧若逢恁麼問僧，如何与人看，一拂芙蓉殿，上水拍銀盤，

解夏次日
上堂

次日上堂，祝香，有功不賞，蚩五堯不能帝，有罪不罰，蚩十禹不能王，恭願，賞可賞，罰可

罰，德合五堯，功累十禹，

垂語，法歲已滿，万户盡開，何以爲驗，一陣西風起林末，蠟人倒策鉄牛回，

自敝，性素昏愚，宜潛万象之底，老益踈懶，愧居一堂之先，

念謝，譬如觀滄海，細大極龍蝦，黃广圍云，吾亦云，

結座，起於混沌一氣，塞乎天地兩儀，儒家者名之曰孝，々爲五常之本，佛家者名之曰戒，々

爲万行之基，其名蚩異，其實何違，采菽氏之於孝，釈氏所獨推，菽氏嘗欲救其母白佛，々告以

烏藍盆供法，於七月十五佛歡喜日，施十方自恣僧，普使過去現在父母親屬，脫離憂悲，乃至

勅未來世一切佛子，亦修如斯，依此功德力故，既往者人天托化，現存者福壽無涯，終南定惠

師，譬諸顯考叔諫莊公，固宜矣，然考叔之孝，止及一人，菽氏之孝，廣被万微，仏氏之教，出

於儒行也可知，是以，唐代宗大曆元年，始行此供於禁墀，報應之驗，厝產靈芝，由尔年々，以

爲常規，何況吾釈氏所司哉，山門今晚，隨例行之，滴佛法水僧水，爲一味甘露，收敬田恩

田悲田，爲一棚香資，遍滿微塵刹土，上下四維，未審還有如上功德也否，咩々，一景不言含有

象，万靈何處謝无私，

〔嚴助往年記〕

上

四月十五日，天德庵秉拂沙汰云々，

〔實〕詢備中寶福寺住持トナルコト、十六年十二月是月ノ條ニ見ユ、

〔永正十三年八月日次記〕

永正十五年三月廿八日，略中今度登山已前，宏助法印大僧

東福寺結
夏秉拂
天得庵寶
詢之ヲ勤

補任 大僧都ノ
仁例 和寺ノ
任大僧都ノ

永正十五年雜載

四〇八

〔都事付、僧正申之、抑已叙法印後、大僧都申入候段、第一不得其心、殊又大僧都之事、於當門者、中古以來三台槐門之直息者孫之外不任之、宣助・光譽等大僧都申入候間、先規之由申候、甚不便之申事也、

四月一日、宣事ハ、准大臣嚴息也、光譽申不心得、旁々無謂候間、不免許、直叙法眼等、三台槐門息孫之外不可免之、

〔華頂要略〕八十三 附屬諸寺社一 山城國愛宕郡 六波羅蜜寺号補陀洛山 稱六波羅堂 在愛宕郡八坂郷

年紀

同十五年四月三日執行職補任日、

別當袖判

補任 六波羅蜜寺執行職事

大法師光祐

右任先例、堂中宜承知、敢勿違失、故補之而已、

永正十五年四月三日

目代宗詢判

于時依寺務宮尊鎮親王令旨、當寺別當下知、目代宗詢奉行之云、

〔古規萃如集〕

贈進宗竹侍者免禪客轉位藏主官錢事、

相國寺雲

六波羅蜜
寺執行職

頂院宗竹
侍者ノ官
主轉位藏
錢ノ勤
禪客ノ除
シテ免位

合貳十貫文者

右、攸贈進如件、

永正十五年八月十二日

侍眞
瑞珠判

函丈

侍衣禪師

雲頂院

請取

宗竹侍者免禪客轉位藏主官錢之事、

合貳拾貫文者、

右、攸請取如件、

永正十五戊寅

八月十二日

侍衣承章判

維那永旭判

奉行尔眞判

雲頂院侍者禪師

函丈

永正十五年雜載

四〇九

文海英嶽
甲斐向岳
庵住持ト
スナリ入寺

〔鹽山向嶽禪菴小年代記〕(永正)十五戊戌 九十二世文海朝和尚 三月三日入院、

○中略文海和尚示寂、九月廿三日、

九十三世英嶽雄和尚 十月廿八日入院、

〔瑞泉寺由緒書〕○尾張

住職交代左之通御座候、

(宗尊)廿六世天關

宗鷲尾張
瑞泉寺ニ
入寺ス

一 永正十五年寅九月三日、當山臨溪院方住職、

一 退寺年月不相知、

〔佛通禪寺住持記〕(永正)十五戊寅 大慈派

(智文)要闕再住 侍眞惠琛 納所(光岩)妙可 向上永勤 維那慶春
(長松派)

〔高野山文書〕四 又續寶簡集三十二

灌頂院

崛請

十弟子

大法師宥辨(別筆、下同) 大法師眞嚴

金剛峯寺
灌頂院請
定

智文安藝
佛通寺住
持トナル
再住

大法師朝義 大法師長勝「奉」

大法師秀雅「奉」 大法師快日「奉」

執蓋役

大法師紹專 大法師宥崇「奉」 大法師朝誓

菴道行事

持幡童 荷輿丁

右、來廿七日、結緣灌頂請定事、

永正十五年九月 日

行事入寺圓宗
年預阿闍梨長海

〔石山寺座主傳記〕第廿五座主尊海大僧正

(永正)同十五年五月五日、於座主坊石流傳受、阿闍梨宗源法印、受者座主、四十七才、

〔石山寺座主傳記〕第十八座主杲守僧正

(諸尊法私記)同書座主尊海奧書云、永正十五曆五月十日、令傳受宗源法印了、此本杲守僧正御坊御筆

也、可貴可仰焉、末塵尊海、于時書石山座主坊云々、

石山寺座
主尊海石
山流傳授
リヲ宗源
ヲ受ク

尊海諸尊
受傳ヲ尊

〔曼殊院文書〕七 山城

延曆寺法
華會請定

〔上ノツ、ミ紙ニ
六月 法華會凡僧回章所〕

六月 法花會所

第一日

正覺院權僧正探題法印大和尚位奉

行光房法印權大僧都奉

松禪院法印權大僧都奉

正教房法印權大僧都奉

第二日

正觀院探題法印大和尚位奉

佛乘房法印權大僧都奉

覺任房法印權大僧都奉

龍禪院法印權大僧都奉

第三日

西樂院法印已講奉

唯心院法印權大僧都奉
起教房法印權大僧都奉
快舜法印擬講奉

第四日

乘實房法印權大僧都奉

大泉房法印權大僧都奉

淨教房法印權大僧都奉

花藏院法印權大僧都奉

五智院法印權大僧都奉

第五日

惠心院探題〔法脫カ〕印大和尚位奉

行泉房法印權大僧都奉

本覺房法印權大僧都奉

藤本房法印權大僧都奉

第六日

永正十五年雜載

常照房法印權大僧都奉
明王院法印權大僧都奉
寶幢房法印權大僧都奉

第七日

東圓房法印權大僧都奉
金光院法印權大僧都奉
自性房法印權大僧都奉

右、以來三月朔日、可被修恒例法華會之狀、所唱如件、

永正拾五曆正月日

會行事

執當良全

(義胤法親王)
一二品親王

〔嚴助往年記〕

上 全廿一日、

(義胤)

門主十八道後加行御開白、

〔南禪舊記〕

下

(永正)

十五年戊寅、

飯雲式云、

清水寺懺摩、

先前日以折紙相觸也、

每月十七日

齋了、赴清水寺、

古者於德雲院讀之、

雖然末代無斷絕樣、

廷用和尚寄附常住故、

德雲院衆不

加補闕、一超直入也、但亂前、宗英藏主參暇迫而被削籍、后被出頭間、被加補闕云云、依其

醍醐寺義
加行十八道
清水寺懺
歸雲式

仁直入、依其仁補闕乎、

清水寺懺摩鉞圖并坐牌圖三十三員、已上詳見
飯雲式、

嚶金引付

拾貫貳百文 布施三十四員分、加佛布施云云、

已上拾貳貫五百文

右從濃州貳拾貫文月別上、御倉奉行并乎飯納之、其內拾貳貫五百文、自寺家請取之、

今代壁書

定

清水寺懺摩諸役者衷、

一道師、(尊)參暇西堂衆如先規可勤之、若有一人爲不器用者、爲其仁可倩本衆首座勤旧、但雖

不勤導師、滿散燒香者、可爲出世仁、雖背古規、因其才乏如斯、若於有器用者、可爲如旧

規衷、

一香華、單寮以下、爲本衆輪次可勤之、若爲不器用、爲其仁可雇衆中衷、

一鉞鼓、可爲如先規、雖然於不器用、爲其仁可雇衆、但位次者、自他可隨宜衷、

右攸定如件、

嚶金引付

倉奉行叔
井某

諸役者定
書

永正十五年十月日

堂司

葦庵藥

足利義持
禱願ノ祈
禱儀法

攝津福祥
寺大般若
經供養若

東寺光明
講方年貢
ノ算用

上野莊

井料

前代壁書、詳見于飯雲式并葦菴藁、

右御祈禱儀法、勝定相公御發願之衷、詳見上長祿三年章、○幕府、南禪寺ヲシテ、清水寺ニ儀法ヲ修
セシムルコト、長祿三年十月十五日ノ條

ニ見

〔福祥寺曆代〕○攝津 永正十五年二月彼岸、畑村大般若在供養、導師弘尊法印、則御經
轉讀皆散花、八幡上藁有是、

〔東寺百合文書〕○山城

〔編裏書〕永正十五年戊寅年分、
〔光明講方年貢算用狀〕同十六年己卯年二月十八日 勘定畢

注進 光明講御方御算用狀事

合 〔朱綴、下同〕 永正十五年 寅年分

上野莊 八斗庄斗定

弥四郎

大 六斗

二郎五郎

半 以上一石四斗内

三斗梅宮并松尾井新、四斗五升當免、
以上七斗五升引之、

殘六斗五升

永正十六年算用入之、

請加 三斗

去年未進現納

以上九斗五升内

庄未進

一斗五升 二郎五郎

以上三斗引之、

現納 六斗五升 此升一斗八合延、 下行成七斗二合

一勅旨田

大 二斗七升十三合

〔乘圓カ〕
□□分五郎次郎

。五升

當免

殘二斗二升

請加 四升

去年未進現納

以上二斗六升内

。六升

永正十六年算用入之、
未進

現納 二斗 此升一斗八合延、 下行成 五斗一升

以上一石二斗一升二合内

永正十五年雜載

勅旨由

三升六合 減分

殘一石一斗七升六合

代七百六十文

一兵庫寮 四百文内

此外百文、狐塚掃除新下行、

○百文

円秀

當免

現納 參百文

以上一貫六十二文内

二百八十文

二百文

以上四百八十文引之、

殘五百八十文進之、

以上

祐慶給

井新

右御算用狀如件、

永正十六年二月十八日

〔東寺百合文書〕

卷一下之二
○山城

祐慶(花押) ○紙繼目ニ奉行
ノ裏花押アリ

〔備後書〕 永正十五年分
「光明講方用脚算用狀 同十六年二月十八日 勘定畢」

光明講方用脚算用狀之事

合 永正十五年分

七貫八百六十八文 去年丁分算用殘足

壹貫七百七十一文 往來注納分

五百八十文 年貢代

已上〔拾貫貳百廿五文〕

一遣足

五百文 算用世諦

百四十三文 注文在之、 春季臨時講不足分

八十六文 同季講不足分 同前

百六十八文 秋季講不足分 同前

六十文 茶代三ヶ度

六十文 炭代同前、

五文 抹香代同前、

春季講
秋季講

五文

權代同前、

六十文

勸修寺ヨリ時仁王經摺寫時中爲奉
行下行

三百文

壽玉給

壹貫文

奉行徳分

已上(朱書)貳貫三百九十六文

定殘(朱書)七貫八百廿六文

右算用狀如件、

永正十六年二月十八日

當奉行

(花押)

先奉行

(花押)

廿一口奉行

(花押)

○紙纏目毎ニ奉
行ノ裏花押アリ、

廿一口奉
行

〔日光常行堂記錄〕二

御念佛所作配

御念佛所作配事

永正十五年八月十八日

導師 昌曼

廻向尊譽

一頭 昌曼

教坊弟子 実相坊

助音 昌晋

四番二頭昌益

〔砂巖〕二

○柳原家記録八十五所收

不知記者、
永正十五年

榊尾石水
院開帳
高辨木像

自十月十三日、榊尾石水院開帳也、春日・住吉(高辨)ハ明惠上人筆、明惠上人ハ春日御筆云々、讀、
有則明惠、傳聞、奥之有明惠上人木像、四十二像云々、繪ハ六十二歳像云々、榊尾ハ文覺上人開
山云々、高尾ヨリ後ノ草創歟、

〔興福寺略年代記〕一

戊(永正)十五年

十月十三日、榊尾開帳七ケ日、

〔專修寺文書〕一

○伊勢

定 御法度事

一末寺中可致御番事、

一毎年三月八日可致出仕事、

一就出仕者、可着袈裟衣事、

一不請御意着素絹事、

一寺家役不可致無沙汰事、

一眞俗付被仰出旨、不可有如在事、

右此条々被仰出付、何同心申候、若於違犯輩者、科錢五百疋、衆中ニ可致所出旨、各申

定候處如件、

松樹院

定如

科錢

寺家役

末寺中ノ
番佛忌日
ノ出仕

下野專修
寺法度

永正拾五年戊寅七月廿三日

- 聖德寺 眞專(花押)
- 寂勝坊 眞誓
- 榮光坊 眞覺(花押)
- 眞藏坊 定榮(花押)
- 專福寺 眞勝(花押)
- 北稱名寺 惠慶(花押)
- 寶光寺 唯眞(花押)
- 常樂寺 眞願
- 南稱名寺 顯祐(花押)
- 圓福寺 眞圓(花押)
- 淨林坊 理證
- 長福寺 光惠(花押)

〔山門襍記〕

江○近

永正十五年二月廿一日、於政所一衆之議条々、
釋迦堂修理之儀、先度於執行代房被調衆議上者、公物足付、早々谷々可有催促事、

延曆寺西
塔政所集
會塔所集
釋迦堂ノ

清涼寺多
寶塔内寺
天塔内寺
補王像ノ

一本供僧各於當月中仁可有所出旨、各々可被申送事、

一明日永位僧罷登者、袖已下儀、懇可被申付、可有談合事、

一大勸進永位僧罷登者、可被催一衆集會事、

一本堂一承仕修二月中者出頭之間、後戶如在之通雖被申、爲北谷御理之間、被經濃談事、

〔清凉史略〕

甲集 十五寅

永正十五年二月吉日 七條中佛師法眼康乘作

供養行願上人 淨瑞 妙幸 施主宗藤

〔福祥寺曆代〕

津○攝 一同年二月ヨリ

同廿五日、山上鐘_{北野鑄之}、無事鑄立、數万人群集云々、

〔嚴助往年記〕

上 同廿五日、山上鐘_{北野鑄之}、無事鑄立、數万人群集云々、

〔古代取集記錄〕

磨○播 一同年七月廿六日、已剋仁

大寺塔婆之九輪并三重目屋祢崩落畢、

〔大和唐招提寺据箱〕

永正十五年二月日

唐招提寺念佛方

元譽 奉行

榮秀

永正十五年雜載

攝津福祥
寺塔ノ瓦
葺_ノ瓦
醍醐寺楚
鐘_ノ鑄造
播磨斑鳩
寺磨_ノ破
損_ノ招箱
大和唐招
提寺据箱

三河立信寺雲板

徳川家康
之ヲ隨念
寺ニ寄進

伊豫與隆
寺懸佛
願主河野
明生

加賀笈岳
出士法華
經筒
武藏太田
莊光福寺
六納ノ内
奉納

永正十五年雜載

〔三河長澤立信寺雲板〕

三河長澤立信寺常住

永正十七年七月日施主妙暹

〔從家康公樣被下置、

隨念寺鑿譽代〕

〔伊豫古田興隆寺懸佛〕

願主河野八郎明生

永正十五年八月日

〔加賀笈岳出土經筒〕

○東京國立博物館所藏

武州太田庄光福寺住僧

本願實榮敬白

〔梵字〕奉納大乘妙典六十六部内一部所

三十番神 爲旦那朝逆修

永正十五年戊辰今日日十覺坊

〔南禪寺文書〕

○山城

南禪寺都
開寮校割

客殿

〔南禪寺都登寮校割〕

南禪寺都登寮寮什物

客殿

襖障子

板戸

明障子

禮間

暖席

板戸

明障子

書院

暖席

板戸

明障子

爐縁

永正十五年雜載

四間

三間

三枚

八疊

六間

四枚

八疊

六枚

二枚

一箇

眠藏
都寺宗順

硯 一面
 付箱、
 眠藏 (宗順) 自順都寺代不渡、
 板戸 一枚
 錢櫃 大小、 三箇
 帳箱 一箇
 蚊帳 二帖
 果子盆 十二枚
 鎖子 二箇
 山刀 一箇
 斧 一丁
 釘拔 大小、内一ヶ新增、
 輪一ヶ不足、 二箇
 鋸 一箇
 差繩 二筋
 勘定狀 数通
 棚板 一枚

納所芳園

茶湯間

緣高 廿枚
 鐵槌 一箇 鐘鑄時失却、
 納所芳園新增、
 升 貳箇 大小三ヶ、
 緣高 順都寺新增、 貳十枚
 茶湯間
 鐘子 付絃、 一口
 茶桶 付茶杓、 一箇
 盆 二箇
 茶碗 二箇
 天目 付臺八ヶ、 三箇
 炭斗 一箇
 滴器 一箇
 火筋 一双
 果子臺 五枚
 茶臼 一箇

茶器 一箇
 鏡子 一丁
 膳棚 三脚
 面桶 一箇
 佛餉器 付盆、一膳、淨音時新增、
 鐵輪 一箇
 提子 一箇
 衝立障子 一脚
 板戸 一間
 腰障子 二枚
 灯炉 二箇
 火燧 一箇 付箱、
 椀 一具 永正十六巳卯年、納所芳
 椀 固代修覆之、南一椀是也、
 碟子 一ヶ失却、
 折敷 朱大小、破了、付箱、
 板折敷 一枚山門造營之時失却、
 二枚順都寺代失却、

淨音

江州椀

伊勢天目

看寮寮

直歲寮

椀 一具 納所芳固代新增、
 書付南二、
 江州 同前、
 天目 伊勢物、同前、
 看寮々 十箇
 板戸 一枚
 暖席 一疊
 直歲寮 二間
 板戸 三疊
 暖席 一枚
 明障子 一張
 弓 二帖
 楯 一枚
 開戸 一枚
 (マ) 一枚
 鋤 五丁 内壹丁失却、前代
 乙酉歲一ヶ新增、

直歲周源

鍊春

捧 周源直歲代失却、

釘箱

簾 但緣、

番帳

出官寮面

板戸

暖席

明障子

同眠藏

板戸

暖席

炉縁

制札

廣縁

一丁

一本

二箇 此外一ヶ、順都寺新增、

七枚

三枚

三間

三枚

三枚 内二枚破了、

三間

三疊

一ヶ

二枚

庫裡

板戸 内二枚開戸、東西、

手水桶

庫裡

板戸 内一枚者淨音部屋、一枚藏地、

板戸 東・南・西・火番部屋、

釜

鍋兒 大小、

桶 大小、

大桶

鉢盆 大小、

柄菜斗(菜カ、下同シ)大小、

手桶

角桶

甌 大、

切盤 内一ヶ菜切盤、

永正十五年雜載

四枚

一ヶ

二枚

四枚

二口

三ヶ

四ヶ 内一ヶ失却、

二ヶ 此外一ヶ、鎌都寺置之、

三ヶ 二ヶ失却、鐘鑄時、

四ヶ

一ヶ

一ヶ

五ヶ 内一ヶ、制札七用之、

雷盆 一ヶ
 萊刀 一ヶ
 物相 二ヶ
 水杓 二ヶ
 杓子 二ヶ
 米搗磨 付杵八丁、
 一ヶ 從前代失却、
 簸 一ヶ
 箆 一ヶ
 箸 二ヶ
 醬囊 一掛 又壹ヶ新調、
 盥 一ヶ 此外一ヶ、順都寺新增、
 筵 十三枚
 水壺 一ヶ 破了、
 荷筒 一荷
 桔槔 一ヶ
 麵甑 五重

梯 二丁
 鞍懸 二脚
 土車 二兩
 大繩 一筋
 相槌 二ヶ 失却、
 物子 廿丁 破了、
 絶食合 五ヶ
 開戸 二枚
 西淨
 板戸 二枚
 水壺 一ヶ
 手水桶 一ヶ
 觸桶 一ヶ

永正十五年正月晦日

永正十五年雜載

納所 宗順(花押)

禁中、

〔宣胤卿記〕

正月二日、天晴、○中入夜中納言參御番、着袍申御禮、拜龍顏云々、御番、亂後

各直垂也、候所下侍也、

八月二日、晴陰不定、○中右少丞（兼等）出京、今夜番也、

〔二水記〕

二月十九日、入風呂、然後於甘露寺亭聊有傾盃事、參外樣番宿、姉小路代也、相

番庭田中將、閑談之處、内々番衆帥中納言携小壺來臨、有其興、催花之雨聲添氣味、醉氣入

興、雜談移刻、源中郎將有正句、檐雨梅浮溜、帥中納言付之、御階の花にかほる夕風、不得

休而漢和一折聯之、及深更各就寢了、○コノ後、鷲尾隆康當番ノ

廿八日、參御妻御所、宮千代丸近日上洛、今日初祇候了、

六月九日、○中未刻許參禁省、宮千代丸令候、聊有御酒宴、（入道尊猷親王）青蓮院宮令參給、

諸家、

〔二水記〕

二月廿日、晚頭參伏見殿、（宗山筆世）万松軒光臨、數剋有御雜談、然後御非時參、御中酒万

松軒被持、聊令沉醉了、

〔貞敦親王御日記〕

○伏見宮御記 錄亨三所收 正月三日、癸卯、晴、時々陰、○中自右府檣柑一篋御所へ

被進、

宮千代丸
祇候
青蓮院
王御參
内親

萬松軒等
貴伏見宮
ヲ訪フ

番衆ノ漢
和聯句

當番
候所下侍

貞敦親王
勸修寺
覺王寺
贈物等ヲ
御裝束ノ
潤色

御裝束ノ
潤色

定法寺聖
宮ノ本尊

伏見宮御
湯殿始

引馬

禪羅

十分盃

八日、戊申、晴、○中自上藤局（右京大）被遣於文、（貞敦親王）余手調薰物二具、被遣之處、自彼方又

有書狀、三種三荷送之、則自是書狀相副、返事被之了、（遣脱カ）

九日、己酉、晴、大風自昨夜不休、未剋深雨、申剋雷声頻發、（海覺法親王）勸修寺門跡有便宜之間、書狀等

相調、薰物五香、茶等進之、新典侍局二具進之、

廿日、庚申、晴、○中定法寺聖天（轉法輪三條氏）上藤爲參詣、今日二合一荷彼房被送遣、

廿一日、辛酉、晴、今日裝束之裡加潤色了、内裡上藤御所（黃脱カ）崩一被進、明後日參詣、爲神事、

從今夜上藤被出里、三木左京亮番參、

廿三日、癸亥、晴、及晚雨降、○中今夜上藤三條中納言等定法寺聖天參詣、彼尊家門之本尊

也、仍被參詣、所願成就無疑者乎、未剋下向、○中上藤自里被歸、

〔貞敦親王御日記〕

○伏見宮御記 錄亨三所收 正月六日、丙午、○中今日湯殿始也、行水殊更有之、

廿日、庚申、晴、○中三條黃門（高倉）範久參、令雜談、又賴孝引馬參、範久騎之、

廿四日、甲子、雨降、花園引馬參、高倉少將等騎之、

廿五日、乙丑、雨降、午已後屬霽、（禪羅）惠命院僧正一荷三種持參、則勸盃退出、入夜帥中納言參、

近日十分盃所持之由傳聞候間、令所望見之、仍隨身、近來寄妙之者也、今度余初而見之、孔

子作云々、仍彼廟（子）必有之由、渡唐之仁語云々、勸盃、暫閑話、參當番之由被申間早出、

中御門宣胤父明豐ノ忌日
慈惠大師別課

西川房親

彼岸ノ供養
宣胤ノ母ノ忌日

正忌

宣胤墓參道
宣秀等同

廟前ニ和歌ヲ詠ズ

〔宣胤卿記〕 正月三日、陰、依年始不請僧、背本意者也、大師別課、觀音經三十三卷如例、

多年之信仰也、○二月・三月・四月・五月・六月・八月・九月、各三日明豐忌日、異事ナキヲ以テ略ス、

七月三日、晴、追善讀經等如月々、爲朝飯行四條宰相許、作善日也、雖令辭退、西川房親精進分用意之由、頻申來之間、難默止行也、大納言・女房衆等同前、早歸宅、讀經念誦、

〔宣胤卿記〕 二月六日、朝間雨、午晴、時正月初日也、

十二日、晴陰、○中略、時正、至今日十百万反念仏結願、又卒都婆至今日二千二百本分刻之、是ハ毎日所作也、○正月・三月・五月・六月・八月・九月各十日、宣胤母ノ忌日、異事ナキヲ以テ略ス、

四月十二日、晴、先妣御正忌也、請僧、布施、參墳墓、次詣眞如堂、七ヶ日精進、十百万反以千數、念佛唱之、毎日仏供・靈供・卒都婆、七本、

七月十二日、朝小雨、早屬晴、追善請僧如例、齋後參河東墳墓、大納言月僧布施一千山科東向分、コソノ所也、四條相伴、四條依雜熱進代、眞性院自光堂出逢、七代廟前ワリコ、盛飯、敷荷葉備菓子、瓜、代壽阿、

立小卒都婆、祖母・北堂・理法等前同前、僧讀經、散米、水・檜・灯明・蠟・燒香、稱名、七代、立寄神龍院、龜西堂行南禪寺、藏主出逢一盞、次詣眞如堂、宣增同、大納言、行兼滿朝臣許、一萬反稱名念佛、了參淨蓮華院、歸京、於河原雨、歸宅冷麵盃酌、孫男祝儀云々、於内陣

今日於廟前、

老ぬれハことしハかりと去年いひし命つれなく又も來にけり

其代々の古つかを問われいつかけふ魂まつる數にいりなん

〔宣胤卿記〕 正月十八日、雨降、讀經如例、觀音經三十三卷、○以下毎月觀音經讀誦ノコト、異事ナキヲ以テ略ス、

正月廿五日、陰、聖廟別課、

二月廿五日、晴、晚陰、北野社別課、同名号一幅書之、唐帟三富修理亮行時所望、

〔二水記〕 二月十二日、千本釈迦堂遺教經令聽聞、於局彈琴、但同樂人無之、仍時々付伽陀了、臨昏於陽明坊聊進酒了、

〔宣胤卿記〕 正月十四日、晴、○中略、中納言參詣鞍馬寺、日、宣秀等鞍馬寺參詣ノコト、略ス、

廿八日、晴、中納言參詣高雄、

三月十四日、晴、中納言、越前息女等行嵯峨清涼寺、念佛聽聞後、覺勝院有晚食云々、

五月十日、雨、秀房朝臣來、此間參宮、七ヶ日參籠云々、

十七日、朝雨、午晴、早朝下御靈社參詣、獻召巫御遊、神樂、

〔二水記〕 五月十八日、早旦与庭田中將令同道、五靈社・北野社等令參詣、

〔永正十三年八月日次記〕 永正十五年三月廿三日、○中略、繪士土佐刑部大輔參、扇子一本進之、對面了、每年事也、

觀音經日ノ讀社別課

鷲尾隆康山城大報恩寺ヲ聽遺報

中御門宣秀鞍馬寺ニ參詣ス

萬里小路秀房大參詣ス

土佐光覺仁法親王ニ候

飛鳥井雅
康ノ子勝
寶院ニ依
窮困ニ依
尾山居住
リ攝津神

六月五日、勝寶院始而參御禮、十帖一本、太刀一腰系卷、進之、申次宏助法印、予對面、僧正房へも樽等被送了、雅康卿息也、西園寺猶子云々、依窮困攝州神尾山住、細々出頭難叶之由申之、舍兄賴綱朝臣扶持也、

〔宣胤卿記〕 永正十五年春 三月

御出候者、御器を可申候、可勘及候、

先日芳臨信イ千萬恐悅候、祝詞逐日不可有盡期、抑明後日十三無御差合、朝食何も候ハぬ、鷹ハかり候て、御請伴申度候、光臨候者所仰候、舊冬餘無念候間、早速之様ニ候へ共申候、可爲如何候哉、無子細者、御方被同道申、必可有光臨候、期貴報候、恐々謹言、

正月十一日

堯空(三條西實隆)

三條西實
隆胤父
子ヲ招請ス

中御門殿

堯空

〔宣胤卿記〕

正月十三日、晴、依招引、向內府禪門亭中納言、朝食、冷泉亞相禪門、都督、公條(三條西)

山科言綱
宣胤父子
等ヲ招請ス

言綱・季國等朝臣・親就・師象等朝臣等在同席、昨日小樽天野、二、海鼠腸桶三奉之、又中納言柳一荷兩種携之云々、
廿日、晴、行言綱朝臣許、爲朝飯招引也、中納言・同西向等相伴、餅又一盞、今日都護右金

攝津元直

今川氏ノ
使僧

吾、爲(命)攝津掃部頭等來云々、

二月七日、晴、駿河使僧、招引朝飯、中納言方、

坂本執當兄

廿六日、晴、又陰、○中雅教法印來、言方一荷兩種、一盞閑談次、一空來、

三月二日、陰、午雨、至夜越前息女上洛、自去年約諾也、余方千疋、小袖一、中納言方、四月六日、陰、小雨、駿河栗林來、

九日、朝間陰、早晴、駿河三人粟林父子、安屋僧、爲朝食喚之、

十三日、晴、○中今日午以後行兼滿朝臣許、依招引也、中納言・四条宰相・越前息女・西向等也、柳一荷、饅頭廿、塩引一令持之、母方番一束、綿一裏、女房方番一束、朱染、綿一裏遣

之、息女百疋、柳一荷兩種、千鯛五、千母方ツムキ一段、女房方鳥子、西向一荷兩種、於内々方各對面、女房對面、先三献、次夕飯、入夜歸候、與、西向逗留、

十九日、陰、午晴、今日越前息女下國、去三月二日上洛、

〔宣胤卿記〕 永正十五年夏秋 五月

一番恐入存候、可有芳免候、必々可勘給候、昨日之御月次さへ延引候、無念存候、何日候哉、御床敷存候、良久不能拜顔候、適在京事候間、細々以參謝可申承候所存候処、御客來連日之様觸耳候、

吉田兼滿
宣胤等ヲ
招請ス

朝倉孝景
ノ女上洛

持明院基
春宜胤ヲ
招請ス

能登畠山
義總ヨリ
ノ到來品

宣胤ノ孫
女遠江ニ
下向ス

延曆寺西
塔執行聖
村爲廣
冷泉爲廣
能登ヨリ
上洛ス

其外御取乱共連續之由候条、罷過候、実以口惜存候、近日者産穢事候、又霖雨數日無出頭候、每事計會候、旁得賢慮備賢覽度物候、一日思食立候事、不可叶候哉、塾居候在所方、丈室を構候、誠閑居躰候、不思儀の筭計之御汁にて、朝食より及晩頭候迄、御物語申度望候、哀々被寄高駕候へかし、然者御閑日時分を内々奉候て可申入候、其外ハ誰人も不可申候、無相違御返事所希候、次此二桶、能登守護之方より、只今到來候間、進入候、懇志計を御賞翫候者、尤本懷候、心事期面拜候、誠恐頓首謹言、

四月廿七日

基春

〔宣胤卿記〕

四月廿九日、晴、今日孫女十六下遠江國、自駿河中媒之故也、雜掌安星、自去二月在京、調每事、下女兩人、田中新左衛門等下、今日可至南都云々、又駿河返事等遣之、唐墨一丁、大、打陰卅枚、太平記拔書一卷、遣駿河守護、栗林・安星等遣帶、息女以下事、不及記之、賴繼歸谷、

五月四日、陰小雨、○中孫女歸谷、葉室、

六日、晴、宣増來、○中聖村法印來、

廿二日、雨、コホツ戸部禪門宗清、冷泉、被來、近日自能登上洛云々、

廿三日、晴、夜雨雷鳴、○中爲晚冷丹三位親康卿・攝津掃部頭元直等來、

宣胤一條
家ヲ訪ヒ
是心院ノ
孫弟ヲ賀
上洛ス

外一座頭
宗長駿河
ヨリ上洛
玄清一座
行一頭

宣胤ノ孫
女遠江朝
比奈泰能
ニ嫁ス
朝倉孝景
女ノ祝儀

宗長病ム

六月十四日、晴陰、小雨、自廣橋明後日發句談合、晚行廣橋、賀去月廿八日亞相事、對面、右金吾爲和卿、伊長朝臣等在席、歸路之次、參一条殿、去月是心院御弟子御上洛事賀申、依御蒙氣爲御養性也、御對面、同母公、主人少將殿同出座、

廿日、○中龜西堂被來、大納言方、一荷兩種被携之、

七月五日、晴、○中外一座頭來寄宿、宗長來、玄清相伴、

八日、陰、夜雨、自駿河行一座頭上、遠江文持來、於駿河者上洛之事不知之間、無文云々、去

四月廿九日下孫女、五月十九日下着遠江國懸河、祝儀可爲六月廿四日歟云々、○茲ニ云フ祝儀トハ、掛川

在任ノ朝比奈泰能ト宣胤ノ孫女トノ婚姻ヲ指スモノナラン

十三日、雨終日不休、越前息女祝儀、

八月廿五日、雨、自越前仏陀寺僧上、爲長老使來、壽算同道、又國府文傳之、牛糞円甘粒上之

九月十九日、晴、○中覺勝院僧正被來、兼永卿來、

〔宣胤卿記〕

永正十五年夏秋 八月

明日宗長可祖候之由申定候處、夜前より歡樂仕候、可然様ニ可申上由、只今申越候、其狀則懸御目候、此由御心得候て可預御披露候、恐々謹言、

八月四日

玄清

勸修寺第
酒宴

〔二水記〕正月十八日、於新大典侍殿里有朝飯、終日酒宴也、

四月十九日、罷向庭田亭、今日始被申御局、終日大飲也、宮千代丸罷出、北畠少將初令參會了、

花山院第
伊勢貞辰
一色尹泰
徹夜酒宴

五月四日、從花山院有使者、朝飯可來之由被示之、仍已刻許罷出、女中相伴、晚景伊勢兵庫助來、仍傾數盃、入夜又一色兵部大輔來、各沉醉、忘前後之爲躰也、餘以無術之間、子刻許歸家了、後聞、酒宴及曉天云々、

風呂

七日、○中其後入風呂、木造張行、歸路直罷向木造少將亭、終日酒宴、各令沈醉了、晚頭皆北去、

惠命院

九日、於大典侍殿局有朝飯、宮千代丸相伴也、終日醉氣、
廿日、晚景罷向惠命院、宮千代招請也、酒宴入興、及半夜歸家、
六月十四日、月下近邊徘徊、於伏見殿前芝聊飲酒、宮千代丸誘引也、

三條西第

廿日、從帥卿許有使者、於井邊可進瓜、可來談之由被示、仍午終刻許罷向彼亭、朋友數輩、談世事移刻了、

廿八日、朝飯於庭田亭可用意、可來之由、從木造少將許示之、仍宮千代丸來、終日大飲也、及五更歸私宅了、

庭田重親
第生御魂

七月七日、○中已刻罷向庭田亭、御局來臨、目出事也云々、聊令宮千代丸來、

丹波盛直
仁和寺覺
道法親王
白散ヲ

〔永正十三年八月日次記〕永正十五年十二月廿一日、○中盛直白散一具進上了、

越前鳥子
今川氏親
宜胤父子
刀ヲ遺ル

〔宣胤卿記〕正月○中晴、晚陰小雨、○中自勸黃門海鼠腸三桶被送之、○中有狀、○中狀略ス、

荒卷

二月七日、晴陰、小雨、○中自花恩院○中經照、使、中納言方樽一荷兩種、○中赤貝廿、○中余方荒卷二送之、

越前鳥子
今川氏親
宜胤父子
刀ヲ遺ル

十二日、晴陰、自駿河使僧并去年下紀伊上、今河治部大輔氏親狀有之、金一枚○中上之、中納言方三兩、太刀上之、自息女方紬一端○中葛一、搗栗等上之、自阿茶々方朱染帟一束上之、

二條尹房
義植ヨリ
遺ル

〔子八日〕自二條殿○中一器給之、自武家被進云々、

朱染紙

三月十日、晴陰、自西光寺樽一兩種○中串柿一連、到來、

遺ル

十五日、晴、○中入道前內府殿被送之、有狀、

鱒

十九日、晴、○中鱒一遣秀房朝臣、

青海苔

廿三日、小雨、冷禪門被送青海苔一曇、

小袖屋

廿四日、雨、柳一荷、鯛、小袖屋送之、又一荷兩種送越前息女方、

大覺寺性
守

四月十八日、晴、○中食樓○中上魚物色、○中遺姉小路留守、○中濟繼、

三富宗觀

廿八日、晴、自大覺寺殿筭一束給之、

丹後

五月四日、陰、小雨、早且薺昌蒲、三富修理亮行時、上和布卅把、鱒廿、父宗觀傳之、○中自西

光寺粽

五日、晴、栗生粽三十到來、

八月五日、雨降、略中自越前魚子一桶・背腸一桶上、又自孝景母綿一屯上、有文、

九月廿一日、晴、田中新左衛門尉自東國上、駿河守護綿十屯、息女金一枚、十兩、細美二上之、

自秀房朝臣送鮪二、有狀、除目申文等一卷令見之、可加筆云々、東國綿各施與了、

〔宣胤卿記〕二月廿六日、晴又陰、召番匠、二人、作事、○二十七日・二十八日、番匠作事ノコト略ス、

〔萩藩閥閥録〕四十 上山庄左衛門

完戶藝州以調法、如前々申合候、外聞美儀本望此夏候、然間、以上京之内百五十貫文迄進

置候、此方於致知行者、同前可被仰付候、仍如件、

永正十五年
九月廿八日

豐實判

上山加賀守殿（廣房）

豐實判

上山加賀守殿（廣房）

〔前薩藩舊記雜録〕四十二 調所氏譜恒久傳

永正十五年戊寅十月、前此圓室公使島津豐後守忠朝攻串良城陷之、而賜忠朝串良、忠朝

乃使其叔父平山越後守忠康成之、豐州譜、爲明應四年四月事、平山氏之於恒房也、本同其祖、故

栗生景子
孝景母綿子
魚子遺綿子
賜ヲ遺綿子
氏親美等子
綿里小ル等
萬里除小路
秀房除小路
申文除小路
筆文除小路
宜胤第作

豐實完戸
元源ノ轡
旋ニ依リ
上山廣房
上和シ地
ト興フ

薩摩平山
忠康調所
恒房同好
族ノ舊好

ヲ修ス

忠康久武
父子ノ承
諸狀

伊地知重
貞ノ助言

調所恒男

此月十五日、忠康與恒房書修舊好也、既而忠康卒、其子左衛門尉近久嗣、居串良城如忠康時、於是乎、年月無傳、類記于此、恒房及弟九郎兵衛尉恒男、訪近久於串良城、饋近久所謂金、吾此也、太刀一腰・馬代二百疋、其子久丘所謂又、次郎此、行安造刀、近久亦饋恒房甲及太刀、其他贈答有差、不悉書也、

〔宋書〕一全文書 調所名字之事、爲平山同家之由、前代有其謂云々、者任由緒之旨、不可及餘義之狀如件、

永正十五戊子

十月廿五日

平山越後守
忠康判
久武

調所殿（恒房）

條所兵部少輔殿御宿所（調力）

就名字之儀、雖度々承子細候、加斟酌候之處、伊地知防州預御助言候上者、前代之由緒歷

然之儀候哉、然者不及難澁候之條、爲後日令進一筆候、猶期後喜候、恐々謹言、

十月廿五日

忠康（花押）

調所九郎兵衛尉殿進之候（恒男）

包拵

平山越後入道

忠康

調所九郎兵衛尉殿進之候

永正十五年雜載

疾病

中御門宣
胤
眩暈病
百會灸
湯
白朮人參

疾病・生死

〔宣胤卿記〕七月十九日、雨降、心神不快、終日平臥、

廿三日、晴、朝食了時目舞、忽顛倒、終日平臥、

廿五日、雨、余眩暈病不本復之間、招醫者、令取脉、百會灸沙汰、

廿六日、雨、○中醫者与藥、白朮人參、

廿九日、陰、左金吾基春、秀房朝臣等來、問所勞、

八月四日、陰、日中後雨、右中丞秀房、來、問所勞、

五日、雨降、西光寺住持入來、被問余病氣、

六日、陰、右中弁携藥清法印、來、昨日魚子一桶遣清法印、左少丞資定、來、問病氣、

九日、陰、日中後晴、晚清法印其名不知之、當時第一良醫也、來、取余脉、秀房朝臣媒介也、宣增來、

十日、晴、清法印送藥、木香湯、十五墨、為禮遣人、

十八日、晴、○中杉原十帖・綿一曇、卅日、遣清法印、

十九日、晴、清法印送藥、木香湯、十五墨、使弟法眼也、令對面、令取脉、又為禮遣人、自左少送匏、五、

九月三日、晴、○中自去夜眩病再發、終日平臥、

四日、晴、清法印送良藥、羚羊角湯、十五墨、入道前內府來臨、令問予所勞、勸一盞、

五日、晴、早朝秀房朝臣來、問病氣、歸後又有狀、

羚羊角湯
三條西實
隆ノ見舞

養命坊鍼
治ヲ行フ

二條尹房
見舞

死亡
尾張福嚴
寺洞爽
洞源ニ就
キ得度ス
五位ノ旨
談ヲ討習
性印ヨリ
印記ヲ受
ケ尾張寶

六日、晴、晚陰、夜雨、養命坊來、立針、為眩暈也、

十日、晴、眩病、終日平臥、養命坊立針、

十一日、晴、大府卿和長、來、被問病氣、聖村法印伊勢貞陸、黑藥被持來、今日可登山云々、

十二日、雨降、○中清法印又送藥、羚羊角湯、十五墨、

十六日、晴、冷冷泉為廣相禪門被來、被問病氣、

十七日、雨、○中自殿下御使、余病氣事御尋、

廿三日、晴、○中勸黃門被來、被問病氣、

〔宣胤卿記〕○柳原十月○四九日、晴、綿一屯、遣清法印、

○五九日、晴、清法印送茶、羚羊湯甘藷、

〔延寶傳燈錄〕九曹洞宗 福嚴月泉性印禪師法嗣

尾州福嚴盛禪洞爽禪師、遠州周智郡人、父母禱佛有孕、永享六年二月誕、自幼穎發、不與羣

兒戲、逢僧伽則敬之、見佛器把玩不棄、文安初、靈岳禪師有遠州行、偶憩其宅、見師秀奇、乞

攜歸繫度、及長遊方、寓止東山、往來瑞龍、慧日間、參諸老宿、歸鄉就默堂智如仲于大洞、討

習五位旨訣、得其大要、辭去省岳、時岳病、謂師曰、吾滅後、從事月泉、當續祖燈、師即拜謁月

泉、泉與印記、付法衣、讓寶積席、檀越道永、慮其地隘隘、不足容衆、大艸西北、宏營具體、請師

積寺ヲ讓
ラシテ
檀越西尾
道永同寺
ヲ大卿福
移シテ改
嚴シテ開
稱シテム
堂ヲ開
洞爽道永
ノ需依
リ自像ニ
贊ス
法嗣

開堂、乃撤舊額改今名、道永割大艸・下原二村、以充衆供、又画師肖像需贊、師便書曰、祈開福地、坐斷乾坤、西天東土、盡是兒孫、關田邑民、有以劫盜爲業者死、族黨請師秉炬、既及臨場、黑雲驟起、暴雨迅雷、師以炬打圓相曰、三世諸佛亦如是、歷代祖師亦如是、天下老和尚亦如是、汝亦如是、我亦如是、如是如是、扣棺三下曰、翡翠蹈翻荷葉雨、鷺鷥衝破竹林烟、擲炬安坐棺上、時空中聲曰、重罪惡人吾將奪屍、服禪師德吾儕空去、雷罷雲晴、須臾天如洗、永正十五年正月示疾、謂左右曰、仲春我生辰也、傳法之時亦仲春也、取滅復當爾也、二月八日、集門人、苦口遺誡、奄然而化、壽八十五、臘六十八、徒衆昇全身、塔于山阿、嗣其法者、龍拈祖菴・洞禪養拙・妙仙來鳳・太平^(長吉)堂・大泉^(德松)偃龍五人、

〔日域洞上諸祖傳〕

下 福嚴寺盛禪夷禪師傳

師諱洞爽、號盛禪、遠州周智郡人、父母常詣佛祠禱子、永^(享)亨年中、母氏感異夢乃娠焉、甲寅仲春、安詳而產、七日後、有僧、儀貌端嚴、以梅華一朵與師、師含笑而探之、其僧忽去無方、華亦化烏有、而一室猶芳菲、父母奇之、二歲春、就父求其華、父驚異曰、是何華乎、師曰、祖師所賜之一枝也、是言之初、自是言語通利也、常不與群兒遊戲、見僧侶則敬之、見法器必翫之、文安二年、洞松靈岳和尚、有遠州之行、歸路偶憩師之家、見師骨相奇秀、就父母乞之、父母喜曰、我等常憶、此兒非塵中物、今師乞之、實惟幸也、岳攜之歸寺、爲剃度、師性最敏穎、

秋葉山ニ
參籠ス

越前龍澤
寺ニ住ス

習學日新、稍長、志遊歷、始入洛、寓止建仁、往來瑞龍・慧日之間、究臨濟宗旨、一夜禪定中見神人、青衣峩冠、儀容挺特、告曰、我奉大洞祖師之遺命、護公日夜不怠、公今棄洞宗入他門、故我欲去、然無上法器、惜別來見、師問、卿何人耶、神人曰、我是遠州秋葉之神也、言訖而隱、師驚悟、明旦徑趨遠州、先上秋葉山、謝加護之恩、山有大悲堂、七日煉頂祈願進道無障、次登大洞禮祖塔、時如仲嗣子嘿堂智公董大洞、師附而決擇五位旨訣、得其大要、歸來侍事岳、岳病革、師啓曰、師若不起、教我依誰、岳曰、吾有附法弟子性印、在尾州、是則汝師也、遂託書及遺物、師持而如寶積、通心緒、印聽訃潛然、亦驩師之來、師晨夕參請、研究大事、文正元年二月二十日、入室問答之間、警然契證、印爲許可、遂付衣法、續其席、三月旦、進院開法、知縣道永、信嚮道望、公務之暇、入室問法、得入處、道永患其地湫隘、不足容衆、相攸於大艸山之西北、大營造禪刹、經三祀落成、大殿・雲堂・山門・庫院、凡伽藍所宜有者、輪奐全備、見者拭目、已而迎寶積佛祖之像移此山、師領衆入寺上堂規則嚴如、四衆歡呼、於是寺改福嚴、山名大叢、稱印爲開山第一祖、道永割大艸・下原之二村、以永充衆供、此山乏水、師一夕上翠微、禪坐樹下、黎明水出膝下、自甃石貯滄、早年不竭、名曰金剛井、明應七年、得請莅越之龍澤、大振宗猷、一周歸福嚴、永正^(三年)丙寅、有大洞之請、師以老不行、差祖菴彭公充其任、道永圖師之像需贊、師便書曰、祈開福地、坐斷乾坤、西天東土、盡是兒孫、本州關田邑、

有強壯勇悍而以盜爲業者、常率其黨、處處劫奪、殺人放火、不可勝計、延德年中疫死、黨屬就師請秉炬佛事、時正青天、當纔舉棺、黑雲俄來、驟雨迅雷不可言、衆人驚怖、師秉炬打圓相曰、三世諸佛亦如是、歷代祖師亦如是、天下老和尚亦如是、汝亦如是、我亦如是、如是如是、以炬扣棺三下云、翡翠踏翻荷葉雨、鸞鷲衝破竹林煙、乃坐棺上不動、時空中有聲曰、極重惡人、天將罰、禪師不許、我等空去、大笑一聲而天如故、見聞無不嘆異、(永正十四年)丁丑冬十月示微恙、至春倍篤、其徒住院者來集、師云、吾生日甲寅春時正也、入室傳法之日亦時正也、今當取滅於時正之日、二月八日、集衆、苦口遺囑、奄然而化、壽八十五、臘六十八、徒衆奉遺命、塔全身於山阿、受戒者不知其數、得法者五人、曰龍拈祖菴・洞禪養拙・妙仙來鳳・太平正室・大泉偃龍、各各弘通宗脈、支派曼衍、○日本洞上聯燈錄異事ナシ、

法系

〔日本枝派之圖〕

○普濟寺文書所收

月泉和尚

盛禪洞夷

〔日本洞上宗派圖〕

濃開元開月泉性印

尾開元二世
州福嚴世盛禪洞夷

三龍拈開祖菴英彭

濃洞禪開養拙自牧

越妙仙開來鳳一復

尾大平開正室長吉

尾大泉開偃龍偉松

〔東寺過去帳〕

海弘上人 (集書) 永正十五四十四、五十八、長谷寺初瀬寺十穀也、兼帶當寺大海勸進、

〔法華宗諸寺歷代〕 洛陽妙塔
山歷代

十八 圓通院日譽大僧都 永正十五戊寅七月廿七日、

〔鹽山向嶽禪庵小年代記〕 (永正)
十五戊

笑源和尚示寂、八月三日、文海和尚示寂、九月廿三日、

性天和和尚示寂、十一月廿日、

〔千畝派列祖略傳〕 佛通子山和尚

師諱玄孫、備之中州吉井人也、少才藻卓絕也、父源姓、大江某者也、世歸禪門爲外護、師依大月旗菴和尚得度、出游丹金、藝許、參友諒於長松、友諒和尚、舉馬大師日面月面之語、師著精

長谷寺十穀海弘

妙滿寺日譽

甲斐向嶽庵笑源

同庵文海

同庵性天

安藝佛通寺玄孫
備中吉井人

永幢周益
ニ參ズ
周益ヨリ
印可ヲ受
ケ自贊ノ
頂相道號
ノ二大號
及ビ頌ヲ
授ケラフ
ル

丹波天寧
寺ニ住ス
上堂法語

周益忌日
拈香ノ頌

林廣庵ヲ
開ク

法嗣玄信

丹波常喜
寺ニ住ス

安藝佛通
寺長松庵
ニ住ス
玄信ヲ印
可ス

備中洞松
寺繁俊
永平寺十
一世

見性寺永
明寺ヲ開

永正十五年雜載

四五二

彩、參究凡七年、曾無入所、友諒愛師撒手嶮崖無退心、看古人頌、頌曰、日面月面、無位真人
赤骨律、嘉州大像喫塩多、陝府鐵牛添得渴、阿刺刺、百川倒流開聒々、師於此入得、友諒和
尙證明焉、書自贊并子山二大字兼字說與之、贊曰、日面月面、桃花梅花、君子可八、采奔齷
家、字說曰、子者嗣也、所以孳々無已、承嗣清業也、至加子者、人之嘉稱、而凡有德者稱
君子、最尊者稱天子、况又孔門之顏子、曾子、以子稱二子者、所以分的庶也、到宗門食蝦名覬
子、居船稱船子者、實實無私者也、山者產也、所以高大宣氣散能產萬物也、管子曰、凡天
下名山、有五千二百七十、出銅之山四百六十七、出鐵之山三千六百有九矣、世實可知本出
從山、宗門亦有出人之名山、竺乾有靈山、支那有嵩山、到五山・十刹、五家・七宗、如靠山架梵
刹者、皆是要接出吾家之的也、大矣哉子山之義也、孫禪子、實吾畝翁之玄孫、而老僧的子
也、今也字稱子山者、希山水養道氣、承嗣家業、子孫綿々矣、師辭、出世于金山、嗣香供友諒
和尚上堂、舉閩王請羅山開堂、羅山纔登座、以手斂僧伽梨、顧視大衆、便下座、閩王近前、執
羅山手曰、靈山一會、何異今日、羅山云、將謂你是俗漢、師曰、是賊知賊、唱拍相隨、只如羅
山道、將謂你是箇俗漢、又作癡生、明月夜光多按劍、知音更有青山外、友諒忌頌曰、空中
舞劍死生窮、難透話頭活路通、手植歲寒巖上竹、至今草閣引清風、師晚開林廣庵、爲安息之
地、請先師友諒爲開祖、遺文曰、須彌粉碎、大海枯渴、石苟抽條、身心解脫、端坐寂矣、于時

永正十五戊寅年九月九日也、師世壽八十一、歷臘六十餘夏、嗣法有云、朋山玄信者、

佛通朋山和尚

師諱玄信、丹之後州久美之人、父藤姓也、師少有風格、鄉邑自崇重、于時子山和尚、住于郡
之常喜、師隨父往詣常喜、拜子山和尚、子山和尚、示以廓菴十牛之圖、至人牛俱忘、父略知
其趣、歸崇宗門、乃令師出家、師進落髮、子山和尚度之、名玄信、數歲之後、撥艸參玄、（義存）師
於此有此省所、歸來訪子山、于時子山和尚、住藝許之長松、師呈所解、子山不顧、重舉雪峰
山成道之因緣、至岩頭曰、須是自己胸中流出、蓋天蓋地、方有少分相應、師豁然大悟、（略）
（全義）

舟木山洞松禪寺住山歷祖傳

當山傳燈前任秀峯俊禪師傳

永平十一世、見性開山、

（志繁）

師諱繁俊、字秀峯、長州之產、吉見氏之子也、度緣僅失其考焉、游方而偶見于洞松茂林禪
師、親參詳入堂奧矣、視地於猿懸城畔、築見性寺、毳侶奔走、而德望一時高矣、蒙林師之遺
命、輪冢于本山、（洞松寺）一回去、又憩見性寺矣、曾長州刺史吉見三河守者、源家之庶流也、於大井鄉
剎永明寺、使請月因初公而爲演法焉、吉見氏物故而號大年道珍居士、其子葉、文龜、永正之
間、移居於石州三松、（永明寺）本寺又從事焉、今之津和野永明寺是也、師以爲同族、請而令開法、依此
稱中興開基焉、嗣子四員、曰禪菴、（繁興）曰德翁、（玄威）曰全翁、（玄機）曰祖超也、（月）囑後事於禪菴興、而戢化畢、
永正十五年戊寅十月三日示寂矣、永明回錄數回、語錄等盡煨燼、

永正十五年雜載

四五三

永明寺者、月因初公創開之地歟、故今稱開山、雖然法系依師而嗣續、永明中興開山之稱必矣、

法系

〔日本枝派之圖〕

○普濟寺文書所收

茂林志繁

崇之性岱

秀峯繁俊

大空玄虎

○玄虎恐ラクハ性岱ノ嗣ナラン、繁俊ノ嗣トナスハ、系線ノ過誤ナランモ、姑ク原圖ノマ、之ヲコ、ニ掲ゲ、

〔日本洞上宗派圖〕

參 洞松二世 州龍溪一 茂林芝繁

石州永明二世 秀峯繁俊

永明三世 禪菴繁興

德翁玄威

玄機禾上

祖月禾上

〔根本寺文書〕

○常陸

常陸國鹿島郡瑞甕山根本寺創建由緒并世代之覺

常陸根本寺明岳

紀伊則岡 久榮 父山政 國政 諸所ニ仕 從軍ス

陸奥石川 顯光

一 禪林開山教外得藏和尚、入宋傳法人、貞治丙子入院、貞治四年正月三日ノ條參看、二世大圭和尚、入院年号不知、應從三

世十二世迄、世代不知、十三世立之岳和尚、明長 入院年不知、永正十五年迂化、○下略

〔則岡系圖〕

○紀伊 本國 橘姓則岡氏系圖

長久

久榮

伴左エ門尉、後勘解由左エ門尉ト改ム、號德長院壽山淨久大居士、妻丹下備中守女、

父長久同様ニ而、政國（島山）・高政任、河内落合之合戰、又ハ攝津國芥川并舍琳寺合戰之剋、政

國公・高政公兩將ニ而、久榮八百余騎ニ而三陣ヲ堅、淀川ヲ隔、河内佐田天神ニ陣ス、高名

數有之、永正十五戊寅二月十五日卒、

女子

貞久

能久

慈祥

〔石川大安寺由緒〕

當寺開基并開山由緒

〔白河古事考〕

永正十五年五月六日、刑部太輔顯光公逝去、法名大法院殿全宗提公大居士、石川 下略郡界沿革當今名目付

安藝完戸
元源嫡子

刑部太輔顯光、永正十五年五月六日卒ス、FO上略

〔萩藩閔録〕 完戸一統正嫡

元源嫡
完戸左衛門尉元家、永正十五年六月十八日死

〔平賀家文書〕 平賀氏系譜

宗永

安藝平賀
保繼惣領
ト争ヒテ
滅ブ

保繼左衛門大夫、永正十五年与惣領矛楯、小早川勢ヲ相語フノ
間、七月五日、弘保・興貞押寄、被責落松獄ノ要害、自害ス、
(平賀) (平賀)

貞景

〔佐竹諸士系圖〕

八源姓中川氏

重紹

美濃中川
重守

重守 (上岐民部太輔頼常女)
母同、四郎左衛門尉、

住濃州大野郡川嶋、因爲川島氏(大カ)丈塚・那和谷等祖、永正十五戊寅年八月十六日没、法名
玉山梁鏡、

〔播磨丹羽家譜〕

坤丹羽氏軍功錄

尾張丹羽
氏員
本郷城ヲ
築キテ居ル

氏員新助氏、嗣立、住尾州愛知郡本郷城、本郷城ハ氏員令丹羽彦惣茂勝築、移于此、氏員、永正
十五年戊寅十一月十八日卒、

〔三草〕 丹羽家譜

乾

世系

氏從 ヨリ 氏範嫡子、
和泉守、

氏員 氏從嫡子、新助、
住尾州愛知郡本郷城、

法名

本郷城、氏員令丹羽彦惣茂勝築、移于此、永正十五年戊寅十一月十八日卒、法號實應院
殿悟室道參禪定門、

氏興 氏員嫡子、
平左衛門、

〔寛政重修諸家譜〕

八十五丹羽

氏從 和泉守、

氏員 新助、

愛知郡本郷ニ城を築テうつり住す、永正十五年十一月十八日卒す、悟室道參ト號す、

氏興 平左衛門、

〔東寺過去帳〕

深草祭時喧嘩、死亡輩數十人、〔裏書〕「永正十五五五」

中堂寺喧嘩、死亡族數十人、〔裏書〕「永正十五七十六、在所衆取合、當座死者衆、并手負後死去

永正十五年雜載

四七七

深草祭時
喧嘩ノ死人
中堂寺喧嘩

嘩ノ死人
山王祭
園會喧嘩
ノ人

學藝・遊戯

衆、此内女六七人、
山王祭并祇園會喧嘩死亡、并車ニ被押死等、其外數百人、

加賀在國
ノ中山康
親中山御
宜胤ニ門
神名號天
揮毫ヲ需
ム

〔宣胤卿記〕

四月廿八日、晴、○中略中山黃門康親卿、所望之天神名号ニ唐番、書之、又金光院良秀所望、同名号一唐紙、書之遣了、中山ハ在國、自賀州有狀、返事出庭田、(重親)

〔宣胤卿記〕

永正十五年夏秋 九月

中山中納言康親卿狀、自賀州到來、天神名号事、

猶々名號事、殊餘分申處二枚下給候、一段畏入存候、旁以參上可申入候、

尊翰委曲令拜閱候、抑名號事、乍狼籍千萬申入候處、早速被染御筆候、祝着至極候、便風大切之間、近日下着仕候間、于今不申入候、如何様不圖可致上洛之間、以參謁可令申候、先々遅々候條令啓候、御所勞之由承及候、事急候躰、老後御事候間、御養生簡要候、恐惶謹言、

九月十二日

(中山) 康親

〔宣胤卿記〕

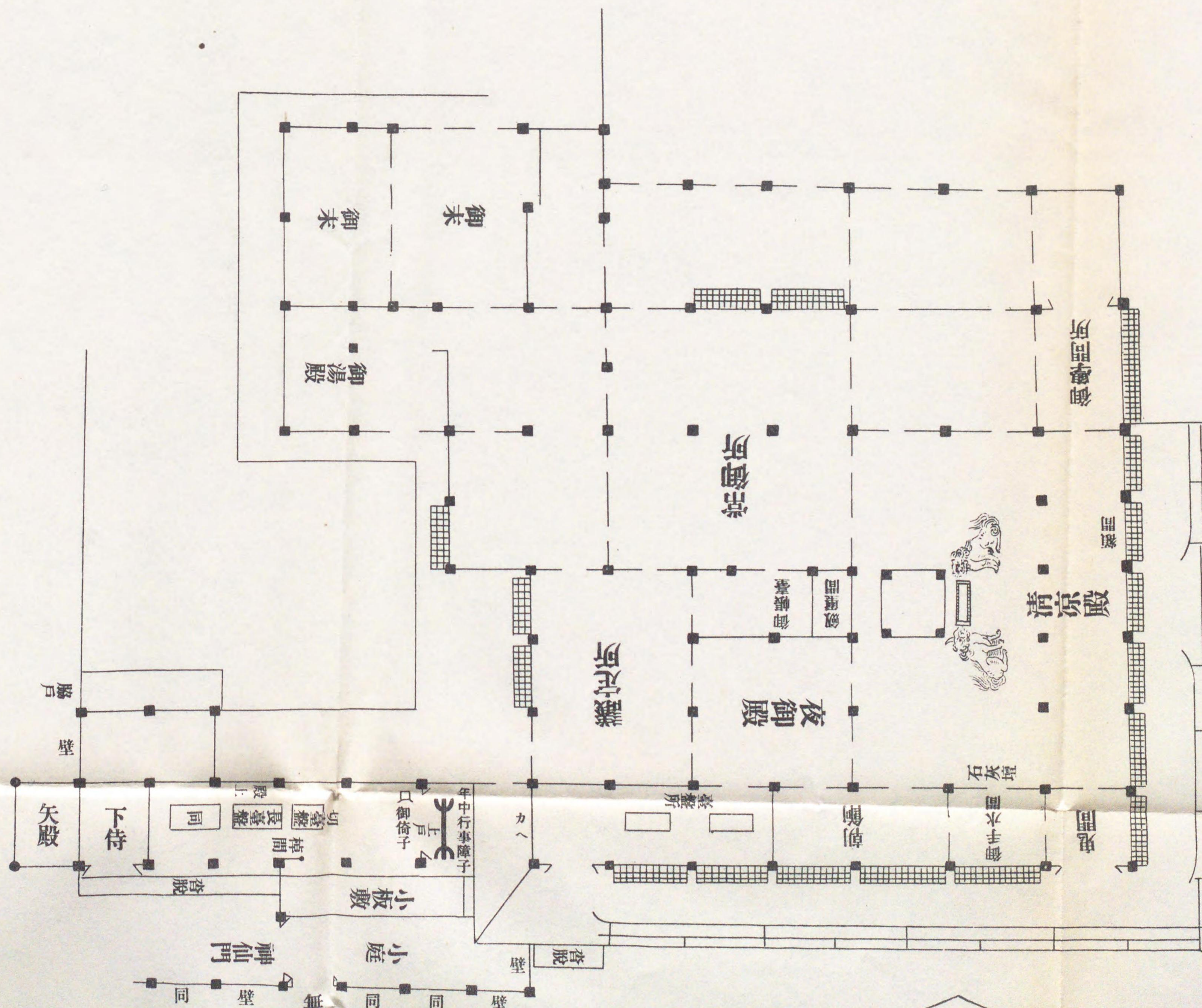
正月廿九日、晴、(萬里小路)秀房朝臣狀到來、内裏指圖借之、遣了、去年借用

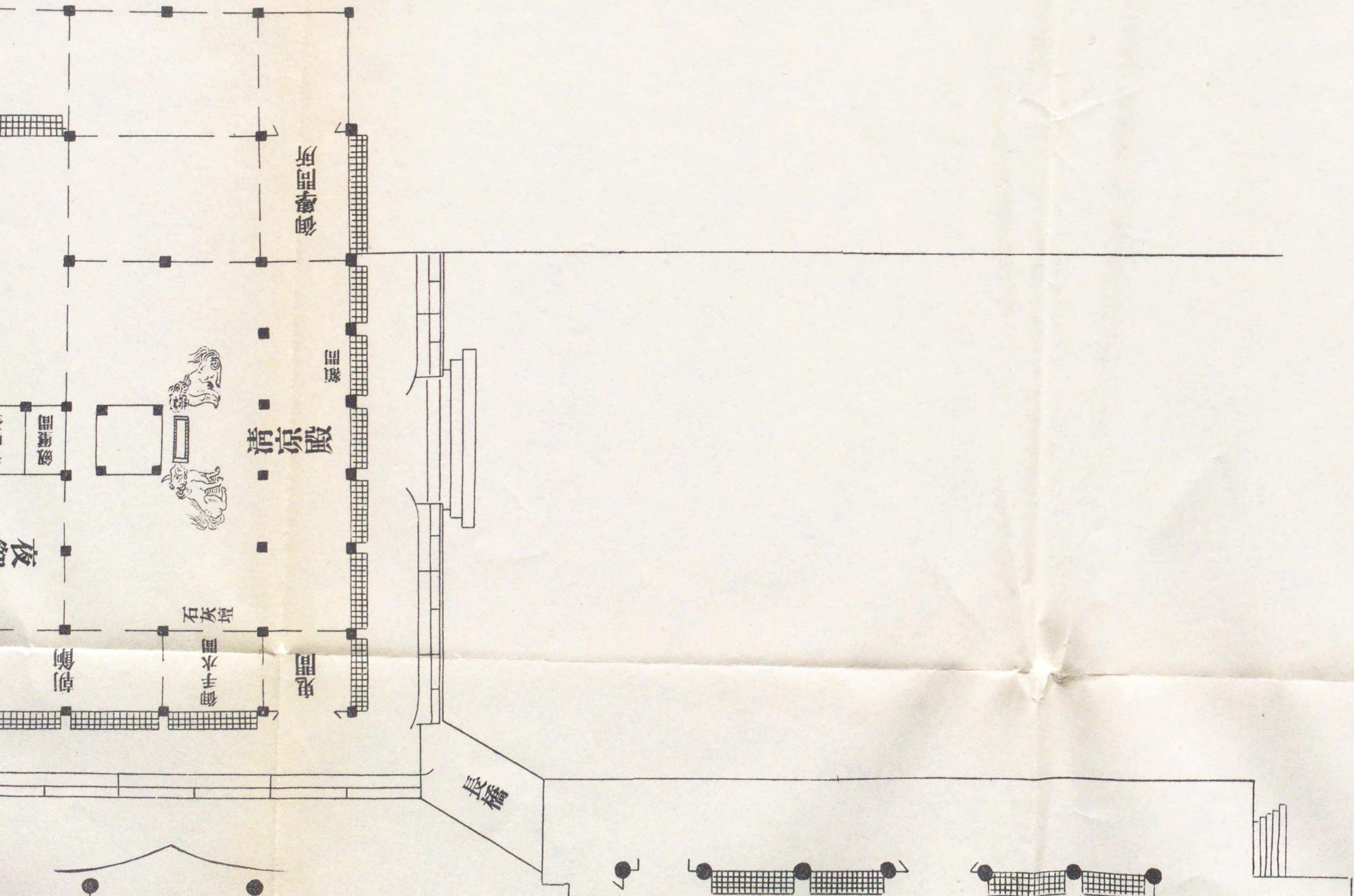
〔内裏指圖〕

土御門殿 文庫記録丙九所收

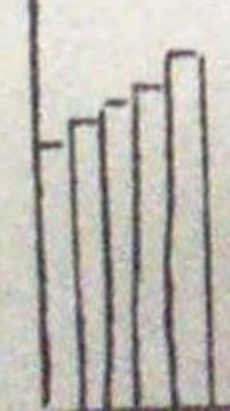
(京書) 内裏指圖 土御門殿 土御門以北、東洞院以東、正親町以南、高倉以西、

内裏指圖
萬里小路
秀房宜胤
スシヨリ
テ借覽



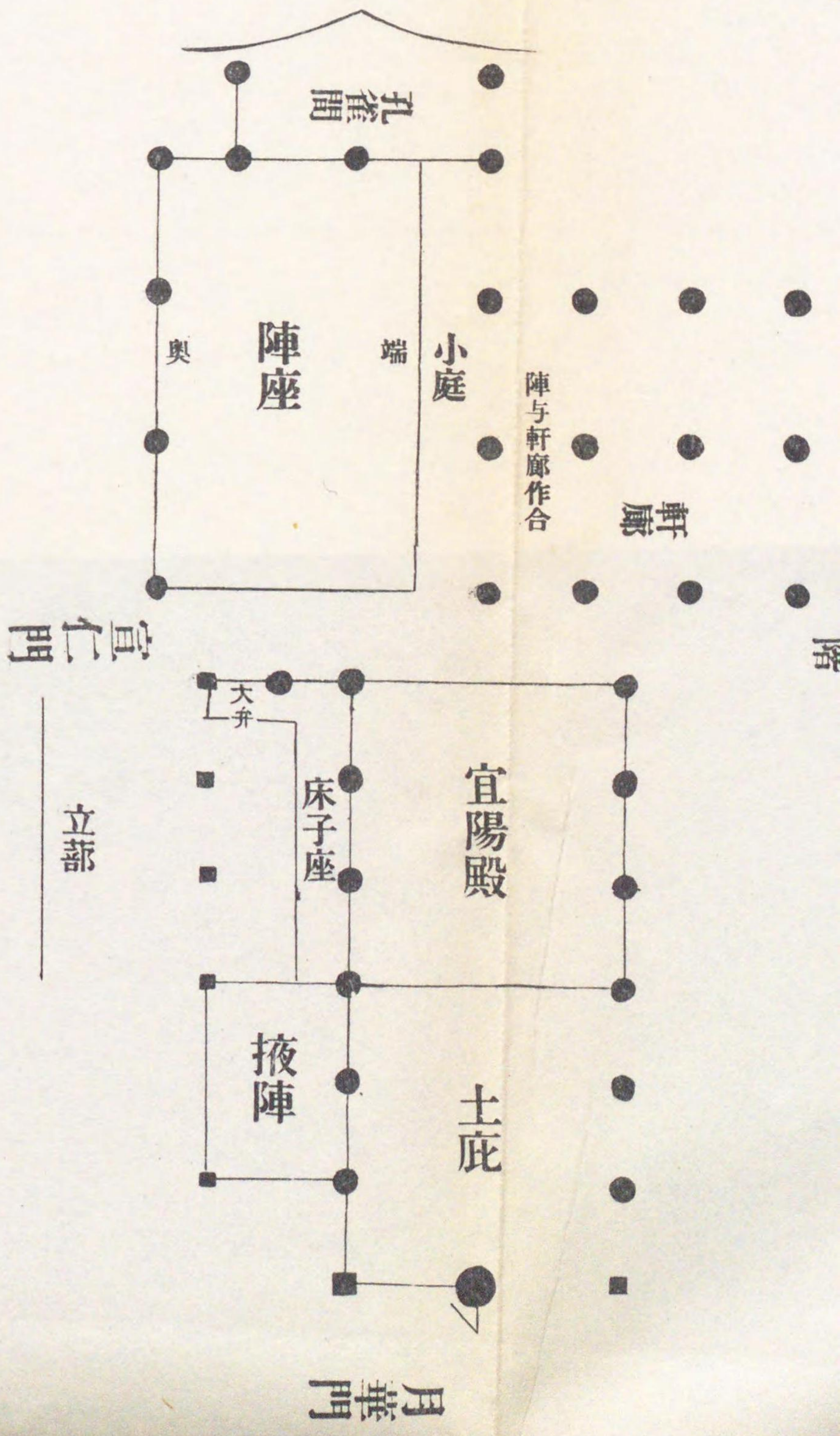
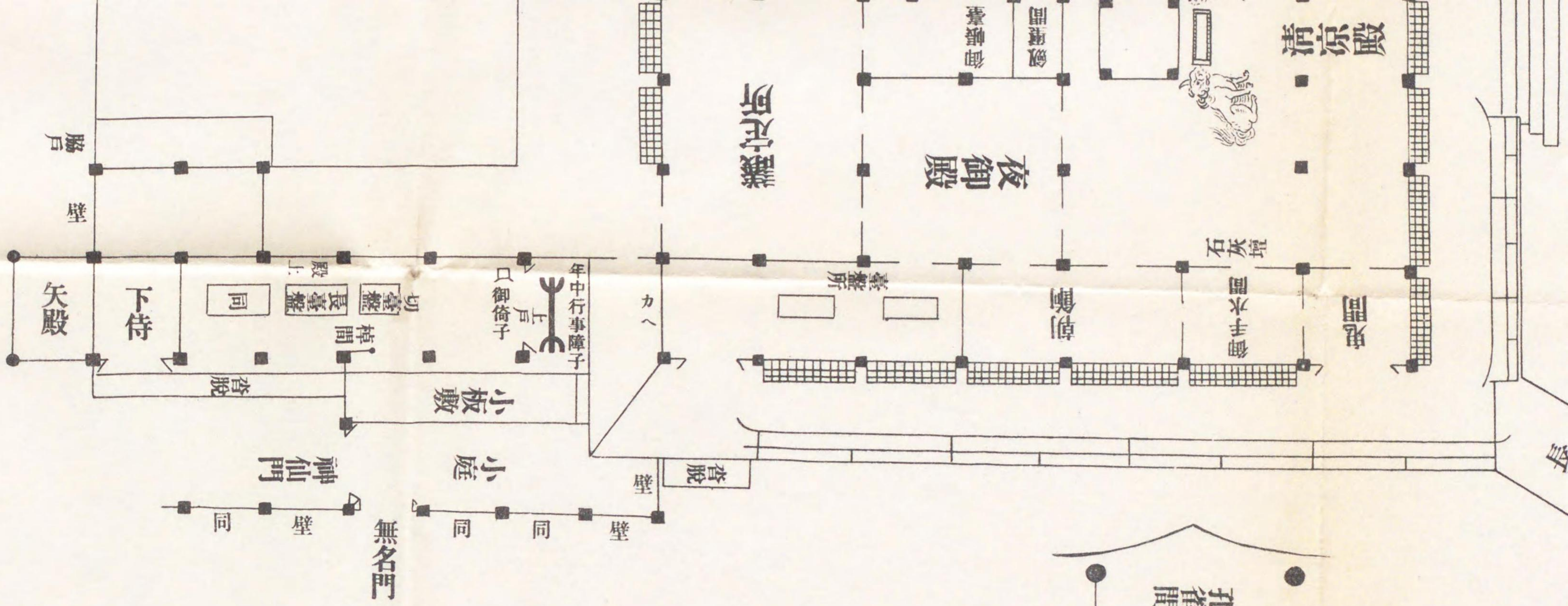


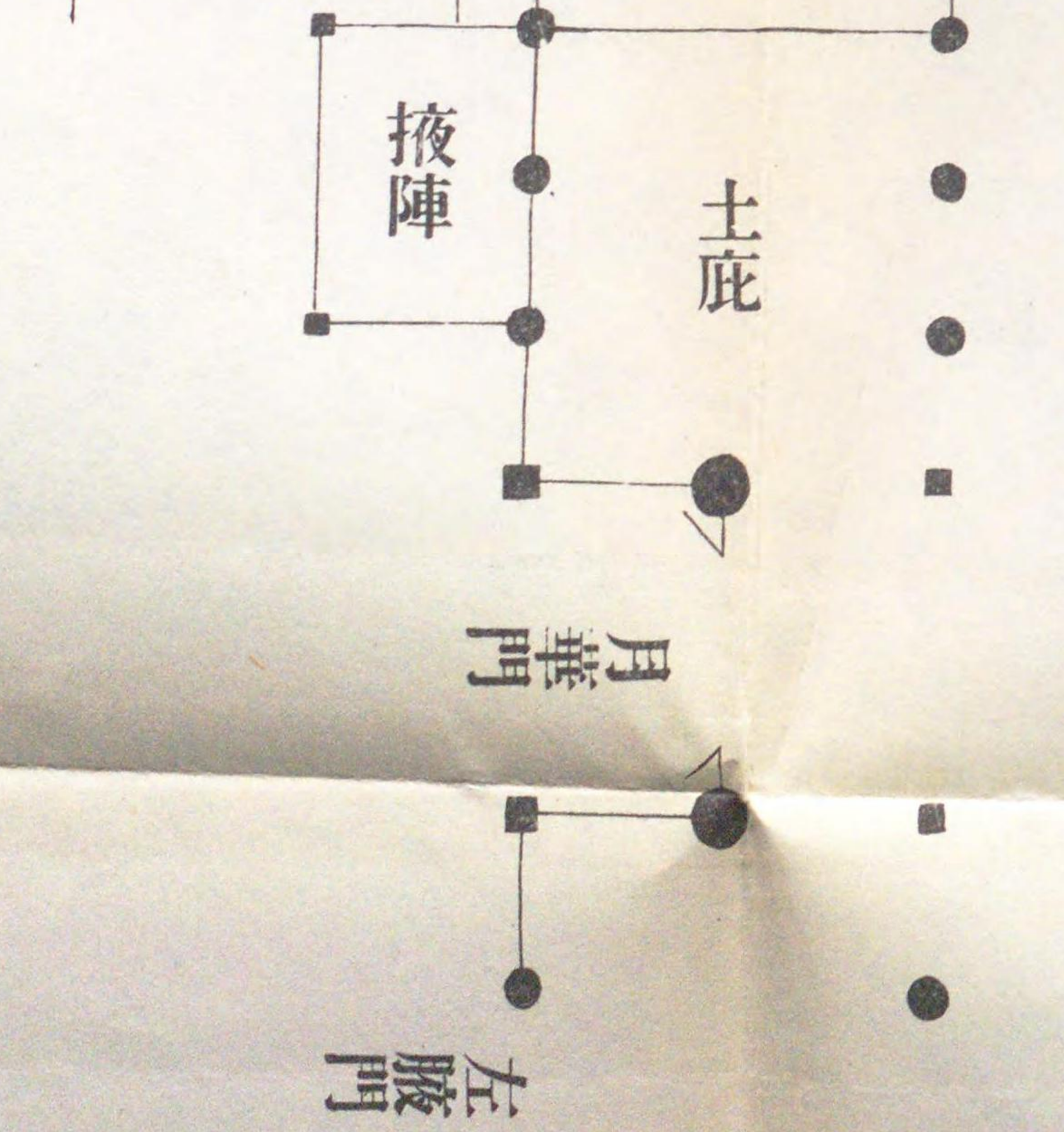
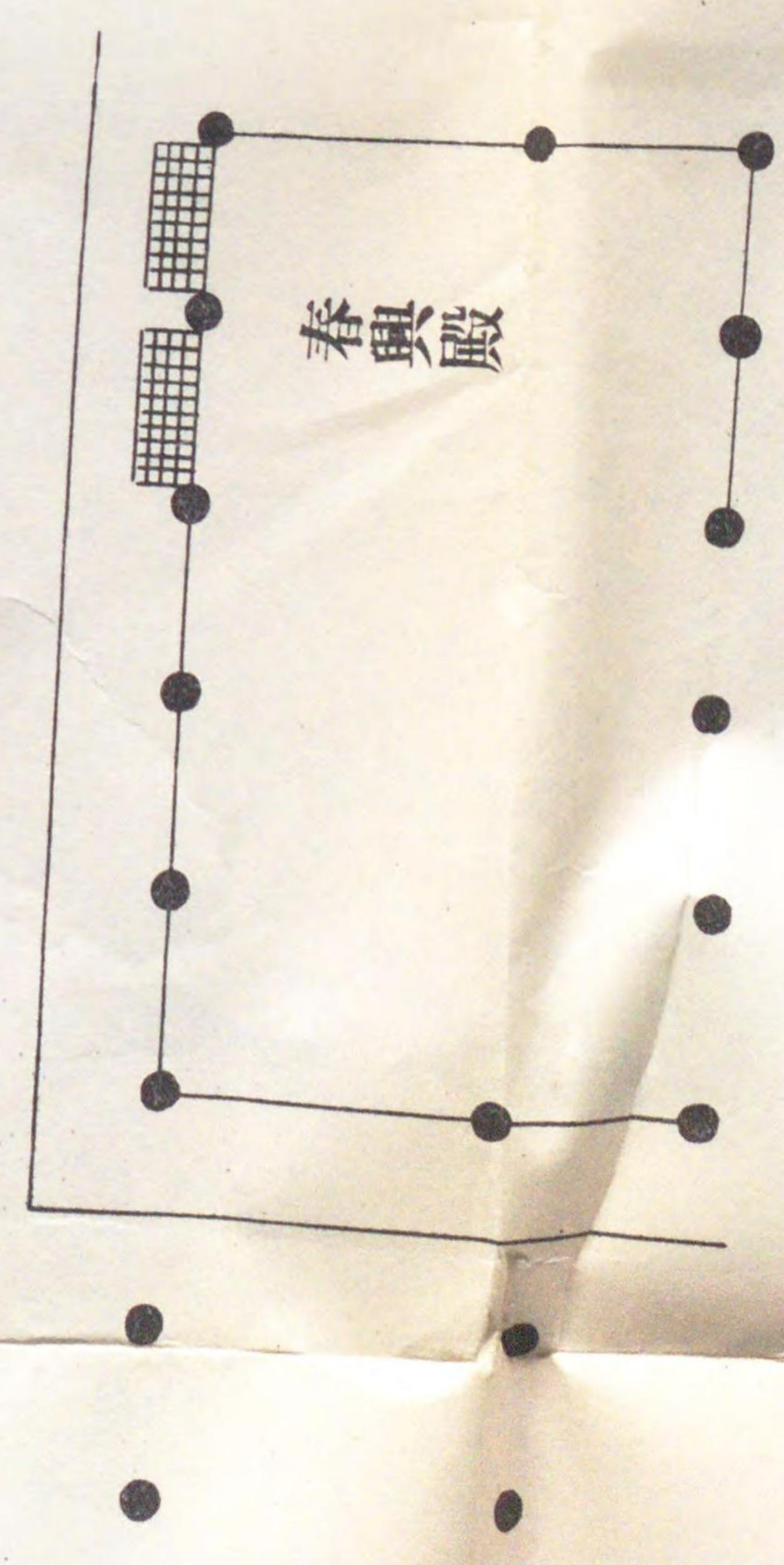
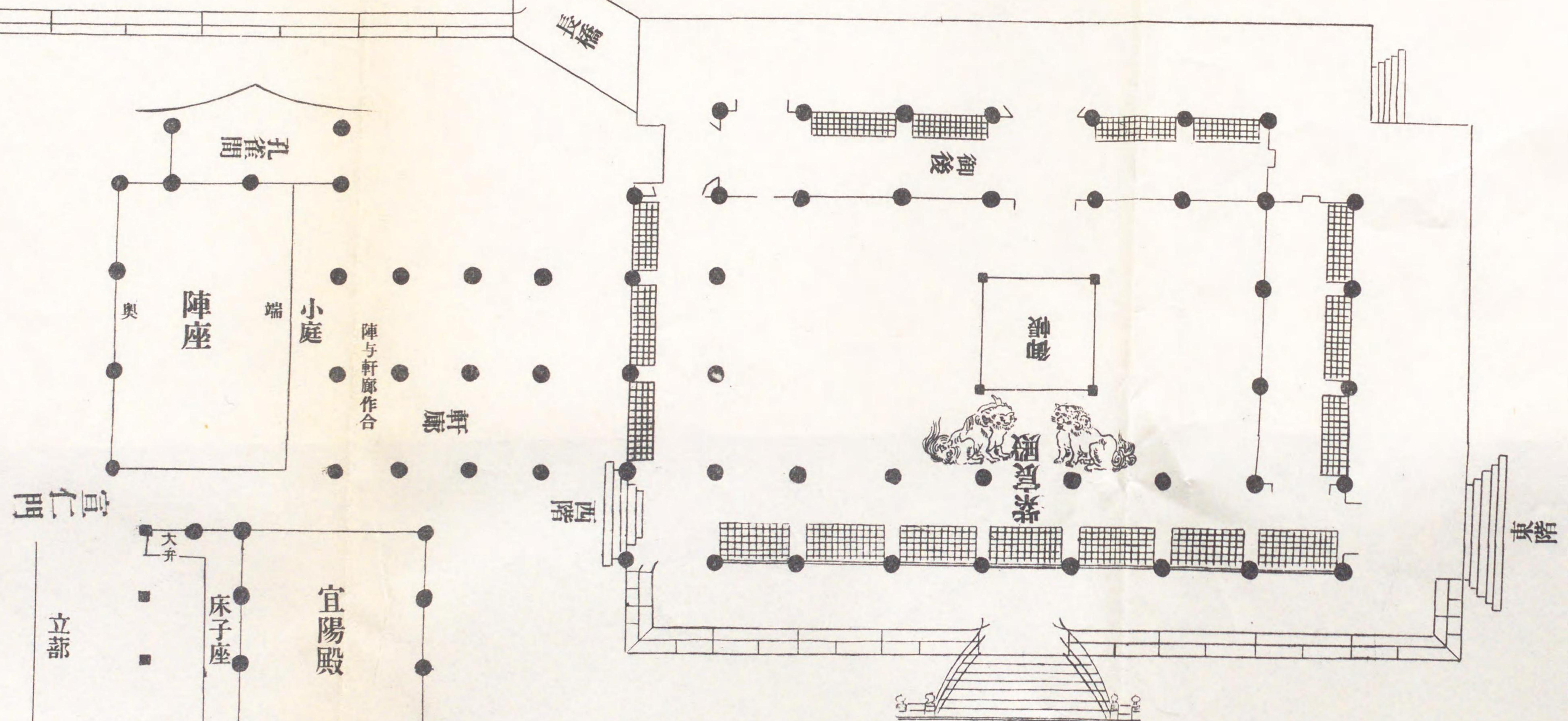
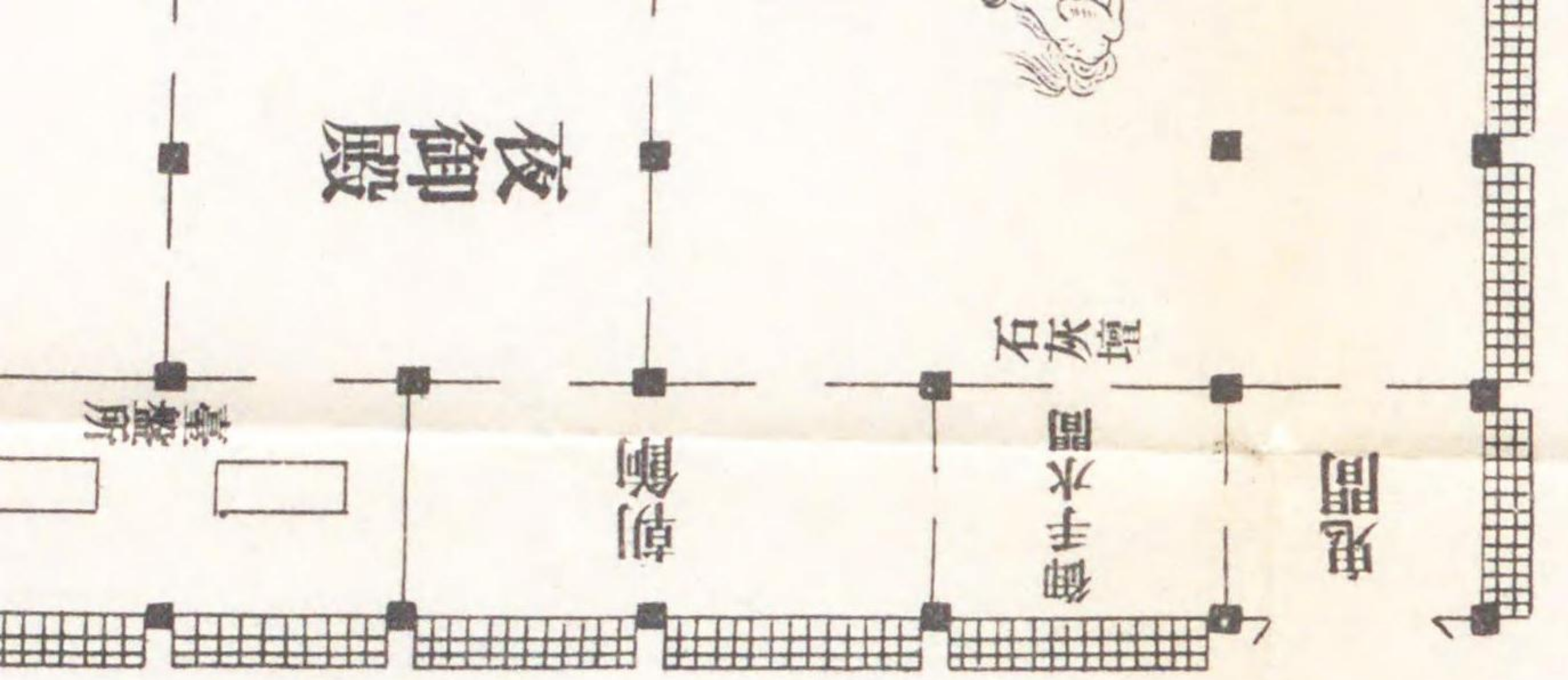
長橋

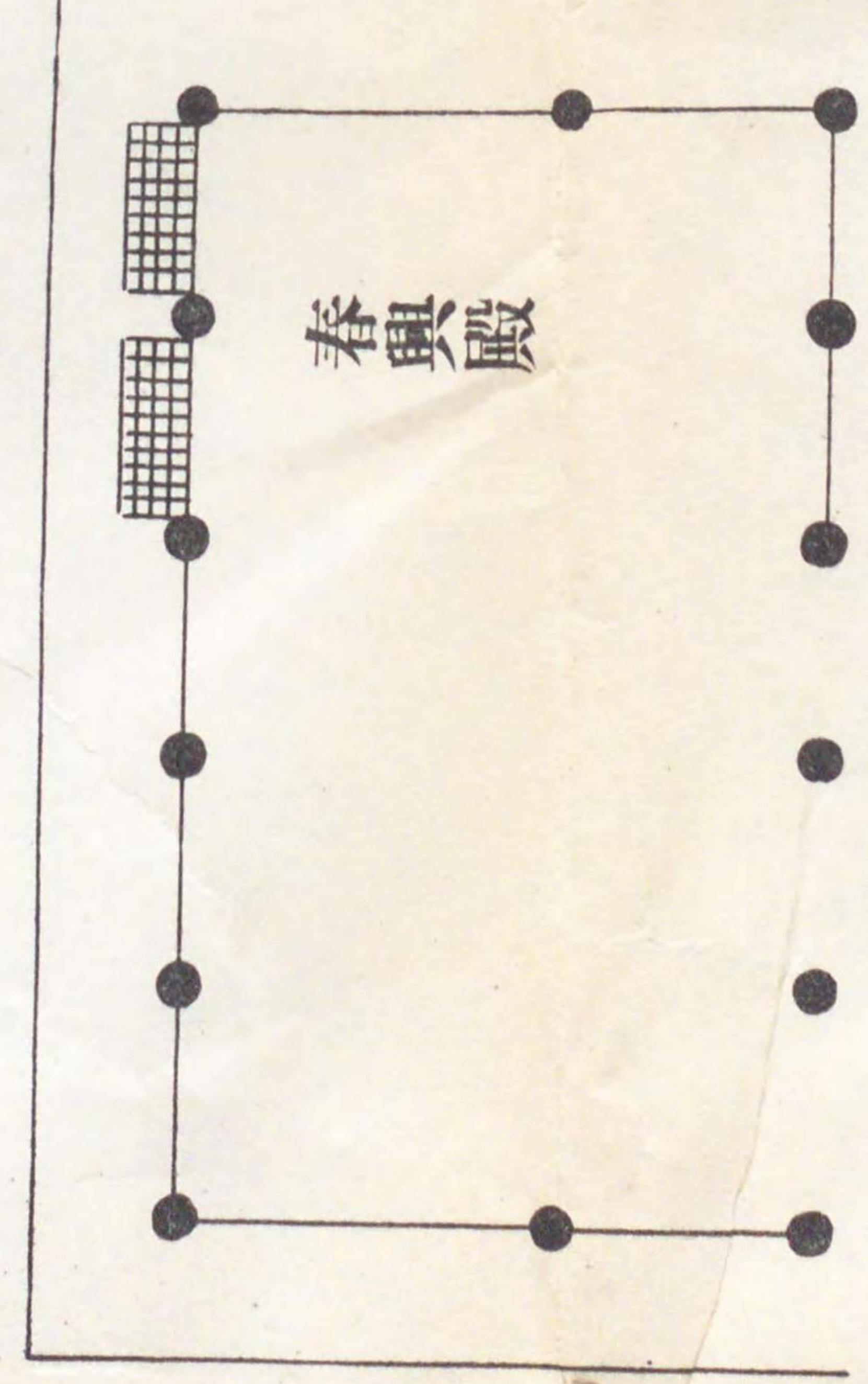
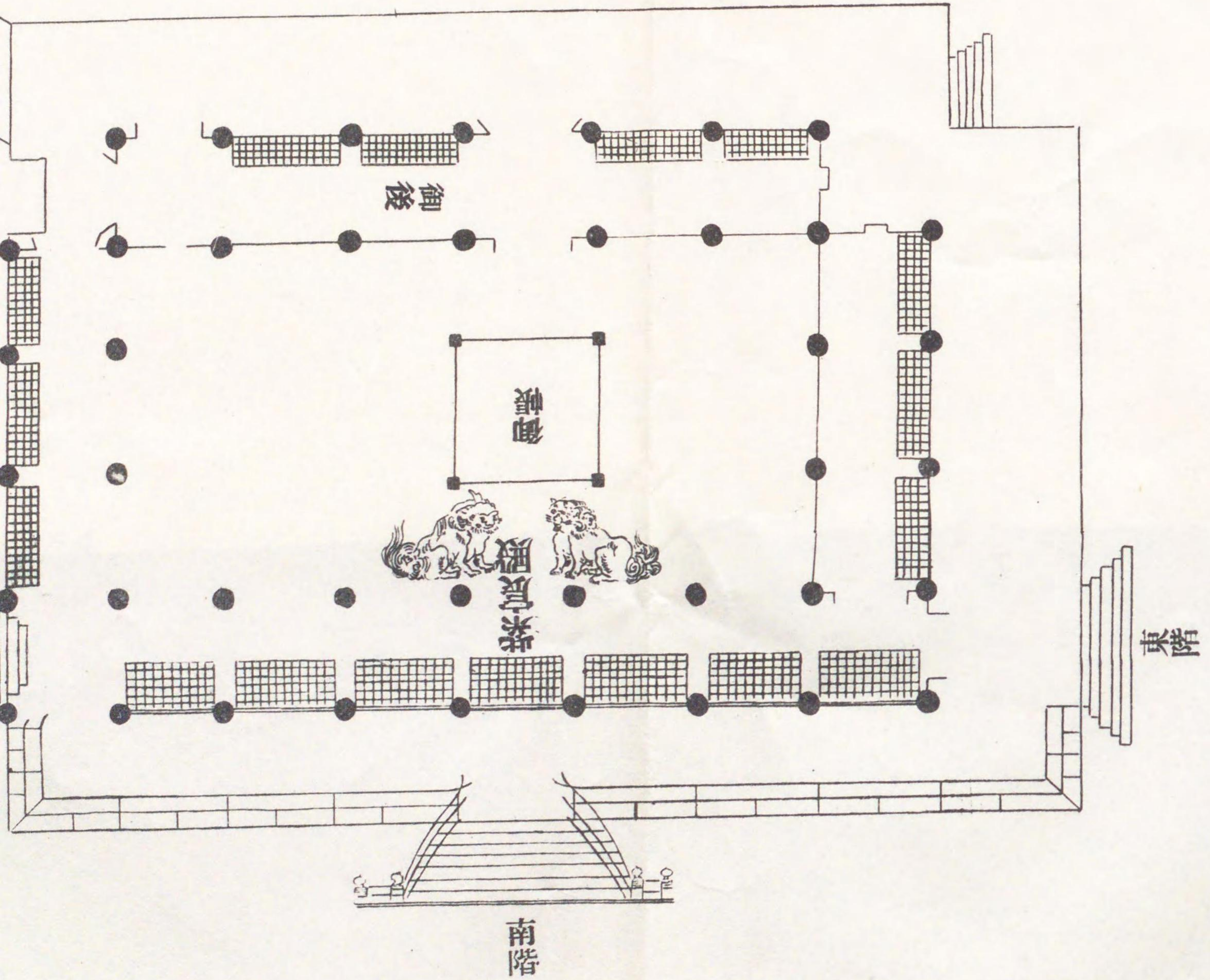


東河院 西

左衛門陣
四足

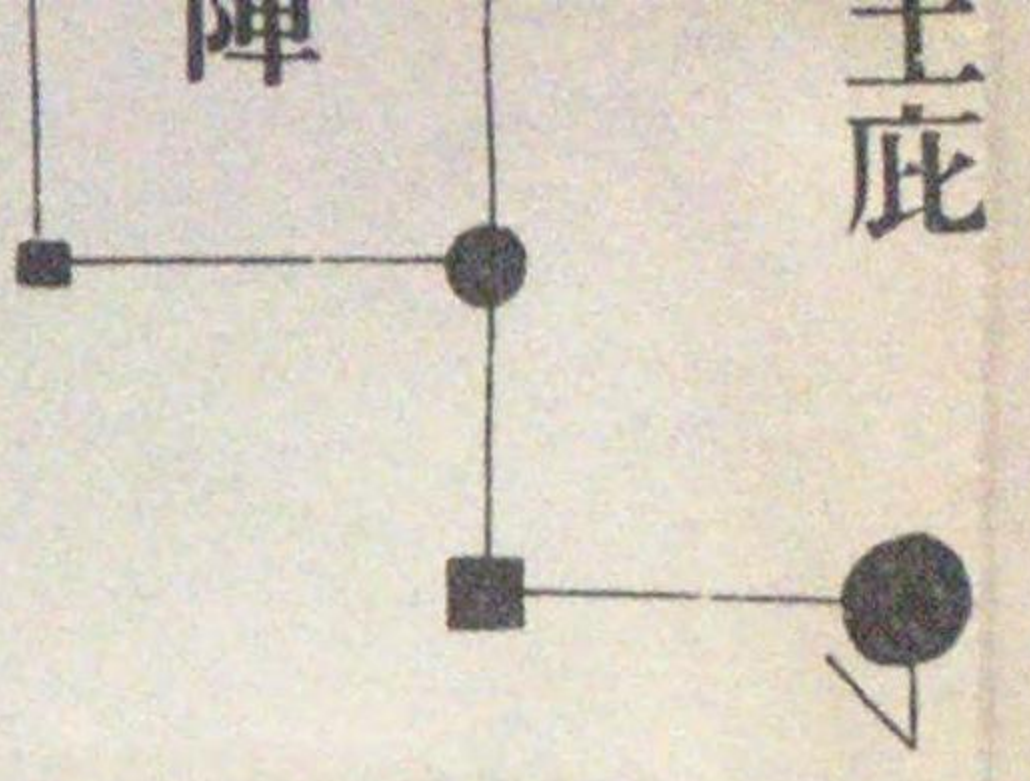




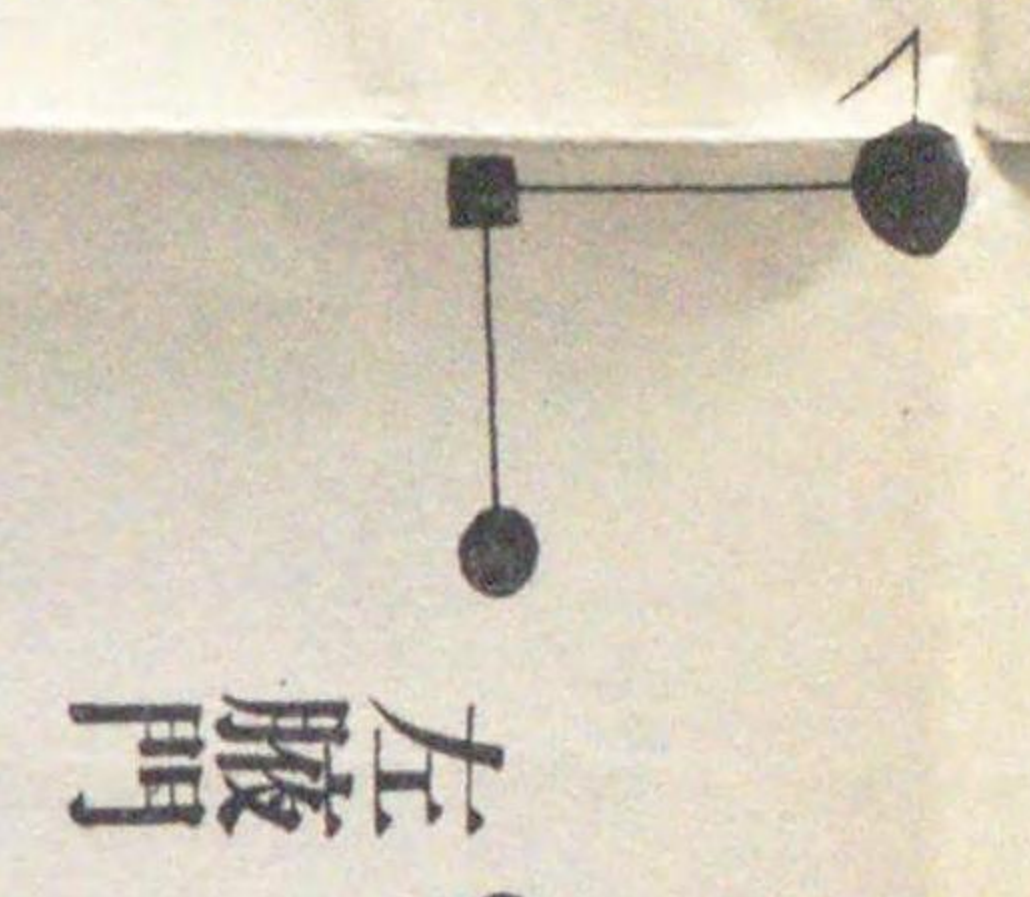


皇宮

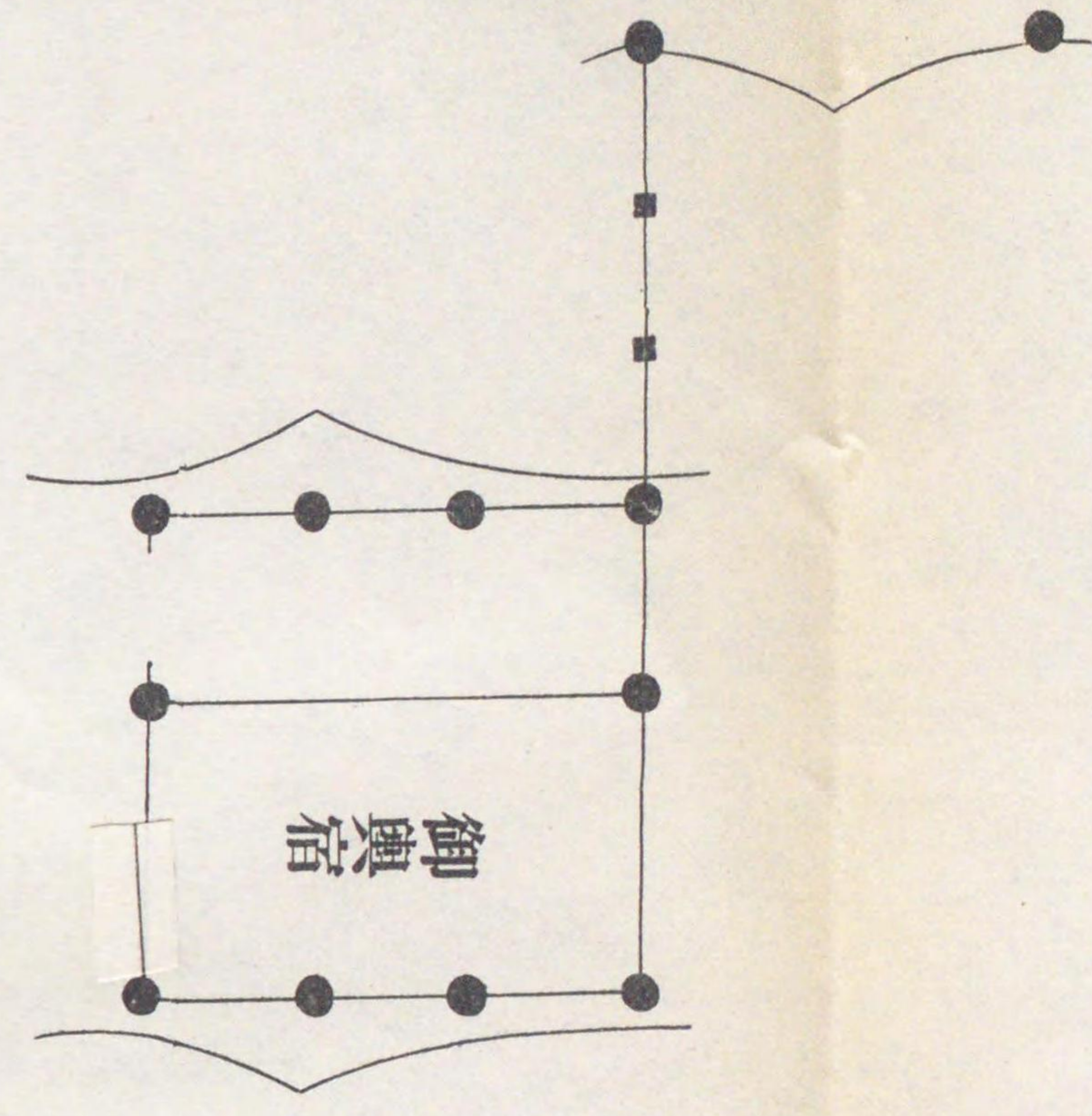
東



月華門



左腋門



御輿宿



左衛門陣
四足





右近橋

此

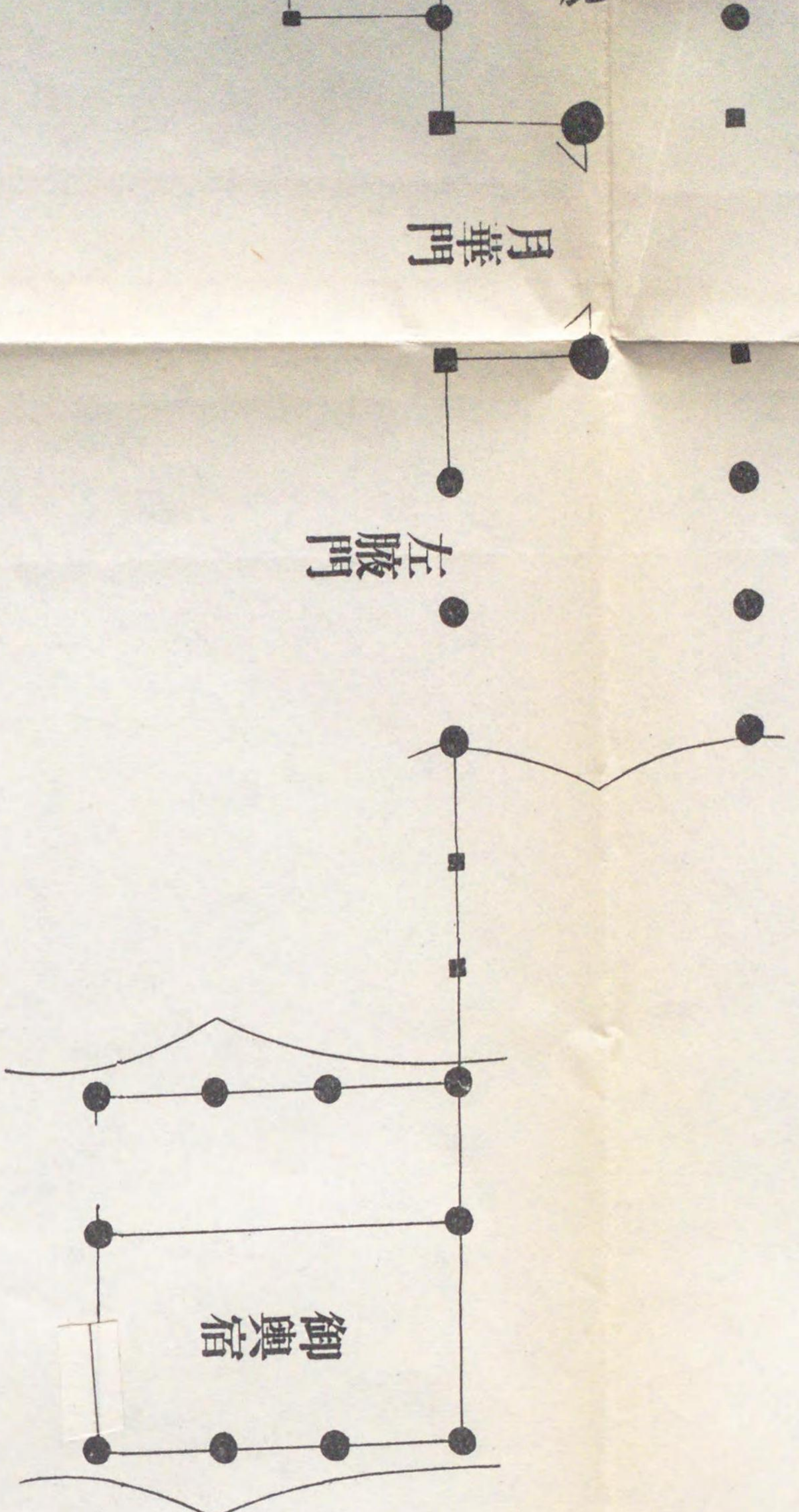
月華門

左腋門

御輿宿

土御門

南

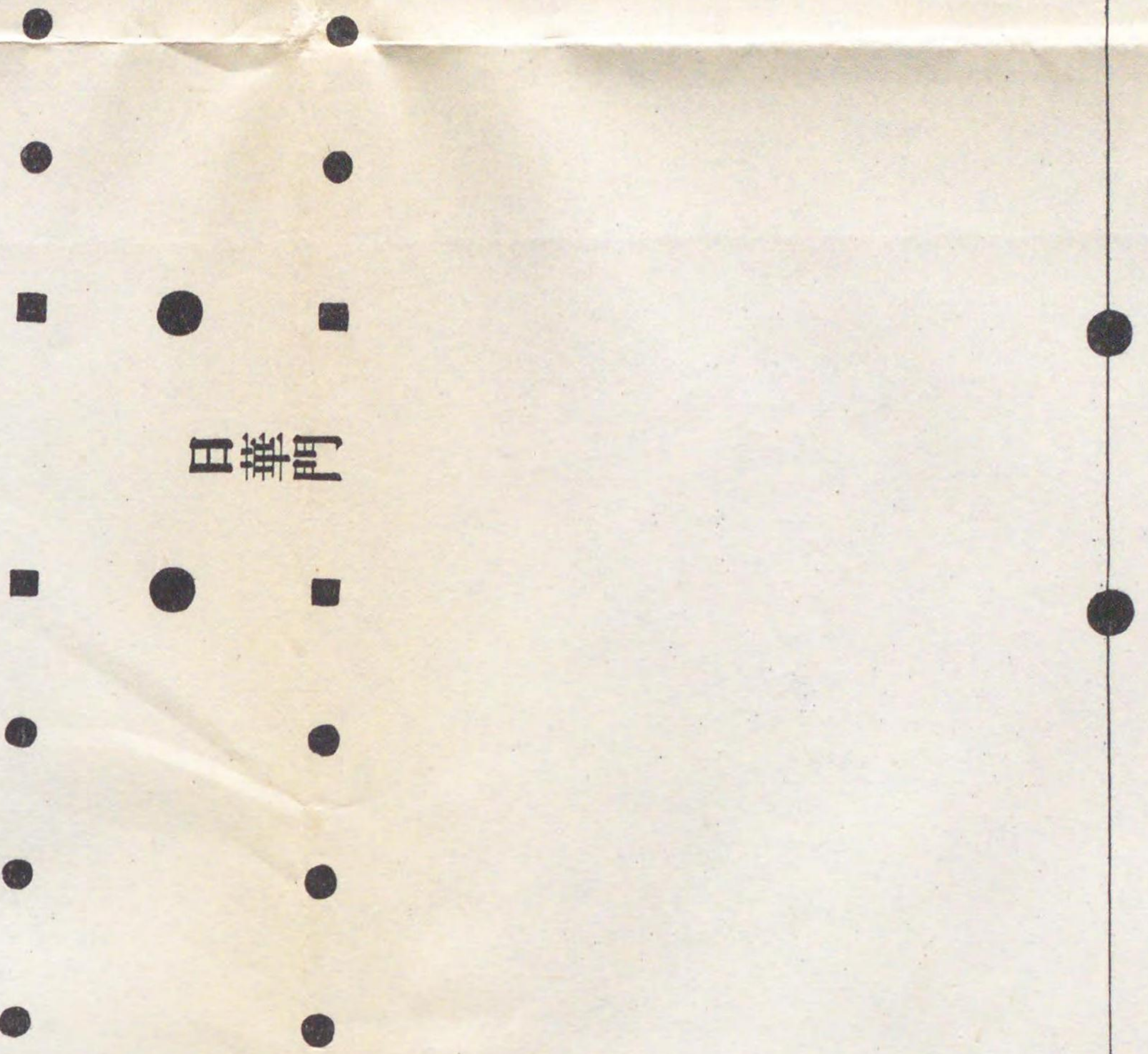
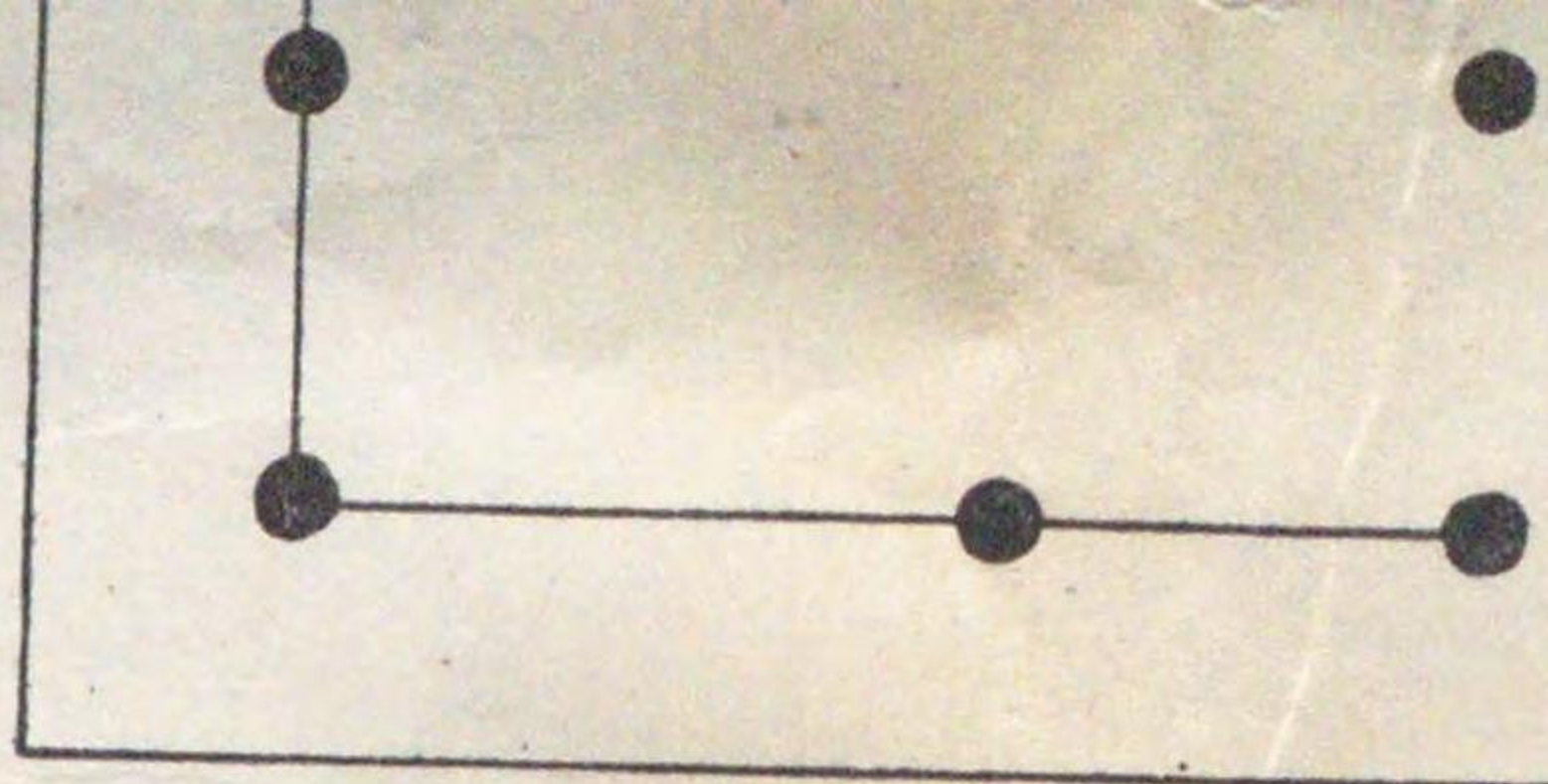


左衛門

右近橋



左近橋



日華門

土御門

南

スヨリ
テ借覽
書寫

〔内裏指圖〕
〔裏書〕
内裏指圖 土御門殿
文庫記録内九所收
土御門以北、東洞院以東、
正親町以南、高倉以西、

永正十五年二月上旬、以中御門本寫畢、

右中弁秀房○圖ハ別掲ノ挿
入圖ニ收ム

〔古文眞寶抄〕

○谷村太一
郎氏所藏

此抄者、(奧書)一元和尚、(光演)就桂林和尚所聽之聽書也、寫以爲吾家眞寶也、

永正十五年三月廿六日

(卷書)清三誌

〔寶生院圖書目錄〕

十一

一法華經序品

奧書曰、拾部之内願主沙門敬愚、永正十五年戊子三月 日、

〔小寶螺講日記〕

○山城高
山寺所藏

(卷書)五月七日、遇逆緣滅亡、
〔建久六年七月十二日夜、於神護寺十無盡院御房、被修小寶螺講日記〕

(奧書)又本云、此一巻、古本南都東院殿年來有披見度□、度々被仰問、仍自然紛失等、寫留、古本下進者

也、本、山本坊良明上人筆跡也、

永正十五六月三日

(朱書)辨朝○コレヨリ以前
ノ奥書略ス

〔音律口傳〕

○山城三
千院所藏

(奧書)永正十五年戊寅六月九日、於向坊、以祕本寫畢、祐運歲廿八

〔高野山寶龜院聖教目錄〕

金函

永正十五年雜載

四五九

古文眞寶抄書寫
德昌ノ所講
光演ノ抄
清三書寫
又
法華經序品

建久六年七月小寶螺講日記

音律口傳

永正十五年雜載

四六〇

曼供草

上曼供草

一帖

〔奥書〕永正十三年^{丙子}十月一日、於念佛寺曼供始行之時、導師成覺寺本坊御草安申請、書寫畢、

秀盛七十二

永正十五年八月廿九日書寫畢、

正海

〔東寺金剛藏聖教目錄〕^{二十}

金寶鈔聞書

三冊寫^{天明三年}隆善

金寶鈔聞書

下終

永正十五戊子八月、時於高野山西院傍草庵書寫畢、是偏奉爲令法久住、利益人天、自他同証、無上菩提、

良任五十六才

右寫本後批

件本在西南院○以後ノ年期
ノ奥書略ス

〔日光常行堂記錄〕^四

田樂舞式并譜次第

〔表紙〕奉納常行堂寶庫

田樂舞式并譜次第

櫻本坊宗興

永正十五年秋

〔見返〕櫻本坊宗興

田樂舞式并譜次第

奉寫施田樂譜次第

常行堂常住

調子盤涉調也、

鼓ハ筒、打、

立次第

一鼓

各本座ニ立并テ、式

二々

代ソ曲ヲ振舞也、

三々

四々

向方笛音取時、

四々

一二様ハツキ出テ、如

三々

出足曲ヲシテ付ク也、

二様サラノサツト、

一様片ヲロシニ鳴ス也、

中門口

一鼓一二々三々四々

一二様ウシロムキニソハマミテ、鼻ヲ并テ同時出也、

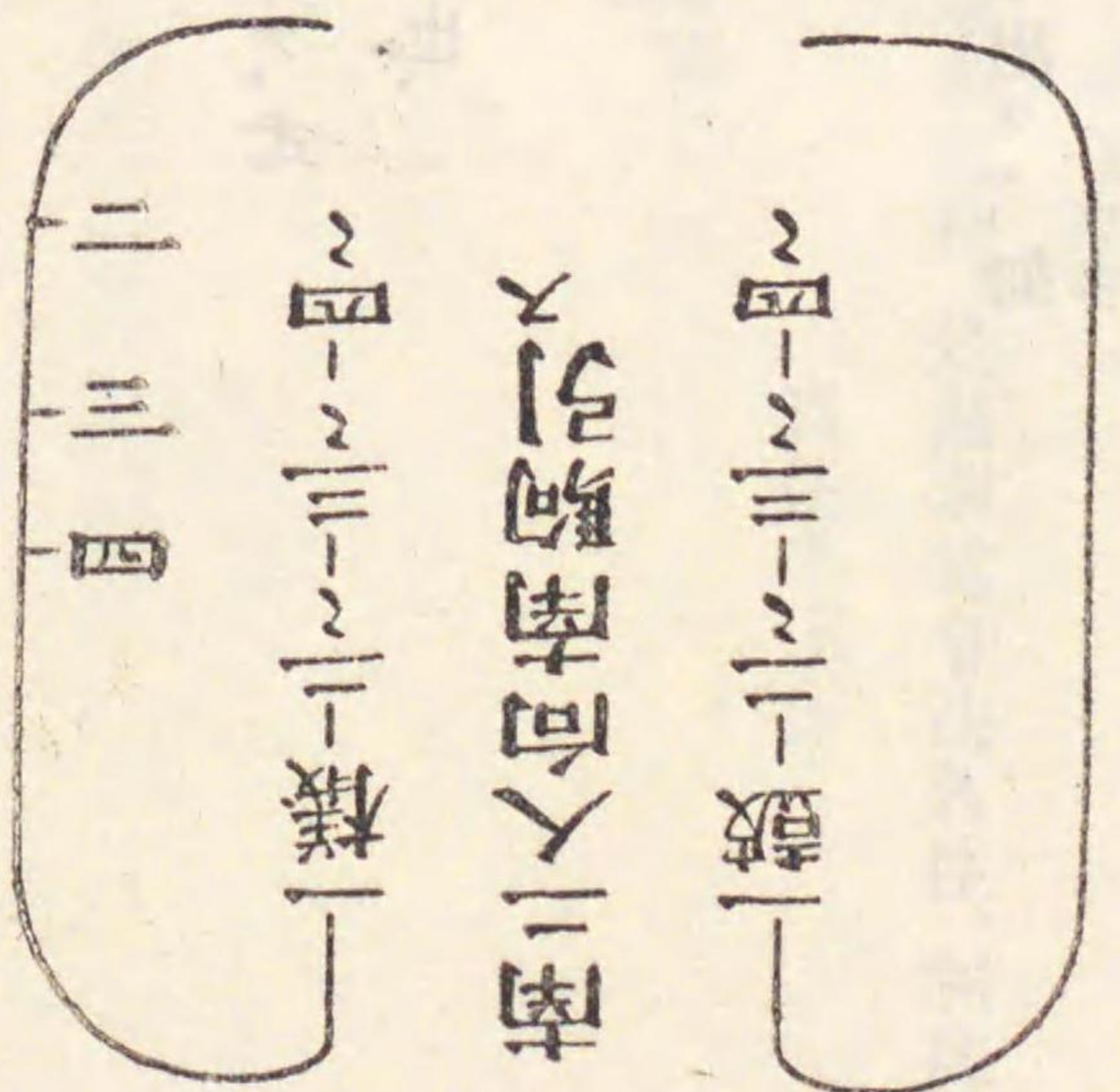
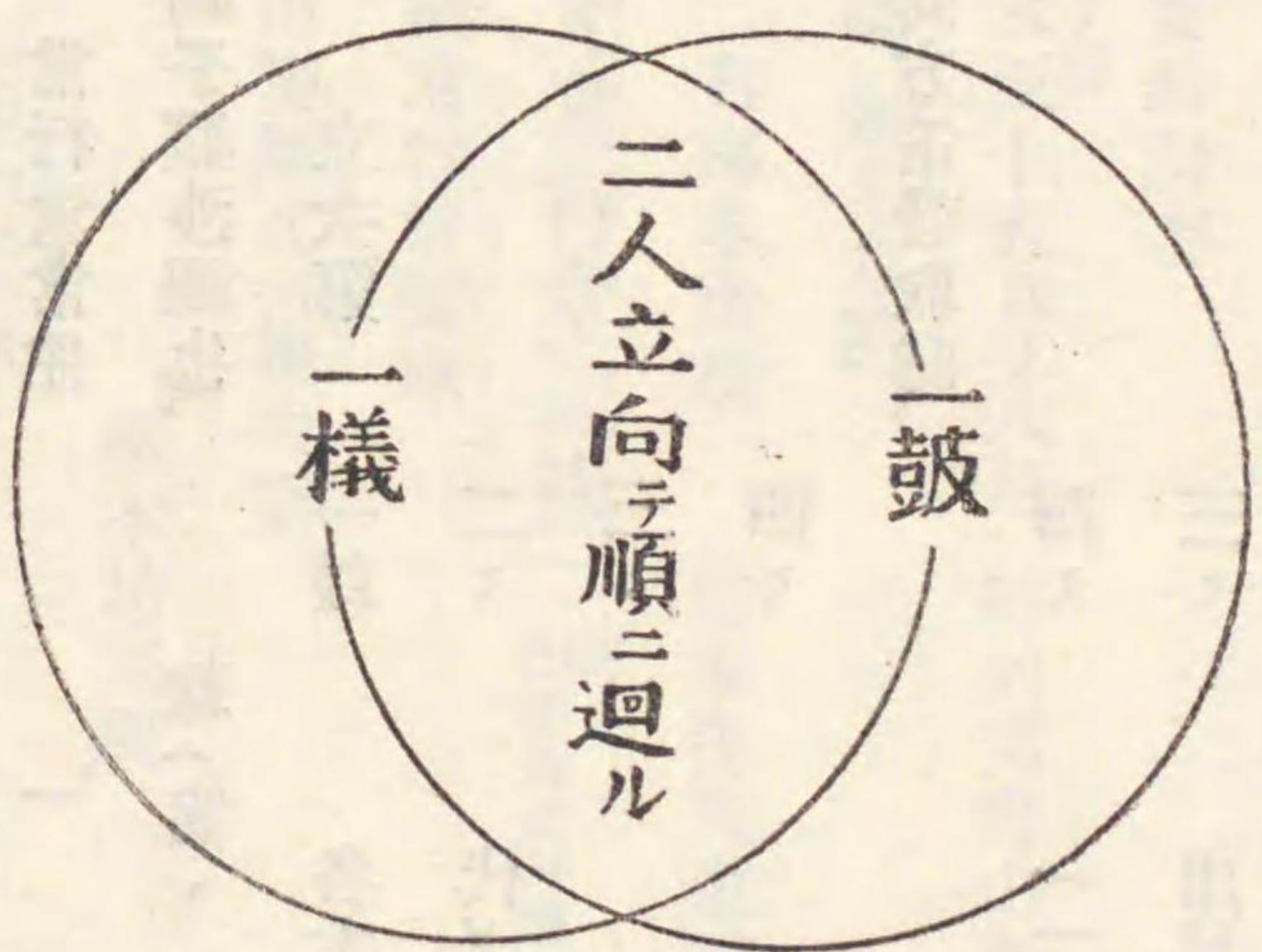
右ヘ傾テ廻也、一二ハ先ニ次第ニ出也、三四一二ノ廻ル、三様 四様、時次第ニ出也、

永正十五年雜載

四六一



皆本座ニ立向、
一三四



皆本座ニ立向、
略、○中

于時永正十五載終種日書寫之、

〔京都府寺志稿〕

五十六、三千院志稿、俯壹、聲明、寺藏古文書、四

一讀經口傳

與書永正十五年戊寅十月日以右本書寫了、承弥阿闍梨四十

〔永正十三年八月日次記〕

永正十五年二月二日、天晴、三合梅尾江遣之、宏助法印以

書狀遣彼寺僧中地藏院云々、則於惣寺可披露、定而一段可爲祝着之由、彼地藏院申之、是

年久聖教等石水院江預置之間、爲表禮儀也、

六月五日、○中梅尾二年來預置聖教等、爲虫拂召寄之、合數廿三合、但此内皮籠一合紛失、言語道斷也、無力次第、以維

全爲使請取了、

〔宣胤卿記〕

四月廿九日、晴、今日孫女十六、下遠江國、自駿河中媒之故也、○中又駿河返事

等遣之、唐墨一丁、大、打陰卅枚、太平記拔書一卷遣駿河守護、今川(氏親)

〔宣胤卿記〕

永正十五年夏秋 九月

打陰・唐墨拜領、畏入候、次富士綿十把進入候、左道之至候、

卯月廿六御札、具令拜見候、先以畏入候、仍洛中弥靜謐之由、目出存候、(義興)大内和泉堺在座候、

讀經口傳

仁和寺高聖
教等石水
院預置

宣胤今川
氏親太
平記太
平記太
書ヲ贈ル

氏親ノ謝
狀

宣胤太平
記中ノ今
川氏關係
寫ノ條ヲ抄

今川貞世
ノ難太平
記

定而上洛可仕候哉、○義興、和泉堺ヲ發シテ周防ニ歸ル兼又太平記内名字候所、被遊抄候て被下候、過分之至候、當家異于他致忠節候、其支證于今所持仕候、太平記ニハ普通之様載候、惣別以筆者私、さ程無忠節家も拔群之様書載候由申候、(足利直義)錦小路殿御座之時、被讀候て被聞食、殊外相違事共候間、可致改之由被仰候けると、了俊(今川) 俗名、委書置物共候、今申候ても、無益事候へ共、以次申入候、尙以洛中無爲無事珍重候、委田中可被申候、恐惶謹言、(今川) 氏親

永正十五年九月廿一日田中上、八月六日

中御門殿

田中殿

萬里小路
秀房宣胤
事ノ年中
ヲ請フ點
借太平記
覽平記ヲ

〔宣胤卿記〕

正月廿八日、晴、○中(萬里小路) 秀房朝臣年中行事本持來、點所望、油煙一丁与之、太平記第十三卷借遣之、藤房卿事有之故也、抑彼宣房卿ト申ハ、吉田大貳資經卿孫、藤三位資通之子也、此人閑官ノ(昔五カ)部ノ大乘經ヲ一字三礼ニ書、供養ノ爲祈子孫繁昌、被奉納春日社、其夜夢ノ中ニ黄ナル衣着タル神人、榊ノ枝ニ立文タル文ヲ付テ、差置宣房ノ前ニタリ、何文ヤラント恠テ、取之見給へハ、上書ニ万里小路一位殿へト書テ、中ニハ速證无上大菩提ト、金字ニソ書タリケル、夢寤テ閑ニ案之、我任朝廷、位至一品条無疑、中ニ見へツル金字ノ文ハ、我以此作善、可達後生善処之望者也ト、二世悉地共成就シタル心地ノ、憑敷被思ケル、

殿上年中
行事ノ不
審

太平院中
御事ノ條
ヲ抄シテ
隆ニ示ス

宣胤返太
宗觀記ニ
却胤先祖
宣胤先祖
歷實不審
問實隆ニ
補任公卿
出補任抄

卅日、雨、當時殿上ノ年中行事、四方拜ノ上ニ元日ノ字無之、不審、平旦、寅剋ノ異名也、寅ハ毎日有之、又十一月當麻祭ノ下ノ註相違、

二月一日、辛未、天晴、○中(右中) 年中行事、以秘本點之、返遣秀房朝臣、祝着之由有返事、此次太平記返、

七日、晴、陰、小雨、秀房朝臣來、携年中行事本、不審所々問之、

六月十日、晴、○中(三條西實隆) 入道内府奉狀、太平記内、光嚴院御事一段書拔奉令見之、又彼太平記内、

宣胤卿元弘元年ニハ中納言トアリ、數年後ニハ宰相トアリ、傳紛失、不審之間、公卿補任如何之由尋之、返事在左、元弘元年比ハ、未給卿位歟、如此物語、豫書極官者、大納言ト可有歟、

七月廿八日、晴、太平記三十九冊、返遣宗觀入道了、

〔宣胤卿記〕

永正十五年夏秋 六月

宣胤卿本名宣藤、元應二十二年改明、

曆應二年四月十八日 任參木、元藏入頭左大弁、

同 四年四月一日 叙從三位、

五月六日 服解、父、不復任、

仙洞ト爲
伏見院以
來當御流
ヲ持明院
殿方ト號
シ奉ル
南朝

基春ノ狀

号、令改稱安樂光院了、抑持明院曩祖中納言基家卿息女陳子、北白川院、依爲後高倉院正妃、就彼所緣御寄宿于持明院私宅及多年、世人奉号、持明院宮、爰俄承久擾乱之刻、依關東舉奏、以後高倉院皇子後堀川院、奉備天位了、後堀川院御子四條院相續、御繼體登極之時、後堀川院脫屣之後、同以持明院被卜仙居了、其後四條院俄崩御、後嵯峨院登極以來、彼持明院私宅、自然爲代々仙居者也、仍數代祖皇御國忌・御願等、久於安樂光院被修之、一卷外余詞、伏見院以來、當御流奉号持明院殿方、是者南朝後醍醐院御、流爲申分也、當時ハ無南朝御座之間、持明院御号不及沙汰也、

〔宣胤卿記〕

永正十五年夏秋 七月

誠其後又一齮、背本意候、仍彼一卷被染健筆候由候、尤生來之龜鏡候、千万々々畏存候、殊御歡樂之時分、且迷惑自愛相半候、次御奧書之御案被見候、可然候歟、但彼洞院實信亞相之自筆、基春所持候、或爲余分或懇眞蹟所望申候分、同者可被載事候、恐悅候、雖然煩數被思召候者、御案文分可然候哉、又御官之事、一品分猶可然存候、但是も可被任賢慮候哉、又端事不苦候、可懸表紙候、旁可參申候、誠恐頓首謹言、

居諸

基春

猶以、御奧書等自愛此事候、

此一巻近比見事候、生前之厚恩、尤可比於禁方候、先々昨日御月次延引、無念候、面拜事内々昨日を期存候処、無其儀候、遺恨候、猶々彼一卷祝着難謝申存候、旁可參申候、誠恐頓首謹言、

永正十五年

七月十七日

基春

元亨釋書

〔宣胤卿記〕

二月十三日、晴、元亨釋書第一卷、借遣大藏卿東坊城、和長所用云々、

八月廿九日、雨、除目古抄一冊、大貳殿、御抄、文明七年成柄所写一冊、余所書申文十二通、折昏殘十一枚、今日返遣秀房朝臣、爲習礼所預置也、依余病氣先返遣了、九月十三日、陰、月不明、秀房朝臣來、除目撰定申文、習礼沙汰之、袖書、短冊等書樣、職事故實受商量、當時雖無此事、余命中相傳所望之故也、

〔宣胤卿記〕

○柳原 家本 十月四日、晴、○中 略 小除目一冊、加筆返遣秀房朝臣、

〔嚴助往年記〕

○中 略 除目条々註遣左中丞、

〔宣胤卿記〕

二月廿八日、終日雨下、○中 略 中納言・四條・言綱朝臣・資定等哥談合、今日頭弁

張行云々、
五月十九日、晴陰、四條來、覺勝院僧正了淳、入來、新若二、袋隨身、哥合點事、自大覺寺殿奉之、僧正

悉曇字記
ノ講說
甘露寺伊
長第歌會
大覺寺性
守宣胤寺
歌ノ合點
ヲ請フ

秀房ニ除
目ノ故實
ヲ相傳ス

皇山順光
第會人某
田舍善品
人追記
詠人記

連歌ノ加

正親町三
條實河
進駿河
間社法
歌ノ實望
宜胤洛
望ノ歸ヲ

永正十五年雜載

被持來、

六月廿日、○中(勸修寺尚願)勸黃門哥談合、今日畠山式部少輔會云々、

七月廿二日、終日陰、(庭田)重親朝臣、田舍或人追善云々、傳達人記品短冊遣之、

來世にハ名をいひかへて佛そと佛そむかしをしへ置ぬる

〔宣胤卿記〕

永正十五年夏秋 八月

御蒙氣如何御座候哉、自然御氣を被屈候ハ、不可然候、此瓦礫共御次に御覽せられ候へく候、何時にてもくるしからず候也、此等之由申給候、

先日者瓦礫備高覽候處、毎々御懇至、無申計候、御即位事、惣用已下嚴重而珍重存候、記録等一向不觸手候、於事自然之儀、可驚高聽候、兼又此連哥、初心衆一兩輩仕候、千万々々憚存候へ共、とても得御扶助事候間、預御異見候者、可畏入候、此之内自然宜も候者、御合點候て可被返下候、尙々輕忽千万なから進覽候、何時にても御隙の時分に御覽せられ候て可被下候、一向正躰も事ハかりに候、旁可參申入候、し、

〔宣胤卿記〕

八月十一日、陰、彼岸初日也、前内府(正親町三條)實望公、滋野井勸進哥、雖眩暈病無術、其人數難

去之間、助氣任筆了、季國朝臣傳達之間遣彼朝臣、

子日松かへりきて都にうへよねの日とて前内府上洛事、(宣胤)

宜胤今川ノ
婿及外孫
ヲ親祝ス

柳原資定
ニ代リテ
作ル

建仁寺十
如院永因
ノ艶詩

同寺某喝
食ノ落髮
ヲ賀ス

四七〇

歲暮雪ことしけき人の往來にふるゆきの

田家水門田にとせく山口ハせはけれど以上惣社三首、

低したにみる小松もみとりそひゆかハ冷泉中納言、

清此川のみなもとよしとすむ月の以上二首新宮、

里梅山陰も春めきにけり敷なみに若宮一首、

河月水ものこらす月そさやけき飛鳥井前大納言雅俊卿題、

遅影たかくはやすみのほれみな人の新宮

寄衣戀これも又たか偽そさ夜ころも以上、左少將資定依相語、彼分讀之、

〔三益艶詞〕

(永正十五年) 戊寅王正人辰後二日、新雷啓蟄、一雨滂沱、僉曰、太平祥瑞也、于時天書忽

下、召予於側陋、予猶如斯、況賢君子隱于釣築乎哉、至祝々々、其翌綴俚語、擬陳情表云、

長樂宮西日暮鐘、孤臣又賜紫泥封、謝恩借得唐人句、雷雨江湖起臥龍、

戊寅王正數莫者二十六之日、吾山者宿、携群玉林結社盟之徒、就一一雅丈書軒下、大開

詩筵、蓋賀落飾也、丈有詩、擲地金聲洋々乎、凡忝末契者、以和而偈爲式、然予已於前會

攀嚴韻者兩回、易云、再三瀆、是故東而閣之、且讓餘子令鼓吹之、不敢殿、其翌、偶赴佳招、

拊舞之餘、步上高韻而作謝詩一章云、

永正十五年雜載

四七一

叔孫禮樂漢朝儀，群玉林中高會時，坼襪線才雖可愧，酬恩敢後和君詩，

戊寅灯夕，携梅花數枝，詣一一佳丈閣下，節則灯而花則梅也，豈可不言詩乎，仍以梅花灯為題，賦川八者一章，聊供吟翫云、

一點春灯照碧紗，看來元是小橫斜，暗香猶度青藜杖，冷蘂忽開紅粟花，影自羅浮山下淡，明從大庾嶺頭加，梅西幸有君書室，夜々挑之照五車、

戊寅人日之口號

文君一顧萬人望，不借臙脂易斷腸，可笑含章簷下面，待梅花落始成粧、

戊寅季夏二十有三日，乃金神持節之辰也，不克无悲哉之嘆，賦一絕，以抒寸懷、

夏未去時秋又來，天官何事急相催，隔窓彷彿梧桐落，夢自幽人枕上回、

戊寅薦月廿八日，值立春之辰，即裁小律，以呈上一一詩伯研右，取乎倭人之歌寓意耳、

宓丐 盧胡、

野水梅花雖有雪，池塘楊柳漸生烟，萌猶未去春先到，曰舊年耶曰始年、

戊寅冬至口號

一氣洪鈞餒管灰，梅花枝上覺皈來，舉頭更見太平象，五色祥雲遶魯臺、

永正龍集戊寅雞旦，某啓上一一尊君閣下，以抒賀悰云、右宓以、

永因ノ賀
歳ノ啓札

堯年舜壽禹子湯孫 民歌聖德

蕭規曹隨房謀杜斷 相得賢才

逢三元下降之辰 祝四海太平之象

一一尊君 花有和氣 松無時粧

永元故家之春 黃鳥出幽谷遷喬木

新羅夜半之日 金鳥入咸池拂扶桑

彼前哲兮有祖有宗

况後昆而令聞令望

球琳琅玕群玉 容貌不凡

紅綠白碧牙籤 纂抄无懈

某 大厦燕雀 一枝鷓鴣

天然愚蒙 誦帝忘蒼誦蒼忘帝

家譜賤陋 種桃无李種李无桃

雨露久沐于主恩

涓埃聊報以儷語 誠恐誠惶頓首、

永正龍集戊寅雞旦

某謹啓上、

〔三益稿〕

白髮殘僧掃影堂、憶曾吾祖出瞿垂、故家春色海棠上、本地風光喬木傍、書信傳來數行字、法恩酬得一爐香、遠修累世通家好、陰德君須報首陽、

永正十五年夏末、瑞光末關東之僧、寄詩於瑞光祖塔乞和、有諸老之和、某代益藏主作之、

〔宣胤卿記〕

五月十九日、晴陰、又自勸黃門狀到來、

先日參申候、祝着候、抑於竹園御鞠之時、蹲居事、御家禮衆事勿論候、其外不可及蹲居候歟、其覺悟候、殿上人之時も可爲其分候哉、若一人之時竹園御立、只近立候て候へ、自由之樣候歟、但不可及沙汰候歟、兼又攝家同前候歟、關白御立之時、家來之外、殿上人可有蹲居候歟、条々被勸下候者恐悅候、誠恐謹言、

五月十九日

乘光 尙顯 家來へ、家礼卜書候可然候、旧記等分明候、

〔閑吟集〕

夫謳歌之爲道、自乾坤定剛柔成以降、聖君之至德、賢之要道也、溫之異域、其來久矣、先王和五聲也、以平其心、成其政也、五聲・六律・七聲・八風、以相成也、清濁・小大・短長・疾徐、以相濟也、君子聽之、以平其心、々平德和、故詩曰、德音不假、嗟嘆之不足、詠歌之、詠歌之

建仁寺瑞光庵東末寺同庵詩ヲ寄ス

同寺ノ諸僧和韻ス 永因同益塔主瑞益和韻ス

勸修寺尙顯於會ニ踰ノケルヲ宣胤ニ問フ

宣胤ノ勸

閑吟集ノ編輯眞名序

早歌

近江節 大和節 小歌

尺八

假名序

不足、不知手之舞足之踏之也、治世之音安以樂、其政和、亂世之音怨以怒、其政乖、正得失、動天地、感鬼神、莫近於詩、々者志之所之也、詩變成謠謳歌、尤三代以前、無不物宗廟侶隣詠、鑿井而飲、耕田而食、堯時之歌也、易水之於秦、大風之於漢、有一句之歌、素練白馬壽得成是也、接輿歌鳳兮、寧戚扣牛角、楚王萍實、陳主後庭花、僉無不言民間也、易曰、鼓缶歌也、豈非至德要道乎、異方如斯矣、熟思本邦昔、伊陽岩戸而歌七晝夜曲、大神面于罅隙、神戶壁開而霄壤明白也、地祇之始、已有神歌、次催馬樂興也、催馬樂再變而成早歌、其間有今樣・朗詠之類數曲、三變而有近江・大和等音曲、或徐々而困精、或急々喧耳、奏公宴慰下情者、夫唯小歌乎、小歌之作、匪獨人物也明矣、風行雨施、天地之小歌也、流水之淙々、落葉之索々、萬物之小歌也、加之、龍吟虎嘯、鶴唳鳳聲、春而有鶯、秋而有猿、禽獸昆蟲歌、自然之小歌者耶、而況人情乎、五千餘軸迦人之小歌也、五典三墳先王之小歌也、移風易俗、經夫婦、成孝敬、厚人倫、吁小歌之義大矣哉、坐支扶桑、翫音律、吟調子、其揆一也、悉說、中殿嘉會、朗吟罷淺々斟、大樹遊宴、早歌了低々唱、弄小扇之朝々、共踏花飛雪、携尺八之暮々、獨立荻吹風、爰有一狂客、編三百餘首謳歌、名曰閑吟集、伸數奇好事、諭三綱五常、聖人賢士至德要道也、豈小補哉、于吃永正戊寅穗八月、青灯夜雨之窓、述而作、以貽同志云爾、

廊下ノ聲
田樂

歌數ヲ毛
詩ニ准ズ

需ニヨリ
自序ヲ添
フ

寫本與書

奈良子守
社勸進猿
樂

松ふく風に軒はをならへて、いつれの緒よりとこのしらへをあらそひ、尺八をともとして、春秋のてうしを心むる折く、に、歌の一ふしをなくさみ草にて、ひまゆく駒にまかする年月のさきく、とひえんきやうの花のもと、月のまへの宴席にたちまはしはり、こゑをもちともせし老若、なかは古人となりぬる懷舊のもよほしに、柳のいこのみたれ心どうちあくるより、あるは早歌、あるは僧侶佳句を吟する廊下のこゑ、田樂・近江・大和ふしになり行數くを、忘れかたみにもと、思ひ出るにしたかひて、閑居の座右にしろしをく、是を吟しうつり行うち、浮世のことわざにふるゝ心のよこしまなければ、毛詩三百餘篇になすらへ、數をおなしくして、閑吟集と銘す、このおもむきを、いさゝか雙紙のはしにといふ命にまかせ、時しも秋の螢にかたらひて、月をしるへにしるす事しかり、
〔奥書〕雖其斟酌多候、難去被仰候間、惡筆を指置、如本書寫了、御一見之已後者、可有入火候也、比興々々、

大永八年戊子卯月仲旬、書之、〔○序及ビ奥書宮内廳書、陵部所藏本ニ依ル、〕

〔春日社司祐維記〕 戊子五月

一今日一日ヨリ、於木守神前、金剛大夫勸進猿樂沙汰之、爲六方張行之、カリヤ者中市へ被相懸之了、

金剛大夫
ノ法樂

見物一獻
ノ酒頭

天王寺ノ
法華寺勸
進猿樂人
大京ノ美人
奈良中勸
進猿樂行
止レズ

一六日、於木守勸進猿樂今日滿之了、金剛大夫、〔子時十二、歲ト云々、〕次自所々与物之事、學侶ヨリ拾貫文、六方ヨリ貳拾貫文、妙徳院ヨリ八木伍石、淨ルリヨリ貳石被与之了、
一七日、巳初點、〔生年十歳ト云々、七番沙汰之、〕金剛大夫法樂可申之由、俄申之、以外之聊尔也、前ノ日案内ヲ申条、古今之儀也、但法樂之儀、敬神之間、社中菟角ノ儀ニアラス、各可出仕通也、
一見物一獻之酒頭、〔今西諸維、〕愚爲理運俄勸之、見參社司、氏人、〔生年八十六也、今西、〕家興・師和・祐辰・家統・祐維・祐園・〔辰巳、〕祐次・祐稱・祐資・延有・祐智、〔大惠、〕中臣氏人、祐億・延時・祐金・祐庭、〔富田、〕大中臣氏人、時殖・〔辰巳、〕經頼・師順・時就・家康・家賢・師重・時具・經榮・時宣・家政、以上廿七人、出仕之、〔現任卅一、西、〕四人不參之、

一祐園一獻ニ不被相立之、兩三度迄催之了、不快故歟、但不快ナリ共、外様一獻之上者、可相立之条勿論歟、爰又傳説云、酒頭之事、一向不可勸仕之造意在之歟之由風聞之、
一十二日、今日ヨリ又於木守神前勸進猿樂在之、天王寺之手猿樂ト云々、
一廿三日、自今日於法花寺勸進猿樂在之、京ノ美人大夫ト云々、當年勸進猿樂之事、先ッ於木守神前、〔子、〕辰市・法隆寺・大和・長谷寺・万歳郷・高田郷、此外所々ニ在之ト云々、上古以來、奈良中、同國中ニテモ、一向勸進猿樂之事停止之処、近年如斯在之、背先規者歟、勸進猿樂在之者、當國及錯亂了、此条神事記仁相載事者、無其謂者哉、但當國令錯亂者、

神事・法會無之、剩夕御供祈所在々所々ニ在之処、是又及違亂、然時者、夕御供奉行權官、忽以及沈輪者也、依是記置了、

戊子七月

一七日、○中略

一今度勸進藝能沙汰之間、子守社之事、清祓近日以吉日被經御沙汰者、可爲珍重之旨、六方集會評定候也、恐々謹言、

七月六日

六方衆等

兩惣官御中

若宮神主殿

社司評定曰、吉日幸德井方へ可相尋旨、令一決之、神主而内々被相尋之処、明日、八日、十日兩日出之、

一八日、於子守神前清祓、南郷常住・若宮常住兩人北郷常住者未補之、罷出テ勤仕之、供神物備進之、

兩惣官出納付テ經營之、百五十文、以惣錢兩出納へ下行之、高山八講ニ用候机ヲ借テ供物備之、次兩常住方へ酒直代七十文如例下行之、是モ祓祭物用途錢内也、其式如例勤仕之、

奈良中ノ
盆踊

一十四日、今日ヨリ奈良中踊如例在之、但不空院辻之踊退轉之子細者、此在所之踊者、一圓ニ三方神人等令張行之処、去々年以來与社中神人杳役之公事仁失面目之間、令停止之ト云々、未野心繁多也、

十七日、○中略

一奈良中ノ踊、自十四日廿日マテ七ケ日在之、(願興)筒井中坊ニテ見物之、爰二十九日酉剋ヨリ成剋終迄、ヲシアケノ郷人与シユクキンノ郷ニテ戰者也、宿院郷人四人當座ニ打死之、押上ニハ岩屋一人打レ了、子細ハ踊之儀也、兩方手負數百人在之ト云々、

〔宣胤卿記〕七月十日、陰、晚雨、勸黃門被來、行一來、語平家、所領、

〔香取文書纂〕十一 香取神宮古文書纂十二 案主家所藏三

補任 香取社佐原案主職安塔事

合坪付在別紙者、

右件至于所職・屋敷・田畠・山野等者、以太郎童子所令補任也、於社役者、守先例嚴密可被勤仕之狀如件、

永正十五年戊子十二月廿九日

香取社佐
原案主職
ノ安塔

行一座頭
平家ヲ語
ル

押上宿院
兩郷人ノ
爭鬪

筒井順興
見物ス

田所

錄司代

物申祝

案主 田所

錄司代 行司禰宜

物申祝 權禰宜

大禰宜散位大中臣實之花押

大宮司散位大中臣國房花押

〔東寺百合文書〕ヲ二十之三十一
〇山城

東寺之内巷所之事、證文共御本所へ被出候、委御披見候て、則我々方へ被仰之旨候間、御催促之儀、先有間敷候、自是重而子細猶可申候、恐々謹言、
永正十五
正月十七日

福井兵部丞
家綱判

原田大膳助殿御宿所

〔東寺百合文書〕ヲ十四之十九
〇山城

〔端裏書〕
〔就散所金四郎跡作職遺持地院契狀案 永正十五
五廿六〕

西九條散所金四郎跡之内東寺領女御田三段之作職德分事、御知行云々、然間彼參段之下地事、爲當寺申付作人候之上者、於三段之作職德分者、段別六斗宛、合壹石八斗、納別在之、每年無未進懈怠申付、可納申、万一無沙汰之時者、堅可有御催促者也、仍爲後日狀如件、

永正十五年五月廿六日

持地院御納所

東寺雜掌
淨壽判

〔東寺百合文書〕ヲ一之十三
〇山城

西九條福西金四郎跡職事、爲關所被寄附當院訖、然間、彼田地之内東寺領女御田參段事、爲其方被付作人、於作德分者、段別六斗宛壹石八斗、納ノ升者
別ニ在之、每年無未進懈怠可被納當院、萬一不法懈怠在之者、可被改易者也、仍契約狀如件、

永正十五年六月一日

持地院納所

源昇(花押)

東寺雜掌御房

〔永正十二年八月日次記〕(高國) 永正十五年二月一日、細川一臺局、三合三荷進之、先之正

月十一日進之云々、近年不進之處、當年始而進之、丹州北三ヶ庄之内、有子細、先々如此云々、彼庄奉行立命院僧正存知候間、一臺書札遣立命院、先々直札御返事有之候由申候間、上乘房宛以書狀尋申入候處、雖無其謂、直札御返事、先々御沙汰之由承、然間直札遣之、彼荷持參御使、先々百疋給候之由申之、先奉行可弁遣之由仰之、只彼庄代官天竺越後守存知之、彼一臺越後守女之間、彼庄之内以夫錢百疋、可差引之由仰之、

〔東大寺文書〕〇大和

永正十五年雜載

四八一

丹波北三
簡莊高國
細川和寺
室仁高國
座親王道
法親王請
親札ヲ講
フ越後守
代官天竺
荷持ノ夫
錢分ノハ
莊官分カ
シテ引カ

關所トシ
テ持地院
ニ寄附

〔端裏書〕

預申 大佛殿燈油方狼田之事地作一円 御下地

合壹每櫃內者、

右件御田者、多年雖爲荒田、當百性姓與三郎致再興、付御毛申畢、仍御地子之事、從明年每年伍斗五升宛、爲定地子、不依早水損可計申也、万一御地子无沙汰申、并於地作一圓之御田、自然作分等兎角申子細之儀在之者、雖爲何時、被召放御百姓、可被宛行余人、若其時猶違乱煩之儀申掠者、可被處重科者也、仍後日證文狀如件、

永正十五年戊寅三月五日

ノホリヲウチ
与三郎略押

〔古代取集記錄〕

○播磨

一 同十五年戊寅三月日、藏仙寺分吉次名事、内山和泉守方純行仁、

自寺門法隆寺被預ケ置之、則彼方請文在之、正文者寺門エ上之、写政所仁在之、

〔菅浦文書〕

○近江

永正十五年十二月廿四日

畑成山昌帳

- 一反一畝、半六十四文 清太夫
- 一反一畝、半六十四文 平四郎

東大寺油
佛殿燈油
田
垣内
百姓ノ荒
田再興
定地子

法隆寺領
播磨寺莊
藏仙寺分
吉次名

近江菅浦
莊秋成山
島帳

一段三畝百廿七文

壹段五十五文

貳段二畝百廿壹文

一段五十五文

一反

平助

清六太夫

六郎別當

藤別當

後藤三郎

左近次郎

形部三郎刑、下同シ

藤三郎

孫大郎

月本さこ

宮内三郎

源三衛門

六郎次郎

左近四郎

平三郎

一段六畝八十八文

貳段八畝百十□文

一段五畝八十三文

永正十五年雜載

左衛門後家

□_{藤也}介

彦五郎

田井助

衛門大郎

江四郎

兵衛三郎

兵衛次郎

平三郎

五郎

新五郎

孫六

孫四郎

藤介

助太夫

後藤兵衛

一段五十四文

七畝卅九文

一段九畝十八步百八文

三段廿四步六十九文

一段三畝十二步六十八文

一段一畝六十一文

一段五畝八十三文

二段四畝百卅二文

貳畝十一文

一段三畝七十三文

一段八畝廿七步百四文

一段四畝七十七文

壹反八畝卅步百文

二段二畝はん百廿四文

一段八畝廿四步百三文

七畝卅八文

壹段九畝十二步百七文

九畝五十文

一段二畝、半六十九文

三段貳畝百七十六文

一反九畝十二步

上藤細工

藤三郎

兵衛四郎

兵衛五郎

兵衛九郎

忠五郎

清介

新五郎

左坊

兵衛大郎

左衛門後家

六郎母

六郎

源三

弥源大

壹段四畝七十七文

弥六丈〔檢校、下同〕丈

三畝十八文

清九郎

壹畝三步四升七合半

清四郎

一段五十五文

源三

五畝廿八文

彦三郎

貳段百十文

平四郎

七畝十八畝四十五文

次郎介

貳段七畝百五十文

孫太夫

一段貳畝

与一

一反七畝

孫大郎

壹段五畝八十三文

丹後助

二段六畝、半百四十六文

新三郎

二段二畝百廿一文

新次郎太夫

壹段五畝廿四步八十六文

平細工

一段一畝六十文

清次郎

一段五十五

形部

一段八畝百文

左近五郎

二段二畝廿四步百廿五文

彦次郎

左近二郎

新次郎別當

六郎次郎

与四郎別當

三郎五郎

弥三郎

新五郎別當

平次郎

与次郎

彦五郎

一段五畝八十三文 清五
 貳段一畝廿四步百十八文 清戈
 一段五畝五斗七升 源三郎
 二段二畝百廿一文 清三郎
 一段五畝五斗七升 妙泉
 二段三畝百廿七文 弥三郎
 三反四畝十二步百八十九文 藤四郎
 一段八畝百文 藤阿
 三畝十七文 弥三郎
 一反四畝七十七文 六郎次郎
 新五郎太夫
 左藤五
 彦大夫
 与五郎
 道林

一段二畝、半六十九文 新三郎
 五畝廿八文 小尼女
 壹段四畝七十七文 西与一
 壹段八畝卅步百五文 上藤細工
 一段三畝、半七十五文 四位殿
 五畝廿八文 妙泉
 壹段六畝卅步九十二文 上藤細工
 貳段五畝卅步百卅三文 平大夫
 一段五十五 俵九郎
 五畝卅文 上庄 孫大郎
 二段六畝卅步 上庄 孫四郎
 上庄孫四郎、代百文出之、
 山畠代かゝへ
 廿一文藤別(當)
 廿文 与四郎別當

惣庄へ引ちかへ鳥目

山島ニ立用人数

百六十六文

上藤細工

百五十八文

新次郎大夫

百廿六文

四位殿

百十八文

清戈文

卅三文

同戈文

卅二文

こ阿と

卅二文

專阿

卅三文

与四郎別當

百五文

五郎

〔主殿寮領雜々〕

三〇宮内廳書陵部所藏

補任

當寮敷地并北島指圖有別紙、代官職事

右在所、帶公驗當知行雖無相違、有名無實之條、被遂散合者、當于時爲忠節之間、彼下地之

主殿寮敷地并北島指圖有別紙、代官職事

代官ノ忠節ニ依リ

公用ノ半分ヲ與フ

公用以半分、可宛進于代官得分、殘半分者、嚴密可有取沙汰、不可有不法懈怠之儀、永代不可有改易、依大小未進以下有之者、任請文之旨、爲請人可有其償、猶被及異儀者、不日改易可申者也、仍補任狀如件、

永正十五年^{戊寅}九月二日

主殿頭(花押)

八木殿

正田新四郎殿

六波羅

執行御坊

御兩所

年貢・諸役

〔下之神社文書〕

伊豆

松崎下宮之船之事、如前々りうし之事、任先寄之旨、爲扶持者也、仍如件、

永正十五年^{戊寅}十月廿一日

爲春(花押)

下ねき九郎左衛門殿

〔建内文書〕

九〇山城

案文

送進納

祇園社領

永正十五年雜載

祇園社領門地、五條坊、東洞院、子錢

伊豆松崎船役下宮

五条坊門東洞院下者高辻之間東嶺

口一丈二尺五寸 与太郎 片季貳百八十九文

口一丈四尺 吉村 片季參百廿九文

口七尺 越後 同 百六十五文

七百八十六文

已上

永正十五年十二月日

祇園執行雜掌 顯吉判

〔東大寺文書〕

〇大和

八幡宮五月十七日講問納帳

永正十五年寅

納帳

マツモト、ロク數アリ、本來ケミ田ニハアラス、
一石 近六斗七合 免二升三合ツ、
イ四斗七升 三良

卯五斗九升二合納、一升五合ハイニ免、
一石八斗 一升四合免、合二斗五升二合 六良

シメタニ、ケミ田ニハアラス、ロク數アリ、
一反半 一石七斗五升定下

定垣代四百文

此内 四斗五升四合、七名ヘハカル、一斗六升五合、負所、
四斗經供養方、此内百卅二文定垣代、米九升六合三勺、
免五升六合、殘二斗四升八合、經方、
相殘・五斗二升九合、講門方、
(朱點、下同シ)

ムクカ谷ロク數アリ、
一反半 一石五斗 此内二升免ニヒク、
定垣代五十文 角一石二斗五升定下約、 西道

此内「三斗七升五合」三斗米、燈油「一斗六升四合」燈油方ノ地、
方ハカル、

「一斗四升七合三勺負所ヘハカル、殘」七斗九升四合講門方、
(側)

合一石七斗九升三合

此内所下

シメタニ、定垣代 此内「百卅二文、經供養方ニテ引之、
一四百九十六文 本利 利分六ヶ月分、代米」二斗七升九合

一定垣代本利六十文、代米五升三合九勺 一二升神供燈明、

殘一石四斗四升一合布施ニ下行、

現出仕六人、定入物五口、「承仕」・「公物」・「問」・「講」・「納所」、

都合十一口 口別「一斗三升一合ツ、 納所英運(花押)

〔永正中記〕

〇内閣記 錄課所藏

一苅庄煎米座年貢事

永正十五年雜載

永正十五年雜載

三月廿日、致沙汰者也、

請取書樣、杉原一枚ニ、

請取 煎米座年貢之事

合壹貫文者、カ、ルノ庄、

右、所納狀如件、

永正七年午二月廿日

名主判

近年當納ハ八百文也、

一大和煎米年貢五百文、コレヲ四月一日ニ沙汰也、請取書樣、苅庄ト同者也、

○中略

永正十五年

兩方共沙汰

〔興福寺文書〕

○二大和

中門算勘狀 永正十五年西收

現納壹貫參百文此内貳百文、定使・神人・雅樂方下行、

下行

東分加上分一口 大小律合十二口

西分加上分一口 大小律合十三口

金堂上分一口 食堂上分一口

已上合廿七口、代貳百七十六文

百文、事新

參百文、結解新

合八百七十六文(六カ)

殘四百二十一文兩堂司諸進四人、各六十八文宛支配、

右依例、算勘如件、

永正十六年己卯六月廿三日

〔天龍寺文書〕

○山城

壁書

大野庄勘定事、毎年以三月中爲恒例、雖然近年動延引、頗違舊規、庄主怠慢也、於向後〔不脱カ〕可爲先規、但有子細延引在之者、雖爲何時、其秋住持并塔主・諸役者共可證明焉、然勘定錢不可

永正十五年雜載

及異論者也、仍衆評如件、

永正拾五^{戊寅}孟夏廿三日

維那壽因

(臨川寺)住持梵洪(花押)

首座中倫(花押)

(三會院)塔主等期(花押)

馨恩(花押)

(臨川寺)前住周芳(花押)

瑞豐(花押)

(心齋)天龍寺等安(花押)

眞燾(花押)

(心齋)前住周芳(花押)

譚肯(花押)

(心齋)承才(花押)

承才(花押)

〔古代取集記錄〕

○播磨

法隆寺領
播磨實莊
預所實莊
遺跡ノ年
貢跡ノ年
德政ニハ
未進米ハ
係ナシ關

〔永正〕
一同十五年^{戊寅}七月十八日、預所中道院實信、依長病、(法隆寺)寺家エ上洛アリテ、則死去畢、然仁上洛方、秋之所務之事、彼遺跡ヨリ人ヲ下シ可有執沙汰之由、種々雖被申候、寺門之儀仁、爲遺跡可有納所事、自先規其例無之間、則任先蹤、爲寺家、俄納所代被合點之、金光院曉秀下向也、此時西方未進米者、預所得替之間、下百姓不納所也、同年則德政雖行候、未進無沙汰之儀者、更以德政ニハ無混乱子細也、
一同十五年^{戊寅}八月日、去年冬、平方・吉平・吉永名之事、寺家借錢爲返弁、平井助九郎方へ被

同莊活却
地ノ百姓
逃散ス
柴ヲ引ク
寺家買返
ニシテ百姓
充テ行フ
東寺領ノ山
城車塚ノ内
檢

沽却處仁、彼下百姓迷惑之由申シテ、惣庄名主・百姓等ヲ引催、六ヶ村分名主・百姓、悉以柴ヲ引逃散畢、前後卅余日、政所エ出入無之、雖然役人三人者柴ヲハ不引也、如此アツテ種々佯言申間、則又自寺家如元買返之、百姓等仁被宛行畢、

〔東寺百合文書〕

わ三之五上
〇山城

谷車塚内檢帳之事

合 永正十五年分

二反 五斗代

大 九斗代

以上壹石五斗(四カ)

當免假屋以下

壹石一斗五升

殘四斗五升

永正十五

十月二日

淨甚(花押)

祐慶

祐春(花押)

〔東寺百合文書〕

〇四十四之四十六上
〇山城

同上久世
莊流田ノ
内檢

久世庄流田内檢帳事

合 永正十五年分

池之内 一段捨

二段内

いせき 徳一斗五升

一反内

同 半捨

大内

同 大捨

一段内

一段大内 一反小捨

已上

永正十五年十月五日

〔東寺百合文書〕

〇三之五上
〇山城

淨成(花押)

助左衛門

平左衛門

慈眼庵

藏王房分

九郎二郎

九郎二郎

庄師代

祐榮(花押)

納所

祐慶(花押)

同

淨甚(花押)

同下鳥羽
舟津ノ内
檢

下鳥羽舟津内檢帳之事

合壹石五斗

當免假屋壹石八升

殘四斗二升

永正十五

十月十三日

慶一(花押)

円秀

祐春(花押)

淨成(花押)

同女御田
ノ内檢

女御田内檢帳之事

永正十五年分

四斗二升代

稻荷前

二反

〔徳、下同シ〕
イ五斗五升

同

半卅歩イ二斗

同 横繩手

一反 イ三斗一升五合

永正十五年雜載

寺本新左衛門方

大工

赤塚方

同 一反 彳三斗一升五合

同弁

同 大 彳二斗一升

弥五郎

同 少 彳一斗五合

弥九郎

同南 半 彳九升

澁屋方

同 半 彳一斗五升七合

彦三郎

同 一反 彳二斗七升五合

五郎衛門

同東 半 彳一斗五升五合

寺本 新左衛門方

同 半 彳一斗四升五合

孫九郎

日野口

一反 彳三斗一升五合

二郎九郎

同 半 彳一斗五升七合

赤塚方

同 半 彳一斗五升七合

弥五郎

三百步 彳二斗四升

四郎左衛門

以上三石三斗七升六合內

當納一石四斗二升五合

苅田御免

殘三石三斗七升、當免并反錢・苅田御免等二引〔由九〕不出候、

永正十五
十一月十五日

慶一(花押)

円秀

祐春(花押)

淨成(花押)

同寺領新
加地子

〔東寺百合文書〕

〇五十七之六十
〇山城

新加地子算用狀之事

合壹石五斗六升之內

現納四斗九升三合

未進壹石三升壹合〔注文別、昏在之〕

以上

永正拾五年十二月日

〔東寺百合文書〕

〇三十七之三十九
〇山城

〔久世上下庄算用狀 永正十五寅年分 勘定畢、〕
同十六卯年六月廿七日

注進 久世上下庄御年貢米御算用狀事

永正十五年雜載

同寺領上
城久領山
下庄年貢
米

永正十五年雜載

合(朱線下同シ)花押アリ 永正十五年寅

一上久世莊 本流田加小徳定

合貳百廿八石七斗一升三合五勺

廿石 新御寄進

以上貳百四拾八石七斗一升三合五勺内

寺納分百四石四斗八升五合内

五斗 御倉付

三斗 御神樂

二石七斗七升三合 流田捨

七石 井新

廿四石 損免

二斗(朱圖下同シ) 神樂米

二斗二升 堀免

已上卅四石九斗九升三合

殘六拾九石四斗九升二合内

庄未進卅七石五斗七升九合

現納卅壹石九斗一升三合内

壹石 御庭火米

六斗 流田内檢假屋

五斗 地下收納

已上二石壹斗

殘廿九石八斗一升三合

交分 壹石四斗九升 一斗二五合宛、

合卅一石三斗三合

下行成 五石九合(朱書)此米壹斗八下行壹斗壹升六合ニ成也

都合卅六石三斗一升二合

一 下久世莊

合五拾九石五斗七合内

庄除 三斗 御神樂

壹石 如法經

永正十五年雜載

牛玉紙

御倉付

節祈饗

治部省田

算失

下司給

公文給

損免

以上卅二石二斗

殘貳拾七石三斗七合内

庄未進拾四石二斗二升

現納十三石八升七合

一斗三升四合

御神供米 庄ヨリ直納
一ケ度分

本ハ壹石五斗六升

三斗七升

新加地子

本ハ六斗

二斗一升

福釜

下司給
公文給

上成

本ハ四石九斗五升

三斗八升八合

不足興行

本ハ二石五斗四升

三斗六升一合

實際寺興行

五斗 皆未進

大郎三郎

以上壹石四斗六升三合

合拾四石五斗五升内

三斗

地下收納

殘十四石二斗五升

上成 五石七斗

合拾九石九斗五升

下行成 三石一斗九升二合

都合廿三石一斗四升二合

上下都合五拾九石四斗五升四合内

本ハ五十六石三升

諸下

一石八斗六升

二斗三升二合

放生會米
八月十五日當年ヨリ始而參、
同御神供米

永正十五年雜載

諸下行

永正十五年雜載

二石八升八合

御本地供

壹石

御生身供

三斗六升

長日御本地供

六斗

兩御給主

一石五斗三升

上使

二石

兩雜掌

九石四斗八升

宮仕四人

二斗

湯那

二石一斗五升

定使

四石八斗七升二合

御神供米廿一ヶ度分

一斗五升

同成分

以上廿六石五斗二升二合

代七百五十文

御仏事方へ渡申、

代百五十文

大黒日供

代三百文

西院御雜事錢

湯那

五〇六

以上壹貫百六十五文

分米一石八斗六合 和市一斗五升五合宛

御支配分廿一石八升六合

十二石八斗六合 公文所方へ渡申、

以上六拾二石二斗二升

仍過上二石七斗六升六合歟、

(朱書)

永正十七年算用狀ニ加之間、消之、

「此外永正十四年過上壹石五斗九升二合
也」

已上

右御算用狀如件、

永正十六年六月廿七日

公文所○コノ文書、紙ノ繼目
毎ニ裏花押アリ、

同莊公事
錢

注進 上久世庄御公事錢御算用狀事

合 (朱線、下同之)
永正十五戊寅年分

廿三貫六百十八文

草用途

一貫九百八十文

職事

永正十五年雜載

五〇七

九百卅文

茄子

三貫九百四十文

八講用途

以上卅貫四百七十一文

現納 八貫七百七十文 徵符在之、

。庄未進貳拾壹貫七百一文

一 三原屋敷 七百文

三百五十文

智賢

二百文

利倉孫二郎

百五十文

同孫左衛門

以上七百文現納

一 衛門三郎加地子

三百文

刑部大郎

一。下久世庄御公事錢

合拾五貫四百五十文內

庄未進壹貫貳百六十六文

現納拾四貫百八十文 徵符在之、

一 太郎三郎加地子

三百文

大慈庵

都合貳拾三貫六百五十三文

一 諸下

二貫六百八十六文

此外四百六十文、自庄參分內也、
正月五ヶ度御神供御雜事錢

以上三貫百五十文

五貫五百四十一文

御神供御雜事錢

十二ヶ月分

貳貫文

御節供

百八十文

長日花

三百文

定使

以上拾貫七百十三文

殘拾貳貫九百四十文

以上

右、御算用狀如件、

一 同庄請取米 永正十五年^{戊寅}年分

合拾貳石八斗六合

代成八貫貳百六十二文^{和市下行一斗五升五合宛、}

請加貳百七十九文 去年御算用殘足

都合貳拾壹貫四百八十四文

一 御遣足

四百文

御湯

壹貫文

御傳供

三百文 十ヶ月分

同利平

二百五十文 半分定

御棋佛^(蘇捷)

四百六十文

立春御雜事錢

五十文

板巾

六月廿七日

七百卅五文

去年御算用世諦

百五十五文 七ヶ月分

同利平

三百五十文

上下庄衆被上時

八月十四日

四百文

福井方^に 酒直御極代

六十文 五ヶ月分

同利平

八月日

六百文

八幡宮觀進帳新紙代

同 百七十文

同重而代

以上七百七十文

百十五文 五ヶ月分

同利平

十一月廿四日

壹貫文

御中間彦九郎方へ

同日

二百五十文

朝夕入足

十二月日

百七十文

鎮守御買物

同 壹貫文

兩雜掌給

同 貳貫六百文内^{八百文へ亥年殘分}

利上

正月十七日

同 貳貫六百文内^{八百文へ亥年殘分}

同 二貫文

御奉行徳分

同 一貫文 自去年如此、

同増分

永正十五年雜載

二月十六日

百五十文 此外百文ハ本ノ古鍋遣之、鎮守鍋代

三月五日

一百文

同十九日

五百文

同五日

二百文

百文

卯四月日

三貫七百五十文 自丑至寅廿五ヶ月分、加壬月如此、

五月日

一貫文但兩度渡申、

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

五二二

東大寺老僧得分ノ請取

同寺領播磨大部莊年貢錢

〔東大寺文書〕八十三 ○大和

請 老僧得分事

合參貫文者、

右爲秀海法印之分、所請如件、

永正十五年刁十二月十六日

使(花押)

〔東大寺文書〕三 ○大和

送進申御公用錢事

合伍拾貫文者但奈良着定、

右爲播州大部庄當年貢錢之内、送進所申之狀如件、

永正十五年戊寅十二月十九日

櫛橋若狭守 伊成(花押)

東大寺 年預五師御坊

永正十五年雜載

五二三

〔鹿王院文書〕○山城

寶幢寺御領大覺寺算用狀事

合參拾捌石五斗五升之内

壹石貳斗五升

本井料

四石八斗 文明三年大水川成、但八段分

肆斗五升 道揚屋敷御免狀在之、

壹石 藏付

三石五斗 應仁二年新堀溝成、五段大六十分

七石 定免

已上十八石引之、

定米廿石五斗五升之内

六石八斗五升 當免、三分一德

十石六升五合 當納、御請取在之、

壹石 左衛門尉之方へ渡ス、

貳石四斗 石倉方、一圓無沙汰、

山城寶幢寺領年貢大覺寺ノ算用本井料

藏付

七斗六升貳合 大藪北方
三斗四升四合 安良八郎方
已上廿壹石四斗四升貳合
廿石五斗五升 立用ニ候、
殘八斗九升貳合 過上
公用錢之儀者一圓井料方へ御立用、

永正十五年十二月廿七日

寶幢寺へ參

下司 豊成(花押)

〔宣胤卿記〕 正月一日、辛丑、天陰、○中、去年下越前青侍、田中、午刻上洛、年貢等如例年、

二月四日、晴、自越前文上、

〔宣胤卿記〕 ○柳原 十二月廿八日、晴、立春、○中、田中新左衛門、自越前上洛、杣山庄本役

沙汰如例云々、

〔菅浦文書〕 ○近江

麦廿はい請取申候、如毎年之貳拾八はい被上候事、不及覺悟候、去々年枇杷之京都への駄賃百文上候て、相殘分百文于今不上候、依何事不被上候哉、先年之麦・大豆之事、于今被仰此方、無沙汰候由被仰出事、迷惑至候、恐々謹言、

永正十五年雜載

中御門家領越前杣山莊年貢

近江菅浦莊年貢枇杷

永正十五年寅

十月五日

菅浦惣庄中

御代官
実重(花押)

契約

〔談山神社文書〕和○大

契約申 御被官事

合兄弟參人者、岩坂之内道胤・一胤・左衛門五郎

右件兩參人者、本來雖爲十市方之被官、多武峯寺文殊院に被入置質物之處仁、既相流之間、道悟請出之處也、雖然、爲願圓之律師變、當時御領中仁於居住之間者、一類子々孫々至迄、可爲大所方之御被官、然者、御墓守之准仁可被奉公者也、万一他所に於有退出者、曾以不可爲御被官者也、則請出候借狀貳通、令進覽之處也、仍後代龜鏡之狀如件、

永正拾伍年寅八月十九日

岩坂道悟(花押)
口入權律師俊尊(花押)
岩坂道胤(花押)
同一胤(花押)

多武峯寺へ
文殊院へ
被官ノ質
入
永代大所
方被官ト
申テ奉
公スベシ

岩坂道悟

寄進

〔松本文書〕四

○京都帝國大學所藏文書所收

奇進申田地之事

合壹段者、在所久知野郷之内ハシカミ谷、郷代斗七斗、此内ヨリ公方年貢顯孝寺へ五十文可出候、定米六斗可有御納所者也、此外不可有諸役候

右件田地者、太神宮に依有志、奇進申処実正也、可爲御祈念候、此上者、於子々孫々違乱煩申者有間敷候、仍爲後日奇進狀如件、

永正十五年寅二月十七日

上野桂圓(花押)

同左衛門五郎(花押)

外宮ニ田
地ヲ寄進
ス

上野桂圓

〔香取文書纂〕十五

香取神宮古文書纂十八
新福寺所藏

新寺寄進狀之事

右性仲・性了茶湯分ノ田地一反四百成、永代所奉寄進也、仍爲後代一札如斯、
田坪は新邊古館根、
作人ハ前原孫次郎、

新福寺住持道也、

香取小四郎直重(花押)

永正十五年戊二月廿八日

香取新福
寺へ茶湯
分ノ田地
寄進

香取直重

亡母靈供

香取新福寺へ奉寄進狀

母にて候物、爲靈供而、田少シ奉寄候、永代彼亡者の御とふらい、御懇切に被成可給候、於彼田地、以後に少も公事・公役あるまじく候、もしいつかたよりも、すこしも子細とも候者、彼文所をさきとして、御さたあるへく候、仍テ田之坪は、大山之下、みるそひかうかいほつ

永正十五年つちのへ十月廿四日

香取助二郎花押

寄進新福寺仁

〔香取文書纂〕

十一 香取神宮古文書纂十二 案主家所藏三

覺

一 佐原茄子田寄進

是は三嶋明神御供田

永正十五年十二月

小林太郎兵衛尉○前後ノ條目略ス、

〔龍德寺文書〕

一 美濃

〔端裏書〕
〔宗恩寄進狀〕

佐原茄子田
三嶋明神
供田

美濃龍德寺
祠堂方

奉寄附祠堂方畠之事

合大者、并現錢貳百五十文相添進候、但太郎方宮ノ神領也、在坪門ノ左、小作前貳百五十文、

右彼畠者、爲桃林瑞源禪門入牌也、但宮へ九月九日ニ參拾文御納所、段錢春秋四十文公方へ御納所、此外万雜公事無之、本券壹通相添進候、仍而後日之狀如件、

永正十五年戊寅三月七日

宗恩(花押)

龍德寺祠堂方

〔裏書〕
〔私書〕
國枝三河守殿妻ヲ。宗恩ト云、此人乎、

〔古文書集〕

六 〇京都帝國大學所藏文書所收

奉寄進田地之事

合而小者、字ハフ、三斗代、

在山城國綴喜郡田邊之郷内在之、

右件田地者、雖爲宗臨尼買得之私領、爲菩提耐恩庵ニ寄進申處実正明白也、本券文引失申間不副之、若有違乱輩者、可被處盜人之罪科者也、仍而狀如件、

永正十五年戊寅三月廿三日

宗臨(花押)

〔向岳寺文書〕

〇甲斐

永正十五年雜載

五一九

山城酬恩
庵田地

段錢

甲斐向岳
庵茶島

宮内大輔
信秀

和泉久米
田寺忌日
料田

紀伊木本
八幡宮田
地

永正十五年雜載

五二〇

態以一札令申候、仍并尻茶島之事、土貢五百文之在所也、雖曾祖父御寄進候、此年來不知行候間、相違申候處候、重而就于拙者知行、如先規致寄附候、於子々孫々、不可有違犯候、爲後證狀如件、

永正十五年^{戊寅}三月廿八日

宮内大輔
信秀(花押)

塩山
向岳庵佛殿^記

〔久米田寺文書〕^三寄進狀

〔端裏書〕
〔土生衛門太郎
道幸禪門卯月十一日寄進狀忌日田〕

奉寄進忌日新田之事

合大者、但公方^{〔分力〕}今、

在和泉國南郡木嶋郷土生度土生里五坪之内、

右件田地者、雖爲衛門太郎買得之私領、爲道幸禪門卯月十一日後生并、久米多寺忌日方へ寄進申處矣也、然上者、後々不可有違乱妨者也、仍爲後日支證文之狀如件、

永正十五年^{戊寅}卯月十一日

土生南
衛門太郎(花押)

〔木本八幡宮文書〕^{〇紀}

〔寄進、下同シ〕
奉寄進田地之事

合壹所者、在所へ木本西庄、
坪へ北垣

右自彼田地、毎年納二升ツ、無懈怠可納者也、仍後日證文之狀如件、

永正拾伍年^{ツチノエ} 四月廿九日

西谷
泉教(花押)

木本西庄
八幡宮奇信

〔長法寺文書〕^{〇備}

〔追筆〕
〔寄進狀〕
公文鷹取彈正

奉寄進田尾事

合四斗代也、^{年貢米、定斗}
四斗也、

右件田尾、爲御奉加、所奉寄進、在地明鏡也、但分米可有御納所者也、此寄進狀上者、一族親類、不可有違乱妨者也、仍爲後日寄進狀如件、

永正十五年^{戊寅}七月一日

公文鷹取彈正
能佐(花押)

〔大樹寺文書〕^二寄附狀^一

〔端裏書〕
〔山寄進狀〕
水澤

野寄進之事

右寺山与井田之林間ニ、野壹所寄進申所矣正也、爲末代一行を進上申候、仍如件、

永正十五年雜載

五二一

備前長法
寺田尾

分米

三河大樹
寺原野

植村安忠

永正十五年雜載

永正十五年戊寅八月九日

植村入道

安忠(花押)

五二三

但馬妙見社田地

〔日光院文書〕

○但馬

三方庄本所分内奉寄附石原山妙見大社田地事

合伍段者、斗代・坪付、別紙在之

右所奉寄附者矣也、勤行之次、抽子孫雄猛、眷屬繁昌、武運長久之丹誠、以永世可被專社務之狀如件、

垣屋豊知

永正十五年己未八月廿四日

垣屋越中守豊知(花押)

日光坊 御同宿中

伊豫寶珠寺燈明田

〔大洲舊草記〕

○伊豫

奉寄進谷上山御燈明田之事

合二段、大厩分傍示内、手作分一職

右、且ハ爲國家安全、且者自身爲遂本懷、寄進之狀如件、

永正十五年戊戌十月十九日

通昌(花押)

宝珠寺進□之

攝津中山寺燈油料

〔中山寺文書〕

○攝津

〔端裏書〕寄進狀 小屋庄中之町大夫三郎衛門

永代奉寄進灯油領事

合畠壹所毎年々貢米壹斗宛

右件之畠者、雖爲小屋庄中之町大夫三郎衛門買德、依有志、仲山寺觀音薩埵灯明領〔料〕奉寄進所也、本支證文一通相副申候、殊現世安穩、後生善所、皆令満足之處也、仍寄進狀如件、

永正十五年戊寅十二月十八日

施主小屋庄中町大夫三郎衛門丞(花押)

近江總持寺茶湯料

〔總持寺文書〕

○近江

〔端裏書〕惣持寺茶堂寄進狀 南光坊

奉寄進田地事

合而壹段者、在江州坂田北郡細江之郷、十二町保之内、四條十一里十七坪、下坂田南繩本於一段次壹段也、公方年貢四斗五升、カテウ五升、夫錢卅六文、作人弁也、定徳分壹石、内斗之定也、

右件之田地之元者、雖爲南光坊之所領、惣持寺茶堂爲茶湯料寄進仕候也、但此料之事者、縱雖經後々年、餘之事不可有御仕者也、然上者、本文書三とう相添、寄進申者也、於此地者、雖經子々孫々、後々末代、不可有違亂煩者也、依而爲後日證文之狀如件、

永正十五年雜載

五二三

南光坊ノ所領

加徴

永正十五年雜載

永正十五年^{丙戌}十二月廿一日

弘秀(花押)

五二四

讓與、

〔革島文書〕^{○山}城

^{〔端裏書〕}永邦 永正十五年

讓与田地之衷

合壹段小者、^{一反字ハ田中、小ハイノシリ、}
^{四至ハ見本券}

右田地者、永邦買得之下地也、永代宗進侍者仁所令讓与実正也、手繼證文壹通相副渡上者、
於以後不可有相違者也、仍爲後日讓狀如件、

永正十五年二月九日

永邦(花押)

〔寶生寺文書〕^{○相}横

讓狀事

寶生寺住持之事、眞俗共、中納言僧都長祐御方に憑入讓進候、是則任智行道縁而本尊鎮守
大師御照覽故也、本尊・道具・聖教并流々等、如先祖可有持秘者也、^{〔規カ〕}然又門弟等事、^{〔マ、〕}教間能
々可指南候、^{〔經カ〕}縱於門徒中器量人出來候共、違乱之儀不可有之、此旨代々之任遺言而申置所
也、仍證文如件、

田地ノ讓
與

永邦
宗進

相模寶生
寺住持職
ノ讓渡

代々ノ遺
言ニ依ル

永正十五天^{戊寅}霜月三日

法印定鎮(花押)

勝識房^ノ

〔慶壽寺文書〕^{○駿}河

慶壽寺領野田藥師堂田之事、

就由來有、^{〔祖考〕}自明江和尚被御判下處明鏡也、然而珠泊房從幼少致隨^{〔家〕}遂間、彼御判令附与所也、
自他所菟角之儀有間敷候、如定可致當納候、委可有御判候、仍爲後日證文如件、

永正十五年霜月廿六日

賴覺(花押)

珠泊房

貸借、

〔大德寺文書〕^{○三十五}山城

^{〔端裏書〕}松源院祠堂錢在堺分書之、

當院料足堺衆預ル分

貳拾貫文 宗玖 本返弁、

拾貫文 金田屋善四郎

拾貫文 和氣屋

永正十五年雜載

五二五

駿河慶壽
寺領野田
藥師堂田

松源院祠
堂錢

堺衆

永正十五年雜載

拾貫文 魚屋新三郎大永四申三月十五日
本共ニ運上者也

拾貫文 坂本屋宗補

拾貫文 饗屋平次郎

五貫文 野遠屋式部

五貫文 米屋宗壽近年利平
一向不上

以上八拾貫文

永正十五寅二月日 原藏主上洛之時書之、

賣買、

〔神宮徵古館農業館所藏文書〕一〇伊勢

定 永財賣渡申田地之事

合一所者、所在鹿海字小原、

四至、限東大道、
限南左近殿當作、
限西森麴屋作、
限北四郎形部作、
〔刑〕

現錢拾貫文請納畢、

右件之田地者、代々相傳當知行無相違地也、雖然依有直急用、限上件之現錢、喜多坊當住持祐弘御房〔善〕永代沽渡申處実正明鏡也、雖致未代、不可有相違、若天下大法之地發雖行、於

田地ノ賣却
伊勢鹿海
村
麴屋

五二六

下地

此田地不可有違乱煩者也、爲後日證文之狀如件、

永正十五寅年二月六日

沽主又三郎(筆印)

〔大德寺黃梅院文書〕甲〇京都帝國大學所藏文書所收

永代賣渡申下地之事

合大者、字ハニキノ
森トカウス、

右件下地者、從石原中弁方、雖爲永代買德相傳之地、依有要用、直錢貳貫文之、長源藏主〔明白〕永代賣渡申所実正白明也、但本役者壹斗可出也、此外万雜公事無之、此本證文雖可相副、先年同居就公事之儀、紛失候間、無其儀候、万一本支證、又者号同居子々孫々、於彼下地違乱煩之輩出來候者、雖爲何時、任御法旨、於公方樣、可被行盜人御罪科者也、仍爲後日賣渡賣券狀如件、

永正十五年寅二月十四日

賣主 藪田掃部助 家弘(花押)
證人北 貞忠(花押)

〔革島文書〕〇山城

永代賣渡申田地事

合壹段大者、字ハ号田中、四至
見本券了

永正十五年雜載

五二七

在山城州葛野郡朝原郷之内也、
右件田地者、雖爲買得相傳之地、依有要用、相副作職直錢拾貫文ニ永邦藏主ニ賣渡処實正也、斗代反別八斗宛、作職ハ反別貳斗充也、若号子々孫々、違乱煩申輩在之ハ、堅可有罪科者也、仍爲後日賣券狀如件、

紹樹

永正拾五年^戊二月廿四日

紹樹(花押)

〔靈雲院文書〕^一○山城

作職

永代賣渡申作職之事

合壹段者、在所嵯峨中野^ヲイ田村ツカノ前、三方ハ限類地、一方ハナウテヲ限也、

右件田地者、依有要用、直錢七貫文仁賣渡申處実正明白也、但御本所へ五斗五升壹合、夫錢三百八十文、毎年沙汰申者也、次龍安寺下用升ニ毎年壹斛、永代惠東首座仁納所可申者也、風損・旱損・万雜公事無之者也、万一於此下地違乱煩在之者、公方奉行御成敗、可有御罪科者也、仍爲後日永代賣券之狀如件、

龍安寺下用升

永正十五年卯月廿五日

龍安寺惠東首座

賣主
太郎次郎(花押)
請人
五郎(三郎)(花押)

〔多田院文書〕^{○攝津}

〔端裏書〕宗泰房本年貢支証 永正十五年五月二日

永代賣渡年貢事

合 本年貢參斗者田中在之壹段也、
本年貢壹斗者庵の谷上半内ヨリ、

右件年貢者、義照先祖相傳之私領成といへども、依有要用、限永代多田院六所^權護現夏籠方へ、代米貳石賣渡申處明白實正也、此上子々孫々おき候て、不可有違乱候、仍爲後日支証如件、

宗智
義照(花押)

永正拾五年五月二日

〔大樹寺文書〕^一○三河

御一門判形

永代賣渡申田之事

合壹段五百文目、在所、^{あかまつみそ}東、^{下から}下から、

右依有要用、代參貫五百文ニ未代賣申候處実正也、但彼下地之者、公方年貢年中百文可有納所候、爲其うり狀仕候、申定候上者、子々孫々、又者親名・同百姓等、其外違乱有間敷候、仍爲後日狀如件、

永正拾五年^丁五月十六日

森左馬助
長家(花押)

永正十五年雜載

五二九

森長家

攝津多田院六所護現夏籠方

市升一合
延

永正十五年雜載

市升一合のへ

〔多田院文書〕

○攝津

永代賣渡申田事

合半九十歩者、在所山原村堂前ニ在之、

四至本券ニアリ、

右件之田者、多田院阿弥陀坊等妙房買德相傳之雖爲下地、依有要用、伍貫伍百文、六所權現夏籠經方へ、限永代賣渡申處實正也、本役者、多田院常住方へ納候加地子壹石宛、無懈怠可納候、此外諸公事あるましく候、縱天下一同之德政行候共、一言之子細申ましく候、仍爲後日賣券如件、

永正十五年^戊六月七日

義淵(花押)

多田院
六所權現夏籠經方へ參

攝津多田院阿彌陀坊等妙房

細川陸奥守袖判

〔革島文書〕

○山城

(細川尹隆カ)

(花押)

永代うりわたし申下地之事

合五段ハ、さい山城國下山田之庄之内あさなこん田、

四し東ハこの衛殿御りやうをかきる、西ハかいたうヲ限、南ハおかりやうを限る北ハみそをかきる

右之下地ハ、北山勝園寺領牛瀬さんさい之内下地也、昔より相傳無相違當知行之所也、さりながら御寺けつほくこて、くりくつれ、たいてんにおよぶこよつて、御造作之ために、ちきせん十一貫文に、永代河嶋やすのふにうり渡候所実正也、御年貢ハ八合ノますに三石也、三年ノ一度ノ井新いて候、此ほかハ万さう公事なく候、住持之御判并奥州御袖判之上ハ、於後々他之さまたけ不可有候、支證ハ一紙目錄こて、うらをわり候ハんすれ共、余所に預ケ置候間、此一つう肝要にて候、於永代違乱わつらい有間敷候、仍爲後日之狀如件、

永正十五年^戊九月三日

祐春(花押)

勝園寺殿

(別筆)
「奉行(花押)」

〔革島文書〕

○山城

永代沽却申田地之夏

合八段三百歩者、^(券文カ)
^(在所字等ハ詳本ニ詳カ)
^(然注文相副之渡者也)

右件田地者、革嶋正宣爲配當相傳之地也、雖然今度當社御頭役、依^(看要用カ)相副證文、直錢參拾五貫文、革嶋又次郎就宣仁、賣渡處實正也、自然又五ヶ年三箇年中ニモ、於致調法者、如之本錢可申受、預御許容者、可畏入候、然上者、於此下地、若有ハ違乱之族、可被處盜人之

永正十五年雜載

五三一

山城勝園寺領
同寺庫裡修理ノ爲
革嶋泰宣
八合併

革嶋正宣
同就宣

罪科者也、仍爲後日賣券狀如件、

永正十五年十月 日

正宣(花押)

〔輯古帖〕

八 光照寺藏
○伊勢

定

賣渡屋敷之事

合壹所、在所者、山田浦口之内、

四至 限東左衛二郎殿敷、限南堤殿内方并榎木藏大後室屋敷、限北榎木藏茶蘭并藏人殿島、限西通道、

次東西に七間、南北に十三間、

右件之屋敷之事、依有急用、直錢拾貳貫文浦口之教弁之方に沽渡申事實正明白也、萬一天下大方之德勢行共、不可有違乱煩候、仍而爲後日注之狀如件、

永正十五年戊十一月三日

沽主榎藏

武棟(花押)

かひつや

口入

六郎兵衛門

播磨國分

〔芥田文書〕

○播磨

永代賣渡申大村國分寺賣場之事

寺賣場

賀古河市

御着西市

佐地市

市公事錢

合

東限松、同賀古河市、三日・十三日・廿三日、西、限一河、御着西市、四日・十四日・廿四日、

合

佐地市、同公事錢五十文宛、志方殿へ納所也、并村里神西郡、是者、大村衛門二郎大夫賣場也、

右件賣場者、大村國分寺金屋より賣德仕候て、雖爲新右衛門重代相傳之賣場、依有要用、直錢二拾貫文仁、同所五郎右衛門方仁、限永代賣渡申所実也、但毎年市公事錢二百文宛、志方殿に納所候て、末代可有知行候、殊之當所村八郎兵衛取次候間、不可有相違候、此上者、親類兄弟、況他人妨不可有候、若菟角申輩出來候者、任此支證旨、爲公方堅可有御罪科候、仍爲後日永代沽券狀如件、

永正十五年丁十一月七日

野里村

新右衛門尉(黑印)

當所取次

八郎兵衛尉(黑印)

芥田五郎

右衛門

あく田氏 五郎右衛門殿

るる

〔神宮徴古館農業館所藏文書〕

○伊勢

永代賣渡申田地事

合壹段、在所鹿海小、原御座前、

右件田地者、依有急用、直錢限八貫文、鹿海北坊永賣渡申所實正明白也、自然天下大法德政地發行共、彼於田地、聊違乱煩有間敷候、仍爲後日賣券狀如件、

永正拾五年^戊霜月吉日

賣主横地館戶々女(花押)

〔革島文書〕

○山城

永代賣渡申年貢錢之事

合貳貫參百文内、貳貫文者御料用錢、
三百文屋地子、

右件料足者、雖爲慶林藏主讓得地、依有要用、直錢七貫五百文之、革嶋勘解由左衛門泰宣仁
買渡申處実正也、手繼貳通相副、賣渡申上者、不可有他妨者也、萬一号門徒法眷、有違乱妨
輩者、爲公方様、可被處罪科者也、仍而爲後證賣券狀如件、

永正十五年十二月十三日

慶林(花押)

慶林
革嶋泰宣

〔久我家文書〕

四

永代賣渡申久我庄法久寺下地之事

合壹反者、^(御幕カ)衍基山南、号丸町、而斗代壹石貳斗、内加地子六斗、

右田地加地子之事、緣有數年知行仕候、雖然依有要々、此加地子分、永代之參貫賣渡申候、
然者於已後、兎角之儀不申、自然於此田地ニ申事有之者、罷出申可分候、万一緣有号親流^(御)
而雖有申子細ヲ、不可及是非候、仍賣渡申狀如件、

永正十五年^戊十二月十七日

緣有(花押)

山城久我
莊法久寺
加地子分

〔大德寺文書〕

○三十四
○山城

永代賣渡申下地事

合壹所貳段者、

右在所ハ、大宮之内^(佛)つしりのみそなり、依有要用、直錢四貫文之永代をかきり賣渡申所
実正也、於此下地、我等か子孫なりとも、違乱申者候ハ、かたく盜の御せいはい可有候也、
仍而證文之事如件、

永正十五年十二月 日

室町こんや宗珍

こけい

車屋
与四郎殿

黒印

〔輯古帖〕

十一
○伊勢 福井式部藏

永代沽渡申屋敷之事

合在所者、北ハ限明光寺屋敷、東限彦四郎殿屋敷、
南ハ限我等か屋敷、西ハ限其方之屋敷、

西東十六間々半、北南三間一尺、又西之すみ五
つほりり申候、つほ敷以上五十七つほ間半也、

右之屋敷ハ、代々知行雖無紛候、依有急用、直錢限七貫四百七十五文、福井孫七殿へ永沽渡
申處実正明白也、此屋敷之事ハ、縱於末代如何様之儀出來候共、不可有違乱煩者也、仍放
券之狀如件、

山城大宮
郷佛尻溝

紺屋宗珍
後家
車屋

永正拾五年戊十二月十六日

不動坊
秀行(花押)

追而申候、此屋敷之内五つほの分、六百五十文、秀永へ渡可申者也、

〔輯古帖〕

三 光照寺藏
○伊勢

定

永代賣渡屋敷之衷、在所者、山田浦口之内、

四至 限東堤殿之内方屋敷、限南界道、面四間五尺、限西世古道、限北光照寺屋敷、奥に拾九間々中、

右件之屋敷之衷、永代雖知行、依有急用、直錢廿四貫文、浦口之ぬしや兵衛四郎方へ沽渡事、実正明白也、設天下大方之地德政行共、於此地不可有他之違乱煩候、仍爲後日證文狀如件、

榎倉小二郎墨印

武親

永正十五年戊十二月吉日

口入 浦口之六郎二郎太郎殿
兵衛門
孫太郎殿

〔伊和神社文書〕

三 播磨
○摺磨

神田作職
等ノ返狀

端裏書
〔藤村九郎右衛門 神田返シ狀〕

一宮御神田かな山之事、作職等を永代かい申候處、御社記に候とて、以御礼錢御侘言被召候間、無子細一宮へ返申候、然に其よりの御うりけん狀返可申候へ共、ごめうしない申候間、不及是非候、万一子共の中、又ハ子孫におき候ても、御うりけんをたいし、ごかくまつわり申候共、如此吉季はなし狀を仕候上へ、其者申分ほうくたるへく候、なをもつて何かと申候へ、子にて候共、子孫にて候共、公方へ御申候て、盗人のきたにおこなわれへく候者也、仍爲後日狀如件、

永正十五年三月廿一日

藤村九郎衛門吉季(花押)

一宮大井之祝殿るる

〔來田文書〕

五 京都帝國大學所藏文書所收

永代賣渡申御道者之事

合四拾貫文、

右依有急用、中嶋北殿に直錢四十貫文を永沽渡申處実正明白也、道者之御在所者、淡路之國之中、我々の知行之分ゑなみ一圓、同宮路一圓、同中村一圓、同こくか一ゑん、同石井一圓、同新在家一圓、同八幡之坊中一圓、同徳長一圓、同うわら一ゑん、同十一ヶ所一圓、同

淡路ノ伊勢參詣道者

坊中之分一圓、同せんくわう寺在所一ゑん、同野□在所一圓、同ゑんきやう寺在所一圓、此分
代々雖知行候、永代沽渡申處實正明白也、委事をハ日記を相副進候、仍沽券之狀如件、

永正十五年戌三月廿八日

中嶋北殿る

あわちや与三次郎
光長(花押)

(端裏ウハ書)
「あわち中嶋北殿る
永たいなかく我等のもちふんの同(内之)の里

善ひやうへ」

合卅貫文ごうり渡申候也、

上ないせん(内之)のふん一ゑん、同下ないせん(内之)の分一ゑん、同きしかわ(内之)の分一ゑん、同かも(内之)のさ
と一ゑんに、合四村(内之)の分也、いかやう(内之)の何事ゆき候共、これにおいてわつらい(内之)あるましく
候、仍如狀件、

永正十五年つちのえとらのとし三月廿九日

中嶋北殿る

善兵衛
滿家(花押)

同

(端裏書)
「あわち文書」

なかくうりわたし申候、我々のもちふんのあわちの國之内、上ごうりのふん之内、かりや
のさといちゑん、同并下田(内之)のさといちゑん、同く(内之)の木はやしさと、合二さと、さうようあ
るによつて、以上合四十八貫文にうり申候、これにおるて(内之)はいかやう(内之)の事候とも、いらん
わつらひあるましく候、仍狀件、(如脱カ)

永正十五年つちのえとらのとし

あわちや平三郎

四月十九日

滿吉(花押)

中嶋
北殿る

〔新編會津風土記〕

六 提要之三 家士古文書
福井舍人所藏

永代賣渡申道者の事

合一所 在所、しまの三ヶ
所と申在所也、

右道者の事、當ちきさようさをいなしとわ申せ共、依急用有、ちき錢三貫文ご布屋彦二郎殿
方へ永代賣渡申所実正明鏡也、若天下一同の徳政物言候共、於此道者いらんわつ(内之)い有
間敷候、新足かりかゑなき時賣申候間、若いらん申候方候は、おか本龜屋四郎右衛門殿
と、我らと罷出候て、すまし候て、彦二郎殿へ渡可申候、仍爲後日賣券如件、

陸奥ノ伊
勢參詣道
者

永正十五年^{戊寅}八月十一日

おか本
さかへ口

〔青山文書〕

〇陸奥

(裏端ウハ書)

先達兵部卿へ

ひかしより

大たいらの人あし、そのほかこくち物、合十二貫文ごうりわたし申候、ねんきすき候共、な
んどきも此分ごうけ申へく候、何方よりもいらんの儀あるましく候、後日の證文如件、將
又大たいらの屋しきの内、むねやく等の事、心得申へく候、

永正十五年^{つちのへ}十二月廿六日

聖榮(花押)

〔松本文書〕

〇京都帝國大學所藏文書所收

一みの

(笠田)
國さいたの内ろくと申在所之寺澤弥九郎殿御子そく、

一福満ててひこ松座小三郎親子參宮之時へ、田中當八祢宜殿に御宿可有者也、先度之文書

之内ごとのへ可進之を、失念申如此候、仍狀如件、

竹千代

貞秀(筆印)

うり人

甚三郎

貞給(花押)

永正拾五年^{戊戌}十二月廿七日

田中忠彦

らる

美濃ノ伊勢參詣道者
同國鷺田ノ内呂久

同先達
大平

雜、

〔嚴助往年記〕

上

二月廿五日、粟津与當所山事出來、大變有之、

三月十一日、同山事大合戰有之、山上衆二人、山下三人、以上五人打死、手負數十人有之、

勝口式部此時打死也、

〔塔寺八幡宮長帳〕

〇陸奥

(裏書)

七月七日

(永正十五年)

に町ち中之物とも、ひどいやまゑくさかりともあまたいり候處、あさたちのや

まもり、まるくよりしてなきしんほうを申いたし、やまててを(符カ)とるへきよし申、うまを

みなとり申候あひた、むかしよりして、やまてすましたるよしなき分をわひこと申へき

ために、あさたちのものごものうり木をおさへ申候處、やまもり黒川へのほり、此分ひ

ろういたし候あひた、塔寺よりしても、別當・神主殿談合、其外むらちようの人々みな一

れつしてわひ事申候時、のほり申ひらく人へ、承仕戸之内殿・金子弥二郎殿のほり、せ

んくよりしてなきよしを申つけ候へ、くる田治部の少輔殿なかにいり、せんく

よりなきやうに、まつたいまでも其儀あるましきよしきたまり候、

山城醍醐
ト粟津ノ
住民トノ
山争トノ
合戦討死
アリ

會津ノ柴
草争
山手

山守ヨリ
蘆名氏ニ
訴フ
塔寺ノ陳
辨
黒田治部
少輔ノ幹
旋ニ依リ
和解ス

大日本史料 第九編之八終

補遺

永正十五年

○六月二十三日、參議世尊寺行季ヲ罷メ、左中辨甘露寺伊長ヲ之ニ任ジ、左大辨ヲ兼ネシムル條、三二頁、宣胤卿記八月七日ノ項ノ次、

〔宣胤卿記〕

○柳原家本 十一月十七日、晴、宣胤卿記秀房朝臣狀到來、〔脱カ〕御即位猶々一定分候、○中

一今月中秀房可被補貫主之由、被仰下候、但頭中將上落事、〔正親町三條公見〔略〕〕○中

霜月十六日

秀房昨日狀也、今日又到來、

十九日、晴、○中秀房朝臣來、今日藏人頭事御沙汰云々、珍重之由賀了、

廿三日、陰、秀房朝臣狀來、御即位御座圓并由奉幣次第返之、又貫主拜賀次第第二借之、

十二月十五日、晴陰、○中秀房朝臣來、拜賀作法習禮、又敍位条々問之、宗親饅頭持來、

廿日、去夜雪積庭又降、〔房カ〕秀康朝臣狀并不審条々一卷四十五ヶ条、到來、可勘付云々、

雪中御床敷存候、兼又就敍位不審条々、存知出分注付候、懇被注下候ハ者尤可畏入候、宣此外可覺悟条々不可有際限候間、連々芳志奉憑候、一向無旧記候間、違我心、敍位

中御門宣胤ニツキ拜賀習禮

秀房補任ノ御内許正親町三條公見ノ歸洛ヲ俟チテ補任

申文短冊・袖書等事、委細存知仕度候、次可有敍人之由承及候間、自然臨期無覺悟候
者、可爲迷惑候、則敍位申文撰定分、存知仕度候、旁以參拜可申入候、かしく、

次、先日内々申候吉田大納言殿除日記、申請度候、如何、

廿二日、晴、○中又自秀房朝臣狀、拜賀不審条々甘ヶ条也、○中

先日尊報委細拜見仕候、誠雨儀之時も高遣戸堂上無其覺悟候処、示預候一段畏入候、

兼又此不審条々可被注下候、爲以後如此双紙仕候、抑出立事、如仰御亭を申請度候、

御方御歸歟談合申度候、只今陰陽頭所へ日次事申遣候、廿五六日時分存候、猶々以參

拜可申入候、申請度物事、石帶・雜色狩衣、四具、御方へ申請度候、以下略之、

廿三日、晴、○中秀房朝臣狀來、拜賀日殿上奥端兩様、何可然哉事、

廿五日、雨、晚止、今日頭左中辨秀房朝臣貫主拜賀也、自此亭可出立云々、有狀、降雨之

間可延引歟云々、雖雨儀有何儀哉、其上於晚景可屬晴歟之由返答了、以狀遣柳一荷兩種、

豆腐卅、（中御門官秀）又自大納言方一荷兩種遣之、入夜秀房朝臣來、大納言方、着東帶、（中御門官胤）

次三獻、（本人用）布衣侍一、如木雜色一本、小雜四本、笠持白張一人等也、追前事如恒、

來人々、甘露寺大納言、元長卿、勸修寺中納言、尙顯卿、左大弁宰相、伊長朝臣、（可）顯量

原氏直、（六位藏人、今夜申次）此外宣秀卿在席、余依法躰不出座、此外一家中不來人、坊城前中納言、

秀房中御門第ヨリ拜賀出立

申次富小路氏直

（可）俊名卿、依（兼念）顯基卿、顯量養父、（在御門）光任父子、（勸修寺）雨不降之間、晴儀
（窮困不出座、盲目）頼繼、在谷、（兩人在土左）尹豐等也、（顯量）雨不降之間、晴儀
也、立無名門前、（申次等如常）拜了入無名門、出神仙門、着端座、大臣疊、吉書奏了着奥座、先披
見廣絹解文、此条々兼日商量之間記了、先規不同也、着端座事、依下薦之貫首也、或自
小板敷着之、巨細見次第、

○九月六日、山城佛陀寺堂舎一字再建ノ條、一七〇頁、宣胤卿記ノ次、

〔宣胤卿記〕（柳原家本）十月□日、晴、（中）佛陀寺本尊、今日奉遷新佛舎云々、

本尊ヲ新佛舎ニ遷座ス

○十月九日、駿河今川氏親、滿願寺榮午ヲシテ、同寺領ヲ安堵セシムル條ノ前ニ、
左ノ一條ヲ加フ、二一九頁、

九日、（亥）亥子御祝、

〔宣胤卿記〕（柳原家本）十月□日、（亥子）御マイリ切、今朝頂戴、（宣胤）山科去夜申出云々、

參切ヲ賜フ

○十月是月、宇佐八幡宮第二殿立柱上棟ノ條ノ前ニ、左ノ一條ヲ加フ、二二三頁、
是月、義種ノ室町第上棟、仍リテ、近衛尙通等參賀ス、

〔宣胤卿記〕

○卯原家本

十月□日、□、

今日室町殿常御所上棟、諸家參賀、近

日平殿

也、近衛前關白尙通公、以下被參云々、

○十一月ニ左ノ一條ヲ加フ、二五四頁、

十五日、辛義植、御即位ノ用途ヲ獻ズ、

〔宣胤卿記〕

○卯原家本

十一月十七日、晴、

秀房朝臣狀到來、

御即位猶々一定分候、昨日自室町殿直十萬疋被進候、

一御即位指圖御座候ハ者、申請度候、

一御即位并鉞位御次第、同申請度候、

一御即位奉行事、日野者可故障申損年承及候、

一今月中、秀房可被補貫主之由、被仰下候、但頭中將上落事、猶々可被相尋由候、拜

賀其ト不可事行候ハ、迷惑候、

一御即位奉行事、就日野故障、自然秀房ニ雖被仰出候、一向未練事候間斟酌、心中猶

明日番次、以參上可得尊意候、秀房頓首誠恐謹言、

霜月十六日

秀房昨日狀也、今日又到來、

十萬疋

明年三月
即位アル

用途之
キニヨリ
本年モ延
引ス

廿日、晴、自殿下御使、御即位事、昨日自禁裏御使廣橋大納言參事、來月可被行、可有御心得事也、
廿三日、陰、秀房朝臣狀來、御即位御座圓并由奉幣次第返之、又貫首拜賀次第二倍之、
廿五日、陰、秀房朝臣狀來、御即位・鉞申沙汰事、条々問之、
廿七日、晴、昨雪在庭、左少狀來、秀房朝臣來、問御即位・鉞位事、先日借遣御即位次第并記一冊返之、

十二月八日、晴、頭左中弁秀房朝臣狀到來、御即位次第内不談行所々問之、

十五日、晴陰、遣狀於勸黃門、

御方弁官事如何御沙汰哉、○中略、尙顯ノ子尹豊ニ辨官補任ヲ奏スベキ時期ノコトニカ、ル、御即位明年三月之由其沙汰候、其

以前御拜賀可然候、

十二月十五日

卅日、晴、御即位事、依無惣用、不及沙汰、以前十萬疋被進在御念、尤不可事足之間、不及且下行歟、傳奏廣橋大納言也、當御代、御在位已十八年也、如此延引無先規、未代之至極也、

○十二月二日、大内義興、石見久利小次郎等ノ官途ヲ吹舉スル條ノ次ニ、左ノ一

條ヲ加フ、二九二頁、

四日、己是ヨリ先、四條隆永、美濃ヨリ越前ニ赴ク、是日、隆永、越前ヨリ歸洛ス、

〔宣胤卿記〕

○柳原家本

十月廿七日、晴、自濃州四條宰相（隆永）狀到來、知行在所未落居云々、

十二月四日、晴、四條宰相、自越前上洛、來語言、濃州知行儀不事行、仍越々前、

○美濃守護代

齋藤利良、越前ニ奔リ、朝倉孝景（隆永）、松隱庵對面云々、自越前國府鴨二・雪魚二・丸蛇一袋上、四條ニ頼ルコト、八月十日ノ條ニ見ユ、

○隆永、美濃ノ騷亂ニヨツテ、同國ニ下向スルコト、八月十日ノ條ニ見ユ、

美濃四條家領ノ違亂落居セズ越前任住ノ齋藤利良ニ朝倉孝景隆永ニ託ルシテ宣胤贈

○十二月二十六日、幕府、花山院政長ノ、圓滿院領山城北岩藏賀茂田ヲ違亂スルヲ停メ、名主・沙汰人ヲシテ、年貢等ヲ同院ニ進濟セシムル條ノ次ニ、左ノ一條ヲ加フ、三一九頁、

二十七日、壬辰節分、義植、諸家ノ參賀ヲ辭退ス、

〔宣胤卿記〕

○柳原家本

十二月廿七日、節分、今日室町殿諸家參賀、（依カ）不合期、被察思食、

不可及參之由、兼日以勸修寺被仰諸家云々、

○中略

來年星五（中御門宣胤・中御門宣秀）・越前・駿内等分（河丸）・出來、自眞性院

五疋、書付各遣、今日節分讀誦、自今夜歸宿新造、

節分讀誦

智惠光院住持ニ香衣勅許ノコト

〔宣胤卿記〕

○柳原家本

十二月廿八日、晴、立春、秀房朝臣狀來、智恩光院住持香衣給旨

○年末雜載佛寺ノ條、四〇三頁、（萬里小笠）月舟和俗語錄ノ前、

〔宣胤卿記〕

○柳原家本

十月十三日、晴、傳聞梅尾石水院之春日神影、自今日開帳、可爲

七ケ日云々、先々只一日也、爲修理勸進云々、

高山寺石水院春日神影開帳

○年末雜載諸家ノ條、四三四頁、（二水記）二月二十日ノ項ノ前、

〔宣胤卿記〕

○柳原家本

十一月十六日、晴、攝津掃部頭元直來、富樫介口宣事談合、此介

何國哉、無所見之由申之、加賀介可然歟、相談後、又以使者、尤申含雜掌之処、難相計之間、下國可申入云々、右之由申也、

十二月十九日、晴陰、○中略左少狀來、攝津掃部頭光直奉書禮節、恐々謹言、不可然歟云

攝津元直富樫某ニ介ノ宣下ヲ奏請ス相計ラヒ難シ

々、此事元來不審、余五位職事之時如此、元々儀又同^{〔案カ〕}由告申、

正忌

○年末雜載諸家ノ條、^{四三六頁、}宣胤卿記七月三日ノ項ノ次、

〔宣胤卿記〕

○柳原家本

十月^{〔三〕}□日、陰、小雨、^{〔中御門宣胤〕}先考御正忌也、追善如例、拜僧

日精進、^{七ケ日}備佛供・靈供・茶湯、十百万反念佛

卒都婆一本、今朝廟所參事、依病

氣、爲代官^{〔宣〕}秀卿參也、宣增僧都同道、

たらちねの苔の下をもとりすなる老の^{〔マ、〕}のよはりあまなさ

十一月三日、晴、今日追善於他所沙院、伊勢一社奉幣^{〔法〕}、^{〔其條〕}賴繼、自此亭參向神事之故

也、

中御門伊勢第一社奉幣
ヨリ社奉幣
一社奉幣
使立奉幣
ヨリ社奉幣
法要ヲ他
ニ營ム

○年末雜載諸家ノ條、^{四三七頁、}宣胤卿記七月十二日ノ項ノ次、

〔宣胤卿記〕

○柳原家本

十月^{〔午二日カ〕}□□、

北堂追善如例、終日稱名念佛、依病氣草臥、

○十二月々忌、異事ナキヲ以テ略ス、

○年末雜載諸家ノ條、^{四四四頁、}宣胤卿記ノ前、

〔宣胤卿記〕

○柳原家本

十月^{〔六〕}□日、晴、^{〔甘露寺寺長〕}甘亞相以下來、朝汁、自越前文、

十一月十九日、晴、^{〔前修寺僧頭〕}勸黃門狀來、院方召使事也、兄弟相論事、不及記、

廿日、晴、^{〔吉田〕}兼晴來、勸中狀、召使相論事、家記目六一卷、アヤ木丁送之、

廿八日、雪降、終日陰、勸黃門狀來、^{〔武家〕}武家參日タヒツ免事、

十二月一日、^{〔丙〕}天晴、勸黃門狀來、^{〔遺年預狀〕}遺年預狀、^{〔左大相公〕}左大相公入來、

廿九日、晴、薯蕷百本到來、^{〔戰盛〕}出納織成取次之、

卅日、晴、良玉遣シテ西充寺遣兩種、^{〔先カ〕}

○年末雜載疾病・生死ノ條、^{四四七頁、}延寶傳燈錄ノ前、

〔宣胤卿記〕

○柳原家本

十二月十八日、晴陰、^{〔位カ〕}余依牌新彫刻到來、

十九日、晴陰、昨日位牌文字書之、^{〔影カ〕}爲堀遣之、

○年末雜載學藝ノ條、^{四五九頁、}内裏指圖ノ次、

院方召使
兄弟相論
吉田兼晴

中御門宣胤
自ラノ調
位牌ヲ